

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第555集

や も り

# 矢盛遺跡第18・19次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2009

盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
(独)都市再生機構岩手都市開発事務所  
(財)岩手県文化振興事業団

# 矢盛遺跡第18・19次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成20年度に発掘調査された盛岡市矢盛遺跡第18・19次調査の成果をまとめたものです。

今回の調査では、縄文時代の貯蔵穴、陥し穴、平安時代の堅穴住居跡、穴、溝跡、戦国時代～江戸時代の井戸跡、カマド状造構、穴、江戸時代後半以降の墓などが発見されています。

特に注目されるのは、平安時代のRD158土坑で、穴の底中心に砥石の破片を据え付け、その上に土器破片や炭化材を多く含む土を被せていました。祭祀に関係するのかもしれません。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました（独）都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成21年12月

財團法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 武田牧雄

## 例　　言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田4地割2ほかに所在する矢盛遺跡第18・19次発掘調査の結果を収録したものである。
  - 2 今回の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所および盛岡市都市整備部盛岡南整備課の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
  - 3 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号は、LE 26-0139である。
  - 4 調査次数、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者、遺跡略号は次の通りである（詳細は第Ⅲ章）。
- 第18次／平成20年5月16日～11月5日／金子昭彦・木戸口俊子／5,709m<sup>2</sup>／盛岡市／  
I YM-08-18
- 第19次／平成20年4月16日～10月30日／金子佐知子・金子昭彦・木戸口俊子・小椋勇紀／476m<sup>2</sup>／(独)都市再生機構／I YM-08-19
- 5 室内整理期間と担当者は、次の通りである（詳細は、本文第Ⅲ章）。
  - 6 執筆分担。第Ⅳ章1のs民家区の一部、5のRD 162～181、6のRG 062～065、7は金子佐知子、その他は金子昭彦が担当したが、第Ⅰ章は委託者の原稿を元に作成した。
  - 7 遺構名は、盛岡市教育委員会の命名方法に準拠した。略号は以下の通り、番号は三桁で付け、第17次調査からの続き番号である。RA→堅穴住居跡、RB→掘立柱建物跡、RD→土坑、RF→カマド状遺構、RG→溝跡、RI→井戸跡。
  - 8 遺物の保存処理は、次の機関に委託した。  
鉄製品：岩手県立博物館
  - 9 報告書作成にあたり、次の方に御協力・御指導いただいた（敬称略）。  
小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）、室野秀文・神原雄一郎・菊地幸裕・今野公顯（盛岡市教育委員会）
  - 10 調査成果はこれまでに現地公開資料や略報（「平成20年度発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集）に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。
  - 11 調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
  - 12 遺構等の平面位置は、平面直角座標第X系を利用している（座標値は第5図参照）。座標値は、日本測地系に基づく。基準杭は、当方の希望の場所に委託者に設置していただいた。
  - 13 土層の色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。
  - 14 凡例は、下記に示した。遺構図版内のpは土器、sは石を示す。
  - 15 参考文献は、それぞれの章、節、項の後に記している。



焼土



動いた焼土



灰

## 目 次

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	1
1 位置・地形・調査範囲	1
2 基本層序と検出・出土状況	3
3 これまでの調査と周辺の遺跡	4
(1) これまでの調査	4
(2) 周辺の遺跡	5
III 調査・整理の方法	12
1 野外調査	12
2 室内整理と報告書の作成	14
IV 遺構	16
1 概要	16
(1) 全体概要	16
(2) 調査区ごとの概要	16
2 竪穴住居跡	20
3 掘立柱建物跡・柱穴群	22
4 井戸跡	23
5 土坑	24
6 カマド状遺構	33
7 溝跡	35
V 遺物	60
1 土師器・土師質土器	61
2 須恵器	61
3 陶器・磁器	61
4 土製品	61
5 石器・石製品	61
6 鉄製品	61
7 銅製品	62

8 錢 貨	62
9 その他、自然遺物	62
<b>VI 総 括</b>	62
報告書抄録	100

## 図版目次

第 1 図 遺跡の位置	2	第 17 図 R D 154・155 土坑	48
第 2 図 地形分類	3	第 18 図 R D 156～158 土坑	49
第 3 図 これまでと今回の調査範囲	7	第 19 図 R D 159～161 土坑	50
第 4 図 今回の調査区と周辺の遺構	8	第 20 図 R D 162～164・170 土坑	51
第 5 図 大グリッド	9	第 21 図 R D 165～169 土坑	52
第 6 図 周辺の遺跡	10	第 22 図 R D 171～181 土坑(平面)	53
第 7 図 北区全体図	38	第 23 図 R D 171～176 土坑(断面)	54
第 8 図 中央区全体図	39	第 24 図 R D 177～181 土坑(断面)	55
第 9 図 s 工区、s 公民館区全体図	40	第 25 図 カマド状遺構	56
第 10 図 s 島区全体図	41	第 26 図 R G 059～061 溝跡	57
第 11 図 s 拡張区、s 民家区全体図	42	第 27 図 R G 062～065 溝跡	58
第 12 図 R A 004・005 住居跡	43	第 28 図 遺構内出土遺物	59
第 13 図 R B 047 捜立柱建物跡(1)	44	第 29 図 土師器、須恵器	63
第 14 図 R B 047 捜立柱建物跡(2)・柱穴群	45	第 30 図 陶器、磁器、錢貨	64
第 15 図 R I 063 井戸跡	46	第 31 図 石器	65
第 16 図 R I 064 井戸跡	47	第 32 図 土製品、石製品、鉄製品、銅製品	66

## 表 目 次

第 1 表 矢盛遺跡の調査履歴	11	第 2 表 新旧遺構名対応表	15
-----------------	----	----------------	----

## 写真図版目次

写真図版 1 遺跡遠景、今回の調査区	69	写真図版 17 R D 160～163 土坑	85
写真図版 2 北区(1)	70	写真図版 18 R D 164～166 土坑	86
写真図版 3 北区(2)、中央三角区	71	写真図版 19 R D 167～169 土坑	87
写真図版 4 中央四角区	72	写真図版 20 R D 170～173(1) 土坑	88
写真図版 5 s 工区、s 島区(1)	73	写真図版 21 R D 173(2)～177 土坑	89
写真図版 6 s 工区、s 島区(2)	74	写真図版 22 R D 178～181 土坑	90
写真図版 7 s 公民館区(1)	75	写真図版 23 R F 008・009 カマド状遺構	91
写真図版 8 s 公民館区(2)・s 拡張区	76	写真図版 24 R F 010・011 カマド状遺構	92
写真図版 9 s 民家区(1)	77	写真図版 25 R G 059・060 溝跡	93
写真図版 10 s 民家区(2)	78	写真図版 26 R G 061・062(1) 溝跡	94
写真図版 11 R A 004-005 住居跡(1)	79	写真図版 27 R G 062(2)～064 溝跡	95
写真図版 12 R A 004-005 住居跡(2)	80	写真図版 28 R G 065 溝跡	96
写真図版 13 R A 004-005 住居跡(3)、 掘立柱建物跡	81	写真図版 29 土師器、須恵器、陶器、磁器、 石器(1)	97
写真図版 14 柱穴群、井戸跡、R D 154 土坑	82	写真図版 30 陶器(2)、土製品、石製品、錢貨、 鉄製品(1)	98
写真図版 15 R D 155～157 土坑	83	写真図版 31 鉄製品(2)、銅製品	99
写真図版 16 R D 158・159 土坑	84		

## I 調査に至る経過

盛岡南新都市上地区画整理事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公团（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受け公团が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることになった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることになった。

矢盛遺跡第18次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と、第19次調査については独立行政法人都市再生機構と協議の結果、平成21年度の事業として確定した。これを受けて、第19次調査については平成20年4月1日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と都市再生機構岩手都市開発事務所長、第18次調査については平成20年5月1日に盛岡市長との間で、委託契約を締結した。

## II 立地と環境

### 1 位置・地形・調査範囲

#### (a) 位置

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、平石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は123m前後である。

#### (b) 地形

本遺跡は、南北に見ると、東西方向に延びる沖積段丘と後背湿地（旧河道）の繰り返しになっている。ただし、北側と南側では延びる方向が若干異なり、南側は、遺跡南限となる堰とはほぼ同じ方向で（第3図）、これに平行する現在民家がある場所が段丘上、その南北両側が、これに平行する旧河道となっていた。しかし、北側は、第3図第3～6次調査区の南限が段丘崖となり、その北側が旧河道、南側の集落が段丘上となる。そのため、二つの方向が交差する遺跡の西端では、北側の段丘は途切れているようだ（第3図西端の水田部分）。概ね、段丘上は標高123m以上、旧河道は122m以下である。

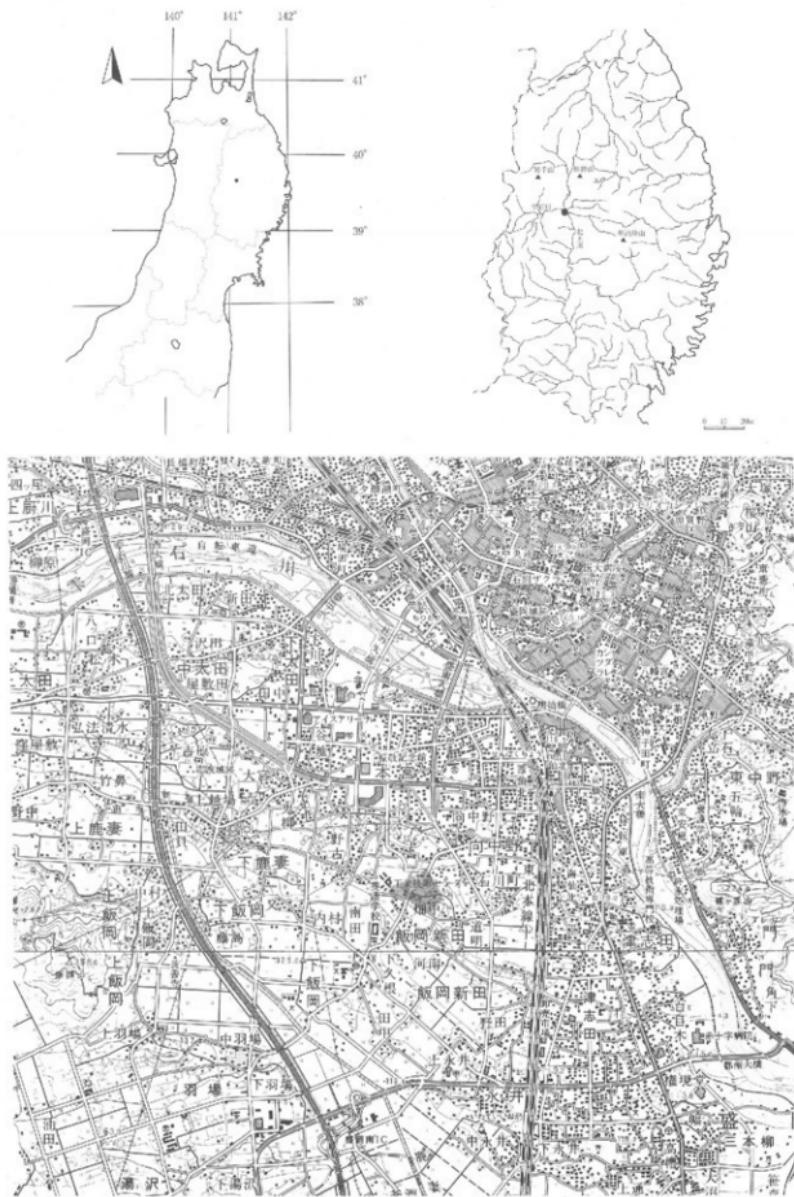
#### (c) 調査範囲

今回の調査範囲は第3図に示した範囲で、盛岡市（以下、市）委託分（第18次）5,709m<sup>2</sup>、独立行政法人都市再生機構（以下、都市再生機構、機構）（第19次）476m<sup>2</sup>である。

調査区は工事の都合等で八ヶ所に分かれており、北区（市約1,965m<sup>2</sup>）、中央三角区（市752m<sup>2</sup>）、中央四角区（西端機構約125m<sup>2</sup>、その他市約720m<sup>2</sup>）、s工区（北東隅機構90m<sup>2</sup>、その他市355m<sup>2</sup>）、s島区（市約1,161m<sup>2</sup>）、s公民館区（市約461m<sup>2</sup>）、s拡張区（市116m<sup>2</sup>）、s民家区（東端機構279m<sup>2</sup>、その他市170m<sup>2</sup>）と称した（第3・4図）。各調査区の呼称の理由と調査結果の概要は、第IV章1を参照いただきたい。なお、“s”とは、南区の意味である。

中央三角区は低地（旧河道）、それ以外は沖積段丘上にある。現況は、北区、s工区、s島区が宅地跡、s公民館区が公民館跡、中央三角区が水田、中央四角区とs拡張区が畑、s民家区が林であり、中央三角区以外は、いずれも削平が著しかった。

1 位置・地形・調査範囲



第1図 遺跡の位置 (1:50,000 盛岡・日詰)

## (d) その他

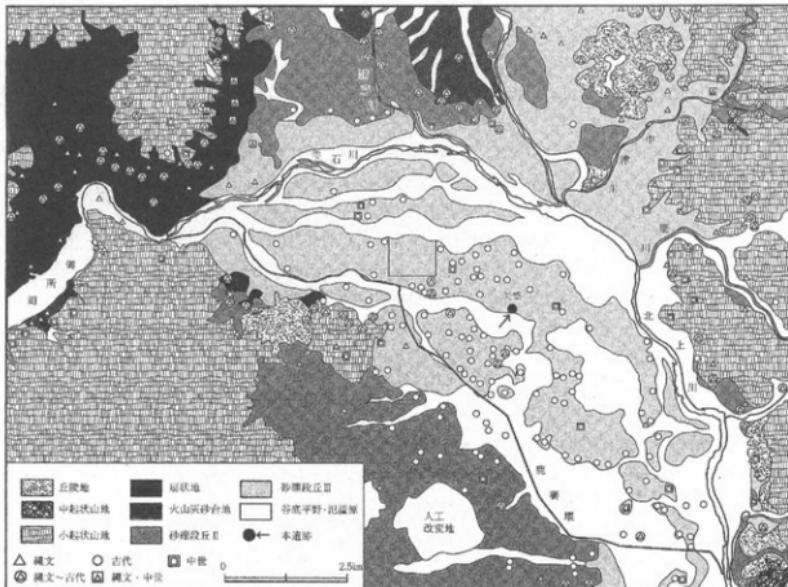
今回調査区の段丘上は、どこも大きく削平されていた。周辺の遺跡にも同様に現在の集落が存在するが（第6図）、どこもここまで削平されていない。遺構検出面の標高は、周囲が概ね122m台なのに、矢盛は削平されていても123m台である。本遺跡の辺りだけ周囲の集落より標高が高かったため、大きく削平されたのかもしれない。現在、矢盛遺跡の辺りは、北側が向中野字野原、南側が飯岡新田と表記されているが、ひょっとすると“矢盛”という遺跡名（古い字名？）は、こうした地形に由来するのかもしれない。身近にある地名辞典等では確認できなかったが。ただし、遺跡範囲南端、遺跡中央を南北に継続する道路の西側に面するNTTの電話柱には「屋森」の呼称が認められた。

## 2 基本層序と検出・出土状況

## (a) 基本層序

本遺跡の立地する低位段丘では、前述のとおり砂礫層を基底として、その上位を水成シルト層、現表土が覆っている。本遺跡では、概ね次のような土層堆積を示している。

I層	表土。層厚20~30cm。
I-II層	暗褐色土
II層	黒褐色土
III層	暗褐色土
IV層	黄褐色土
V層	黄褐色砂礫
	II層よりくすんだ灰色。層厚0~20cm。下部が中世遺構検出面。 クロボク土。旧河道で厚く、層厚0~40cm。本来の古代遺構検出面。 漸移層。層厚0~20cm。実質的な遺構検出面。 粘土質だが地点により砂質。層厚30~40cm。実質的な遺構検出面。 地点により黒褐色を呈する。上位は砂、下位は礫。層厚不明。



第2図 地形分類

I-II層は、基本的に中世末~近世の痕跡が濃い地点にしかなく、南側低地の第12・13次調査区に顕著で、今回の調査区にはほとんど認められない。また、旧河道では、今回の中央三角地に見るよう、II層とIV層の間に黄褐色再堆積層なども認められる。

#### (b) 検出・出土状況

今回調査区の段丘上は、みな削平されて、I層の下は、IV層あるいはV層という状態で、縄文時代の遺構(RD154・155土坑)以外は、大きく削平され、古代の堅穴住居跡はほぼ掘り方しか残っていなかった。また、現況が宅地だったところはカクランが著しく、遺構の残りは特に悪い。北区は、V層まで削平され、また宅地時のカクランがひどかったため、近世末以前の遺構は全く残っていないかった。このような状態のため、遺物の出土も極めて少なく、近世末以降の陶磁器が主体であった。

### 3 これまでの調査と周辺の遺跡

#### (1) これまでの調査

第3・4図と第1表に略記した。報告書文献については、第1表の上に示し、全て番号で引用している。ここでも同じである。なお、今回の調査北区の東側隣接地は(第3図)、平成20年度に盛岡市教育委員会が調査しており、北区と同様埋蔵文化財はほとんど発見されなかつたようである。また、s拡張区の民家東側の続きも、平成20年度に盛岡市教育委員会が調査しているが、第12次調査区の続きをなる溝跡などが発見された。さらに、第3図遺跡範囲中央付近の、第12・13次と今回の調査区に囲まれ、民家の建っている白抜き部分は、宅地整備除外地のため今後も調査予定はない。

矢盛遺跡の調査は、二十次にわたって行われているが、当埋蔵文化財センター以外で調査した分(第2・7・8・15~17次)については報告書が刊行されていないため、詳細は不明である。文献54の第136図に、第2次調査区130m<sup>2</sup>とあり、調査位置も大まかには示されているが、詳細は不明である。位置から推測すると、上述のように調査除外となっている、今回のs民家区の西側にある民家の新築工事に伴って調査されたのかもしれない。その他、西端に調査済み地点が多くあるが、これについても詳細は不明である。

以下、これまでの調査結果について、概要を述べる。第2節で述べたように、本遺跡は、南北方向に見ると、東西方向に延びる沖積段丘と後背湿地(旧河道)の繰り返しで、現在の集落に重なる南北二つの段丘(高地)と段丘に隣接する三つの旧河道(低地)からなるようだ。

北側の旧河道は、東側の細谷地遺跡に続き(文献23)、縄文時代と思われる溝状の陥入穴状造構が列をなす(第3~6次調査区、第12次最北区)。中央の旧河道は、特に遺構は確認されず、遺物もほとんど出土しない(第12・13次調査区、今回の中央三角区)。南側の旧河道の西半は、中世末~近世の居館、集落跡が堰に沿って続く(第10~13次調査区)。南北に走る道路の西側は、盛岡市教育委員会で平成19年度に調査しているが、集落跡の続きを確認されている。第12次調査区では、縄文時代の貯蔵穴も検出された。

本遺跡の段丘上は、ほとんどがIV~V層まで削平されている。周辺の集落(ほとんどが古代の集落跡)よりIV層面で1mほど高く(標高123m)、住みづらかったためか。“矢盛”の名は、ここに由来するのかもしれない。それでも、南側の段丘の西端には、平安時代の集落跡が確認され(第1次調査区、今回s工区、s島区、s公民館区)、堅穴住居跡は本遺跡ではここにだけ確認されている(第1次、s島区)。s島区では、縄文時代の陥入穴状造構、貯蔵穴も検出された。南側の段丘の東半(第12・13次調査区)、そして北側の段丘(今回北区)は、削平が著しいためか、近世末以前の埋蔵文化財はほと

んど確認されていない。

遺跡東側の南半分には不明な点もあるが、基本的には上記地形が続いている。東側（第9・13・14・20次調査区）では、近世末以前の埋蔵文化財はほとんど確認されていないが、南側の段丘上（第14次南側調査区）で、陥し穴状遺構が2基検出されている。

## （2）周辺の遺跡

第6図とその右頁にある文献一覧に略記したので、詳細は文献24・33・52等を参照いただきたい。なお、図幅は、中心をもう少し南にずらした方が適切だが、これより南しばらくは調査報告遺跡がないようなので、あまりずらしても意味がないと思われ、さらに盛岡駅からの距離および本遺跡群を考える上で重要な零石川が入った方が良いと判断して、そのまま変更しないことにした。

また、「略記」には含めていないが、平成20年度にも発掘調査が行われており、盛岡市教育委員会で台太郎遺跡など（詳細不明）、当埋藏文化財センター関連では、向中野館遺跡の第10・11次調査（3,474 + 747 m<sup>2</sup>）、細谷地遺跡の第19・20次調査（1,046 + 856 m<sup>2</sup>）、飯岡才川遺跡第15次調査（410 m<sup>2</sup>）、焼野遺跡第1・2次調査（1,161 + 6,307 m<sup>2</sup>）が行われている。以下、簡単に紹介する。

向中野館遺跡は、中世の館跡を主体とし、北館と南館があるという伝承があった。これまでには、北館を調査してきたようで、今回初めて南館の本格的な調査に入ったが、上端幅約6m、深さ1.5mという立派な堀と土塁が認められたのにもかかわらず、曲輪は、北館と同様生活痕跡が薄く、主体は細谷地遺跡から続く平安時代の集落跡であった（財岩手県文化振興事業団 2009）。詳細は、今年度発刊される報告書を参照いただきたい。

細谷地遺跡の調査は、平安時代集落跡の中心と思われる遺構密集地の南側隣接地である。遺構の密度は薄かったが、柱間2間×2間の竪柱建物跡が2基、畝間状遺構2箇所など、重要な遺構が検出された（財岩手県文化振興事業団 2009）。詳細は、今年度発刊される報告書を参照いただきたい。

飯岡才川遺跡の調査は、道路予定地の狭小な範囲で、南側で周囲の継ぎとなる旧河道が検出されたが、その北側は大きく削平されていて、平安時代の土坑が1基発見されただけである（財岩手県文化振興事業団 2009）。

焼野遺跡は、新規の遺跡で、今年度初めて本調査が行われた。国道46号盛岡西バイパス建設に伴う県教育委員会の事前の試掘調査で遺構が確認されたため、遺跡として認定されたものである。近世を主体とするが、中世に遡りそうな遺構もある。ただし、低地のため、それ以前の遺構はないようである（財岩手県文化振興事業団 2009）。

周辺遺跡の調査は、今回と同様ほとんどが「盛南開発」によるもので、周囲には多くの古代集落が広がるが、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）がほとんどを占める。以下、時代別に概観するが、今回の調査で発見された縄文時代、平安時代、中世末、近世末の遺構・遺物を中心にする。遺跡番号は、第6図の番号である。

縄文時代。今回の調査では、s島区で、縄文時代の陥し穴状遺構（R D 154）、貯蔵穴様の土坑（R D 155）が検出され、石器、石器製作時の剥片、残核、円盤状石製品なども出土している。この地区で最も古いのは、今のところ、向中野館遺跡（2）で出土した後期初頭～前葉の土器のようである（文献14：第15図30）。おそらく、これ以前は、本地区が零石川の氾濫原にあるため、容易には近づけなかつたのであろう。後期前葉以後は、後期中葉、末と点々と出土する（金子 2008：註6）。後期末には、新堰端遺跡（22）で、貯蔵穴様の土坑が10基も発見され（文献72）、晚期前葉には、細谷地遺跡で竪穴住居跡や貯蔵穴様の土坑が検出されているが（文献49）、明確な集落跡は、晚期中～後葉

の本宮熊堂A～B遺跡(8・9)(文献8・35・43・51)、台太郎遺跡(1)(文献40)しかない。なお、野古A遺跡(7)には、大洞C2式土器を模倣したような土師器壺が出土している(文献50:第61図256)。

時期は特定できないが、溝状の陥し穴状遺構が比較的多くの遺跡で検出されており、集中地点としては、野古A(7)、飯岡才川(3)、細谷地(4)、矢盛遺跡(5)がある。特に、飯岡才川、細谷地、矢盛の陥し穴は、三つの遺跡の境界に位置する幅50m近い大きな旧河道に面して列状に掘られた一連のものであり、総数100基近くなりそうである。

弥生時代は、土器以外の痕跡は薄い。前期土器は、細谷地遺跡(4)第9～10次調査区で比較的多く出土している(文献49)。中期後半の土器は、岩手県では少ないが、飯岡沢田遺跡(6)で比較的まとまって出土し、中期の土器は本宮熊堂A遺跡(9)でも出土している。後期は、細谷地遺跡(4)で焼土が検出されており(文献49・55)、土器は台太郎遺跡(1)でも出土している(文献18など)。

飛鳥～奈良時代の堅穴住居跡は、台太郎(1)、飯岡才川(3)、細谷地(4)、飯岡沢田(6)、野古A(7)、本宮熊堂B(8)、種荷(10)、鬼柳A(13)、深瀬I(36)遺跡などで見られる。

志波城が造営され存続した9世紀前半の遺跡は、はっきりしない。集落としては、飯岡林崎II遺跡(35)(文献33)、盛南地区では、遺構としては本宮熊堂B遺跡(8)のRA110住居跡(文献43)くらいしか見あたらない。遺物としては、向中野館遺跡(2)から「厨」と墨書きされた須恵器が出土している(文献52)。この他にも土器片などは出土しているようだが、はっきりしない。

志波城が廃絶された後の9世紀中頃～10世紀初頭にかけては、爆発的に遺構・遺物が増える。第6回に示した調査歴のある遺跡のほとんどに、この時期の遺構が認められる。今回の調査で検出された堅穴住居跡(RA004・005)、土坑(RD156～161)なども、この時期のものと思われる。

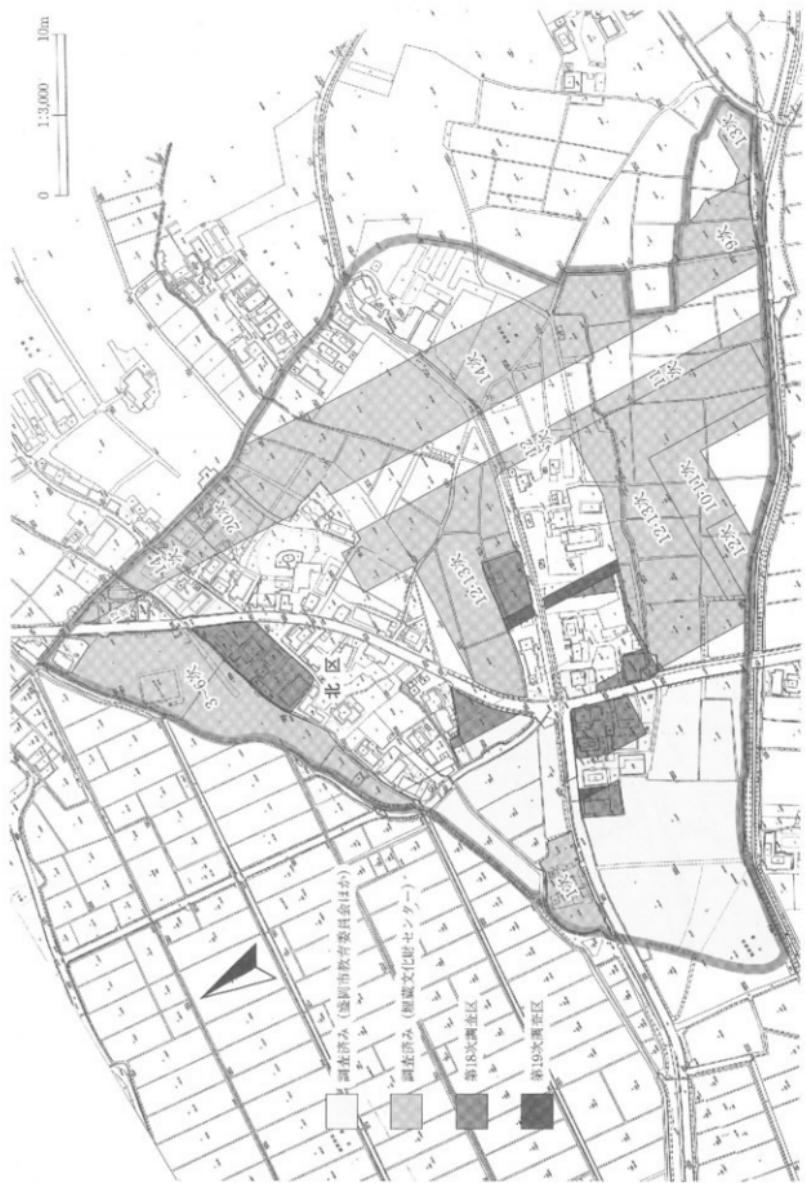
盛南地区で発見された堅穴住居跡は1,000棟を越えるが、その7割以上はこの時期と思われる。まさに、平安時代(1,000年前)の“盛南開発”と言った感じである。こうした動向は、この地区に限ったことではなく、少なくとも岩手県の北上川流域で一般的に認められる傾向である(伊藤 1998ほか)。しかし、9世紀前半における当該地区の壊滅的な少なさに対するこの急激な増加は、尋常なものではなく、何らかの説明が求められる。報告者は、堅穴住居跡その他の遺構・遺物の特徴およびその分布から、様々な場所から多くの人々が短期間に移住してきた結果なのではないかと考えている。おそらく、その背景には、この地区における本格的な水田耕作の開始ということがあろう。

中世。今回の調査では、中世末～近世初めころと思われるカマド状遺構(RF008～011)、土坑(RD165)?などが検出されている。台太郎遺跡(1)で、14～15世紀を中心とした居館跡、330基を超える民衆の土坑墓、小堂と推定される堀区画を伴う掘立柱建物跡などが検出されている。向中野館遺跡(2)は、16世紀ころの城館跡、矢盛遺跡でも、同じころの居館、集落跡が発見されている。矢盛遺跡のそれは、今回のs拡張区の南に広がる低地に展開し、今回検出された遺構は、その北端に位置するものと思われる。

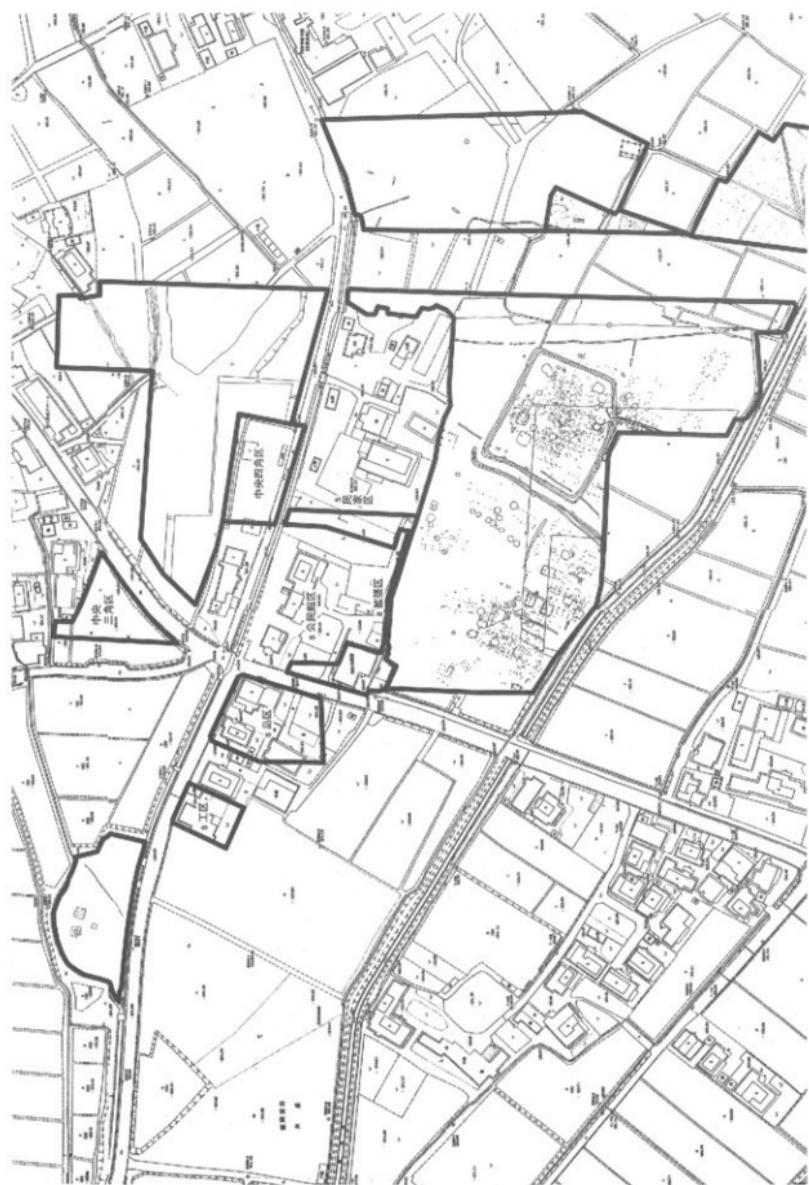
近世後半、特に18世紀以降の痕跡は多くの遺跡に見られる。現在の集落につながるのであろう。

## 参考文献

- 伊藤博幸 1998 「後半期の集落」『岩手考古学』第10号 岩手考古学会  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009『平成20年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集  
 金子昭彦 2008 「東北地方北部における縄文晩期の窓屋墓」『縄文時代』第19号 縄文時代文化研究会

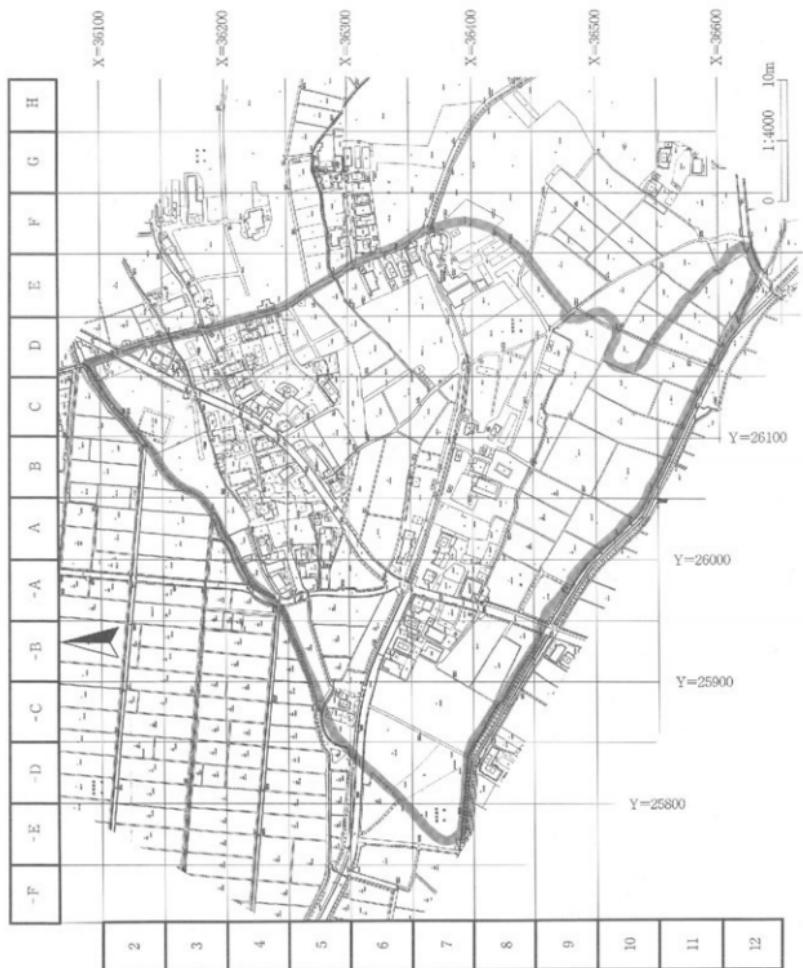


第3図 これまでと今回の調査範囲



第4図 今回の調査区と周辺の遺構

(センター調査分のみ) (S : 1 / 2,000)



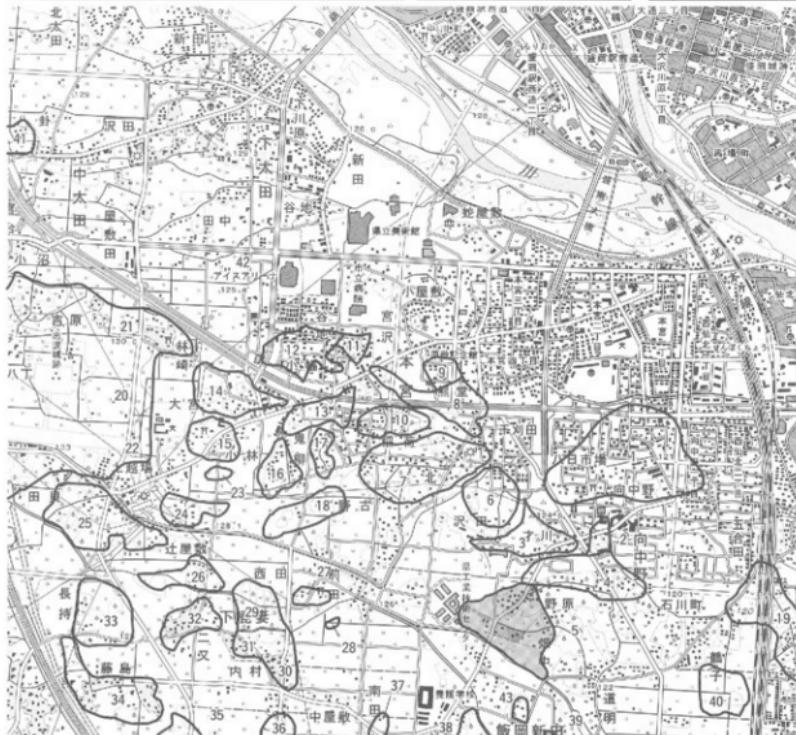
\* 座標は日本測地系第X系による。

第5図 大グリッド

3 これまでの調査と周辺の遺跡

No	遺跡名	内容	文献(書名・本文中にある)
1	古太郎	城郭跡(本館)・石碑、平安郵便一作403丁目 ・中世・五感の内堀、東丸	5, 13, 14, 17, 18, 22, 30~36
2	向中野館	城大丸、平安郵便一作403丁目、本館 ・北丸、西・中世郵便・5感、本館	13, 27, 40, 41, 54, 71, 23, 77, 78
3	鰐頭才用	城大丸、西・中世郵便・5感、本館 ・北丸、西・中世郵便・5感、本館	13, 19, 23, 37, 48, 50, 57
4	綿谷塚	城大丸、西・中世郵便・5感、本館 ・北丸、西・中世郵便・5感、本館	22, 23, 36, 37, 40, 56
5	鮎沢田	城大丸、西・中世郵便・5感、本館 ・北丸、西・中世郵便・5感、本館	25, 30, 39, 41, 71
6	鮎沢沢田	城大丸、西・中世郵便・5感、本館	27, 28, 49
7	野古丘	城大丸、平安郵便・生糸所跡 ・北丸、西・中世郵便・5感、本館	9, 20, 25, 37, 21~23
8	本宮鶯谷B	城大丸、西・中世郵便・5感、本館 ・北丸、平安郵便・生糸所跡、平安	2, 10, 11, 15, 20, 24
9	本宮鶯谷A	城大丸、平安郵便・5感、本館 ・北丸、平安郵便・生糸所跡	6, 8, 23, 43, 51, 53
10	小畠	平安郵便・生糸所跡、平安 ・北丸、西・中世郵便	3~5, 7, 14~16, 23, 25
11	鬼塚A	城大丸、六代遺跡	11, 19, 20
12	鬼塚B	城大丸、平安郵便・生糸所跡 ・北丸、平安郵便	42, 48, 70~73
13	南仙北	城大丸、平安郵便・生糸所跡 ・北丸、平安郵便	44, 70, 75, 80~85
14	志波城跡	平安郵便・生糸所跡、新立原 ・北丸、平安六代遺跡	28号から近畿遺跡研究会 ・北丸、平安六代遺跡
15	林駄	平安郵便・生糸所跡、西丸、西跡 ・北丸、平安郵便	46, 72~74
16	阪河林駄II	平安郵便・生糸所跡、西丸、西跡 ・北丸から多摩の近畿遺跡、西跡	33, 37, 48

No	遺跡名	内容	文献
17	桂町	後(1回) 1, 湿地	9, 32
18	豊岡	遺(平安)	27, 41, 73
19	大室北	平安郵便・10代・生糸所跡 ・北丸、西丸、西跡	6, 47
20	大室	古2代、鐵器、灰、溝 古3代、溝	22, 73
21	野野井	溝	68, 73
22	新堀塚	城郭跡(本丸)、輪内	72, 73
23	新本宮	城本丸・平安大丸	74
24	御前	神社上丸、表門	16
25	内村	山門、土庫	16
26	内村	平安郵便・10代 ・北丸、西丸、大門	79
27	内村B	平安郵便・10代、溝	78
28	西田A	古丸	78 (時 がなし)
29	西田B	古丸	78 (時 がなし)
30	中庭塚	古丸	78
31	高瀬根木	古代	78
32	石井	古代	78
33	足見	古代 近畿周 溝	78
34	内村C	平安郵便・10代 ・北丸、西丸、土庫	67
35	内村D	古2代~平安4期郵便跡 ・北丸、西丸、土庫	67
36	内村E	古2代~平安4期郵便跡 ・北丸、西丸、土庫	67
37	高瀬根木	古代	78
38	石井	古代	78
39	足見	古代 近畿周 溝	78
40	内村F	古代	78
41	内村G	古代	78
42	池野	古代	78



第6図 周辺の遺跡 (1: 25,000 盛岡・小岩井農場)

(『盛岡遺跡地図 (2000年版)』(盛岡市教育委員会2000) より作成)

## 調査報告書一覧表

・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行報告書(年は西暦下二桁)

凡例→□○調査期□×発行報告書合併表△着手事文化振興事業団埋蔵文化財報告書合併表

(△着手事文化振興事業団埋蔵文化財報告書合併表)(平成○年度分) × (※12年度から「△」となる)

〔平成○年度発行報告書合併表〕

No.	書名(略)	年	冊数	No.	書名(略)	年	冊数	No.	書名(略)	年	冊数
1	矢頭、第1次	95	205	21	50周年記念、第2次	01	280	41	小糸(石川県)、	05	409
2	古墳時代 第1次	95	226	22	東北(宇摩田12世紀)	02	297	42	矢頭、第6次	05	488
3	小糸、第2次	96	244	23	昭和4~6、第1~5次	02	418	43	新井村、第4~5次、昭和5~15	05	470
4	鳴瀬(平成2年度)	96	245	24	大太郎、第23次	03	415	44	白石町、第24次	06	496
5	小糸、第3次	96	265	25	白石町、第25次	02	416	45	本宮市(青森)、第27次	06	497
6	鳴瀬(平成3年度)	97	296	26	大太郎、第26次	03	417	46	42周年記念、第9~冷次	06	480
7	小糸、第4次、第5次	98	307	27	佐賀県(伊万里)	01	138	47	7年17年度	06	490
8	六代町、本宮市	98	281	28	伊豆南島(第5次)	03	419	48	相模原市、葛原、少美	07	494
9	新井(平成4年度)	98	282	29	野古山、第12次	03	420	49	田舎塚(第9次)、第10次	07	500
10	桃源(平成5年度)、石巻市第1次	99	293	30	野古山、第15次	03	421	50	芦ヶ久、第23~24~29次	07	504
11	桃源(平成5次)、鬼怒川、火打	99	308	31	白石町、第16次	03	422	51	本宮市(青森)、第26~29次	07	507
12	宮古町、第12次	99	309	32	相模(平成15年度)	03	423	52	伊豆野原、野々、6次	07	503
13	鳴瀬(平成4年度)	99	311	33	伊豆南島(第3次)	04	427	53	伊豆南島、櫛ヶ、8次	07	504
14	向中町(今一橋)、古土野沢	00	321	34	夷隅3次、昭和34年	04	451	54	1~1	08	508
15	向中町第3次、小糸第10次	00	328	35	新井郡長坂、第17次	04	457	55	御前崎(第13次)、第14次	08	513
16	鳴瀬(平成11年度)	00	350	36	前畠村、第15次	04	458	56	御前崎(第15次)	08	514
17	今人部、第22次	01	365	37	御前(平成10年度)	04	456	57	御前(第12次)、第13次	05	313
18	今人部、第23次	01	369	38	本宮市(第15次)	05	459	58	2~2	08	296
19	鶴来(平成12年度)	01	370	39	本宮市(第13~15~20次)	04	467	59	御前(第13次)	08	504
20	鶴来(第10次)	02	371	40	白石町、第51次	06	468	60	奥州市(第12~13次)	09	524
21	鶴来(第10次)	02	377					61	42周年記念、第6~17次	09	535
								62	平成20年度	09	549

## ・岩手県教育委員会発行報告書

⑤ 1979年「東北新幹線開通準備委員会調査報告書」岩手松文化財報告書第35集

⑥ 1982年「東北新幹線自転車道延長延伸文化財調査報告書第35号」岩手松文化財調査報告書第65集

⑦ 1990年「着手易(手取川)遺跡詳報分冊企画報告書」岩手松文化財調査報告書第86集

⑧ 1992年「着手易(手取川)遺跡詳報分冊企画報告書」岩手松文化財調査報告書第99集

⑨ 1992年「着手易(手取川)遺跡詳報分冊企画報告書」岩手松文化財調査報告書第101集

⑩ 1993年「着手易(手取川)遺跡詳報分冊企画報告書(平成4年度)」岩手松文化財調査報告書第93集

## 盛岡市教育委員会発行報告書

【第四回の歴史跡(○)、現状(△)】

【第四回の歴史跡(○)、現状(△)】

【第四回の歴史跡(○)、現状(△)】

No.	書名(略)	年		No.	書名(略)	年		No.	書名(略)	年	
69	伊豆南島(1985年)	1985		24	17~19年(伊豆南島)発掘調査報告書	1999		80	平成8~9~10年度	1990	
70	平成10年度	1990		25	平成11年(伊豆南島)発掘調査	2000		81	平成11~14年度	2000	
71	伊豆の、60年発	1997		26	平成12年(伊豆南島)発掘調査報告書	2001		82	平成15~16年度	2005	
72	伊豆の60年発	1997		27	平成13平成14年(伊豆南島)	2002		83	平成17~18年度	2005	
73	伊豆の、心春	1998		28	平成15~16~17年(伊豆南島)	2007		29	平成15~16~17年(伊豆南島)	2008	

\* 1~4回の才川、第7~13次

新谷地、第12次、矢淵、第9次

\* 2~矢淵、第10~11次、向中野台

・第9次、古太郎、第58次

第1表 矢盛遺跡の調査履歴(即)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査分中心)

調査 回数	調査 年	概 要 (位置・年度) 年度	調査 回数	調査回数 (年度)	調査 回数 (回数)	調査 回数 (年度)	出 土物	文 獻	備 考
1	着手易(伊豆南島)	1,560	+	2002.6.3~8.6	調査実施次回目 ノ元湯瀬古跡発掘調査3、Ⅲ回路1	9回飛来~10~11世紀頃 10世紀後半~11世紀頃	単面瓦から15~16世紀まで 片	34	簡
3	北埼玉公 臣の河岸	1,560	+	2002.6.3~8.6	調査実施次回目 ノ元湯瀬古跡発掘調査3、Ⅲ回路1	9回飛来~10~11世紀頃 10世紀後半~11世紀頃	単面瓦	35	簡
4	足利市	1,410	+	2006.5~6.16	調査実施次回目 ノ元湯瀬古跡発掘調査1	10世紀後半~11世紀頃 11世紀後半	単面瓦	41	簡
5	駒形市	1,366	+	2004.6.12~6.16	調査実施次回目 ノ元湯瀬古跡発掘調査1	10世紀後半~11世紀頃 11世紀後半	単面瓦	42	簡
6	阿仁市	3,055	+	2006.4.10~5.31	古代墳墓2、古墳建立初期の初期	10世紀後半~11世紀頃 11世紀後半	土器等	54	簡
10	愛城市	147	+	2006.6.3~6.15	8件80件~心原保、糞堆、廐跡、廐跡、廐跡、廐跡	10世紀後半~心原保、糞堆、廐跡、廐跡、廐跡、廐跡、廐跡	26件泥質灰陶片 1件	58	簡
11	市街地	1,861	+	2006.4.10~6.15	8件80件~心原保、糞堆、廐跡、廐跡、廐跡、廐跡	10世紀後半~心原保、糞堆、廐跡、廐跡、廐跡、廐跡、廐跡	21件泥質灰陶片 1件	59	簡
12	盛岡市	18,343	+	2002.5.1~11.29	調査実施1(北浦街)、砂防工区3 (北浦)・手取川河口	10世紀後半~11世紀頃 11世紀後半~12世紀初頭	土器底片、灰陶片、中壇屋 型土器、高輪形土器、筒形土器 等	60	簡
13	新井町	1,940	+	2007.7.2~11.11	調査実施2(手取川河口)	10世紀後半~11世紀頃 11世紀後半~12世紀初頭	筒形土器、高輪形土器、灰陶片 等	61	簡
14	向中通3番 丁	7,147	+	2007.7.7~10.5	調査実施2(手取川河口)	10世紀後半~11世紀頃 11世紀後半~12世紀初頭	筒形土器、高輪形土器、灰陶片 等	62	14次の回
15	吉 森	12次調査より12年(森 上)~1公尺区間	1,261	+	2007.10.22~12.31	10~13次調査で確認された16基の 墓落終了時の様子	土器底片	63	西高
16	盛岡市	1,404	セシナー	2008.4.11~4.25	なし	なし	土器底片3	64	なし

### III 調査・整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) 調査経過

第Ⅱ章に記したように、今回の調査区は、北区、中央三角区、中央四角区、s工区、s島区、s公民館区、s拡張区、s民家区の八箇所ある（第3・4図）。

調査は主として一班で行い、金子昭彦・木戸口調査員+作業員約25名で行ったが、s民家区は、今年度の向中野館調査区がすぐには入れなかつたため、急遽4～5月に、金子佐知子・小椋勇紀調査員+作業員約25名が調査に入ることになった。また、北区、s工区、s島区、中央四角区は、同じ盛岡南新都市土地区画整理事業に関係する細谷地、焼野遺跡の調査と同時並行することになり、金子昭彦調査員+作業員約13名で調査を行つた。その理由は、地主や工事の事情で連続して入れない調査区があり、その間別の遺跡の調査に入らざるを得ず、また調査区の多くが狭小で、削平のため埋蔵文化財がほとんど確認されなかつたので、同時並行が可能であったためである。なお、今年度の矢森遺跡の調査は計画変更が多く、当初の予定第18次9,987m<sup>2</sup>、第19次579m<sup>2</sup>を大幅に下回つた。

上述のように、4月16日(木)に別班がs民家区の調査に入った。屋敷境の大木の伐採は済んでいたが、木根はそのままだったので、その処理に苦しんだ。また、狭小な調査区の中央に電柱が立っており、さらに残存する木根のため、重機による表土剥ぎが難しく、結局人手で処理せざるを得なかつた。そのため、面積の割に時間がかかっている。

5月9日(金)に、本來の班がs公民館区に入り、13日(火)～14日(水)の午前まで重機で表土を剥いだ。排土は、ダンプで道路の西側まで運んだ。続いて検出・精査作業に入ったが、カクラン以外はほとんどなく、狭いため、三角低地の粗掘にも入り、23日(金)からは急きょ調査を要請されたs拡張区の粗掘にも入り、検出・精査を続けた。6月9日(月)には、以上の調査区の部分終了確認が、県教育委員会、市教育委員会、委託者で行われ、s民家区、s拡張区、s公民館区はほぼ終了した。部分終了確認の際、三角低地は全部剥がなくて良いということになり、切りの良いところで終了した。s拡張区は、すぐ工事に入り道路となつた。

6月10日(火)にはs工区の表土剥ぎを重機で行い、作業員はその間北区東端にトレンチを入れた。17日(火)～18日(水)には北区の表土剥ぎを重機で行つた。東端は厚かつたのでパワーショベル2台稼働したが、西側は予想以上に浅かつたため、かなり早く終了した。作業員は、そのままs工区の検出・精査に入り、ここもカクラン以外はほとんどなかつたため、23日(金)からは北区の検出作業も並行して行つた。北区もカクラン以外ないことが分かり、またすぐに入れる調査区がないことがわかつたため、7月2日(火)からは、本格的に二班に分かれ、木戸口調査員ほかは、向中野館、細谷地遺跡の調査に入った。7日(月)にはs工区の調査は終了し、当面北区のみとなつた。

7月14日(月)には、中央三角区、s工区、北区の部分終了確認が行われた。その際、北区の掘立柱状の痕跡を記録するよう盛岡市教育委員会から指示があり、その作業を開始した。ところが、砂礫層のため釘が刺さらない。穴を掘って土で埋めそこに釘を打つという手順で行わざるを得ず、また、このころ雨が多くなつたため、作業ははかどらず、8月5日(火)までかかつた。北区の一部が墓地であったことは調査に入る前からわかつており、改葬は済んでいたのだが、人骨の一部が残り、その再改葬が8月5日(火)～8日(金)に行われた。8日(金)には北区の調査終了。5日(火)からは既に中央四角

区の粗掘に入っていたが、丁度盆休みということで重機の手配がつかず、20日(木)に重機による表土剥ぎを行った。続いて検出作業に入ったが、カクラン以外何もなく、9月5日(金)中央四角区の調査を終了した。続いて入れる調査区はなく、10月3日(金)まで焼野遺跡の調査に入った。この間、9月にs島区民家の撤去が行われた。

10月6日(月)からs島区に入り、試掘を行った。8日(水)～9日(木)には重機による表土剥ぎが行われたが、農繁期ということで経験の少ないオペレーターしか来れず、調査区がズタズタになって、その後始末に20日(月)までかかり、やっと検出作業ということになった。他の調査区に比べて遺構は比較的多く残っていたが、やはりカクランでかなり壊されていた。27日(月)5時に中央四角区、s島区終了確認が行われ、11月5日(木)にセスナ機による空中写真撮影、6日(金)に今年度の矢盛遺跡の調査の一切を終了した。

作業員数は、周辺遺跡の調査の終了開始などで、登録員数全体で、6月後半は7名増え32名、7月は5名減で26名、8月以降は2名増で28名と少し変化した。北区、中央三角区、中央四角区、s民家区、s工区は、委託者により当方の希望の地点に測量用基準杭を打設していただき、s島区はs工区基準杭から、s公民館区、s拡張区は、s民家区から当方で基準点移動した。北区近くにプレハブを設置し、6月15日(木)に器材搬入、11月11日(木)に搬出した。プレハブから遠い調査区も多かつたので、仮説トイレをs島区→s工区に置き、調査に応じて移動した。盆休みは、8月13日(水)～18日(月)で、6月14日(土)朝、7月24日(木)未明には、震度5を超える大きな地震があったが、被害はなかった。

## (2) 特記事項

### (a) グリッドについて

盛岡市教育委員会の指示に従った。平面直角座標(第X系)に合わせ、大グリッドは50×50mのメッシュで、東西方向に西からA、B、Cのアルファベット、南北方向には北から1、2、3のアラビア数字を付し、1A、1B等と呼称した(第5図)。座標値は、第5図に記したが、数値は日本測地系である。小グリッドは、大グリッドを25等分し、南北方向に北から1、2、3のアラビア数字、東西方向には西からa、b、cのアルファベットをつけ、1A1a等と呼称した。

### (b) 遺構の名称について

遺構名も、盛岡市教育委員会に準じている。略号は以下の通りで、番号は三桁で付け、第17次調査からの継ぎ番号である。R A→竪穴住居跡、R B→掘立柱建物跡、R D→土坑、R I→井戸跡、R F→カマド状遺構、R G→堀、溝跡。

野外では第○号住居跡、第○号土坑、○号土坑のように作業順に便宜的に名前を付け、報告時に全て付け直した。新旧遺構名対応表は、第2表に示したので参照いただきたい。なお、旧番号の土坑、溝跡には、不手際により、金子佐知子班(s民家区)と金子昭彦班(その他調査区)とで別々に番号を振ってしまったため、番号が重複する。ただし、金子佐知子班は、○号、金子昭彦班は、第○号と、微妙な違いは存在するが。また、本遺構名は、第18次から第19次調査区の順につけることが求められており、さらに、それの中では概ね時代順に付け直したため、一部わかりづらくなっている点をお詫びする。

### (c) 調査方針

当初予定されていた調査面積は、上述のように多く、また調査区が細かく分かれているため能率が悪く(その都度重機を頼まなければいけないなど)、さらに当初予定に入っていた第3図第10・11次

調査区南側の三角地は、多くの埋蔵文化財が見込まれるが、調査に入るのは10月と聞いていたので、全てをこなせるか不安であった。とにかく先へ調査を進ませることを心掛け、早め早めに調査終了を見越して、委託者に次の調査区はいつ入れるか連絡を取った。しかし、工事計画の変更等で調査面積が大幅減になり、その代りに別の遺跡の調査が入り、また今年度の矢盛遺跡調査区は削平が著しく埋蔵文化財がほとんど確認されなかつたこともあって、半ば以降は二班に分けて細々と調査を続けることになった。

#### (d) 気象ほかの調査条件について

春先の温暖化傾向をそのまま引きずり、7月上旬までは平年より気温が高く、6月21日(土)には30℃を超えた。ただし、降雨は一週間に一度程度で、作業ははかどった。7月後半は雨が多く、明らかに作業に支障となつた。“ゲリラ豪雨”が話題になつた年である。8月前半、梅雨明け後は暑い日が続いたが、33℃を超えたのは8月6日(火)のみで“常識の範囲内”的暑さであった。8月下旬は異常気象で、雨が多く最高気温が20℃を下回るような日もあった。丁度、中央四角区の旧河道を調査していたため、水汲みにやや苦労した。9月は雨が比較的多かったが、作業の支障となるほどではなく、またここ数年に比べて気温も低めであった。9月末～10月上旬は季節の変わり目で、時雨のような雨が降つた。10月中旬～11月中旬まで、少雨で秋晴れの日が続き、作業ははかどつた。

その他に作業の支障となつたのは、s民家区の狭さと木根程度である。中央三角区の耕土置場にも困つたが、結局調査区半分で調査は割愛されたので、それほど支障になつてない。

#### (e) 遺構の精査、遺物の取り上げについて

遺構の完掘時には、基本的には層ごとに掘り上げ、遺物も層ごとに取り上げているが、時間がなくして一括した場合があり、また層に変化がなくて識別しにくかつた場合には一括せざるを得なかつた。残りの良い土器や、床・底面出土遺物は、出土状況を図や写真等で記録したが、該当例は少ない。

#### (f) 遺構等の実測について

平面図は、基本的には一般的な簡易造り方で縮尺1/20で作成したが、大きな遺構や調査範囲については、光波測量機による測距（平板実測の測量の部分を測量機で行ったのに相当）を基に小縮尺で図化している。

## 2 室内整理と報告書の作成

### (1) 室内整理

#### (a) 整理経過

第19次調査分は、調査員が、12月～1月、作業員が、12月～1月前半、第18次調査分は、調査員が1～3月、作業員が1月後半～3月まで、整理作業を行つた。2月まではベテランの作業員であり、遺構、遺物の量も少なかつたため、作業ははかどつた。3月は経験年数の少ない作業員に変わつたが、要領が良く、また作業も、図版類の本貼、収納作業を残すのみだったので、それほど支障はなかつた。

#### (b) 遺構図面の点検・修整について

s民家区以外の平面図と断面図の照合等の図面点検は、原則として現地で行つた。合わない場合は計り直したが、どうしても合わない場合やセクション・ポイントがないなどの不備は、そのままにしほ本文中にその旨記している。ただし、1/20の縮尺で1mm（原寸では2cm、報告書では0.5mm）の違いについては誤差範囲とし、特にふれていない。報告書に嘘を書くべきでないという方針（金子1998：p.10、13）に従つた。

## (c) 遺物の整理について

近世末以降の陶磁器以外は出土量が少なく、また小片がほとんどだったので、それほど選別に悩むことはなかった。掲載基準については、第V章参照。遺物の実測・拓本・トレースは作業員が行い、実測図は調査員が点検した。

## (2) 報告書の特記事項

## (a) 遺構、遺物図版の凡例について

本書冒頭の例言の下にある。

## (b) 遺構出土遺物の掲載・記載の位置について

遺構出土の遺物も第V章で掲載・記載しているが、遺構図版の後に遺構内遺物集成図として縮尺を落としてまとめてある（第28図）。出土状況は、第IV章の各遺構の項を参照。

## (c) 遺物の分類・掲載順序について

遺物は、基本的に種類ごとに、出土位置の順（遺構内→遺構外）に並べている。

## (d) 遺物の記載の仕方について

遺物の記載は基本的に観察表で行い、表に入りきらない場合や表の項目に当てはまらないことは本文中に記し、その頁を表の「本文記載」という欄に記した。観察表の見方等は、第V章冒頭に記した。

## (e) 註・引用参考文献の掲載位置について

それぞれの節の最後にまとめている（例えば、第1節土師器・土師質土器）。

## (f) 本文、表、図版のレイアウトについて

原則として本文は本文、図版は図版とまとめている。報告書は通して読まれるということはほとんどないと思われる所以、“探し易さ”を優先すべきと考えたためである。

## 参考文献

金子昭彦 1998『埋蔵文化財センターの考古学』『紀要』XⅢ (60) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

第2表 新旧遺構名対応表

・堅穴住居跡		・土坑		・田		・新		・田		・新		・田		・新	
旧	新	旧	新	田	新	田	新	田	新	田	新	田	新	田	新
第1号		第1号	R D 158	1号	R D 162	9号	R D 166	17号	R D 181	18号	R D 179	19号	R D 170	20号	R D 168
	R A 004		R A 005	2号	K D 163	10号	R D 167								
				3号	R D 164	11号	R D 175								
・獨立柱建物跡		第4号	R D 159	4号	R D 169	12号	R D 176								
		施5号	R D 161	5号	R D 180	13号	R D 177								
		施6号	R D 156	6号	R D 172	14号	ボツ								
		第7号	R D 157	7号	ボツ	15号	R D 173								
		施8号	R D 155	8号	ボツ	16号	R D 174								
														第1号施1 R D 154 施し穴状造構	
						・カマド状遺構		・溝跡							
						旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
						1号	R F 008	第1号	R G 061	2号	R G 064	3号	R G 065	4号	R G 063
						2号	R F 009	第2号	R G 059						
						3号	R F 010	第3号	R G 060						
						4号	R F 011			1号	ボツ				

## IV 遺構

### 1 概要

#### (1) 全体概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の袋状土坑1基、陥し穴状遺構1基、平安時代の竪穴住居跡2棟、土坑6基、中世末(16世紀)～近世のカマド状遺構4基、土坑1基、井戸跡2基?、古代～近世としか特定されないが中世末～近世の可能性が高い、掘立柱建物跡1棟、柱穴2個、溝跡7条、近世末の墓壙を中心とした土坑19基である。

調査区は、北区、中央三角区、中央四角区、s工区、s島区、s公民館区、s拡張区、s民家区の八ヶ所に分かれる。中央三角区は旧河道(低地)だが、他はみな沖積段丘上にある。段丘上はⅣ～V層面まで削平され、遺構が確認されたのは南区(調査区の前に“s”がつく場所)だけであり、s民家区も主体は近世末である。出土遺物も、非常に少ない。中央三角区には、I-II層～II層が確認されているが、遺構は検出されなかった。詳細は、次項参照。調査経過等については、第III章に記した。

#### (2) 調査区ごとの概要

調査区は、東西南北で呼称したかったが、南側は細かく分かれているため、まず大きく、北区、中央区、南区に分けた。中央区に二つ、南区には五つの細別区を含んでいる。数が多く、遺構が検出された南区は、基本的に特徴的なもので呼称し、南区であることを示すため、最初に“s”をつけた。

##### (a) 北区(第7図、写真図版2・3)

第18次(盛岡市)調査区のみである(約1,965m<sup>2</sup>)。宅地跡で、沖積段丘上であるが、調査区北端の向こうは段丘崖であった。砂利層まで削平整地され、検出面(V層)の標高は、123.8m前後である。近世末以前の遺構は確認できなかつたが、近世末以降のさまざまな痕跡が認められた。

この中で最も古いと思われるのが、第7図の北端中央付近にある墓壙群である(写真図版3の上から二段目)。調査前に改葬済みのことであったが、人骨が出土し、再び改葬した。一緒に寛永通宝やキセルや鏡などが発見され、近世末を主体とすると思う。その他は、いずれも明治時代以降、宅地になった後の産物と思われるが、幾つかの注意される痕跡について記しておく。

まず、調査区中央、井戸跡付近に存在するおびただしい数の“柱穴状土坑”である(第7図、写真図版2最下段右)。並んでいるように見えたので、半裁してみたが、覆土は非常に黒くカカフカし、ひげ根も多く、植物を植えた痕のように見えた。確かに等間隔で並んでいるが、間が1mもなく近すぎる。南側に池跡があることから、庭木を植えた痕なのではないかと考えた。ただし、終了確認の際に、盛岡市教育委員会から記録を残してほしいと言われたので、縮尺1/20の平面図を作成したが、後で他の盛岡市教育委員会の方から「横裁痕として良いのではないか」と言われたため、大縮尺の図は掲載しなかった。なお、“柱穴群”中央に見られる溝状のものは木根の痕、その北側は墓壙である。寛永通宝が出土した“柱穴”が2個あるが(第7図No.1・2)、墓壙群が起源なのではないかと考える。

調査区西端にも、おびただしい数の“柱穴状土坑”が検出された(第7図、写真図版2下から二段目右)。東側の一角は、“T”状に並んでいるように見え(写真図版2最下段左)、覆土も他より際立って黒く見えたが、建物跡だとする確信は持てなかった。周囲の“柱穴”も、大部分は浅く20cm

以下で、形や大きさもマチマチであり、上記以外に並んでいるように見える所はなかった。なお、この辺りに焼土が二箇所見られ、うち一つは、第7図の基準杭Aの西側の大きな円に相当し、大きな深い土坑の中心に焼土が見られた。いずれにしろ、削平されてから後の産物と思われ、記録はとらなかった。

調査区北端を東西方向に延びる溝跡(写真図版3最上段左)。覆土は、II層再堆積に近く砾多量に含み、明らかに最近のものというほど新しくはない。東、西端の状況から表土よりは古く、墓壙との重複から、それほど明瞭ではないが、より新しい(写真図版3二段目右)とわかった(溝の方がより黒く、溝底に砂が沿う)。そして、西寄りに溝中央に鉢?が据えられていた(第7図、写真図版3最上段右)。特に奥くはなかったが、鉢内の砂利が苔むし、北側に肥溜が見られることから、小便器の一例のではないかと推測された。そして、この溝が完全に地境に沿っていることから、明治時代~戦前あたりの集落内排水路と考えた。盛南開発前の地図(第3~5図の元図)に確かに描かれており、北東方向に流れているようだ。なお、第7図の溝跡が途切れている部分は、下げるによるものである。

明らかな井戸跡は3基発見された(第7図)。南東のものが最も良く残り、ほぼ垂直に掘り込み、中央に円形に石を組んで、中に砂利を入れて埋めていた(写真図版3下から二段目左)。石組の周囲は、締まりが悪く、覆土は、中近世の井戸跡に似ていなくもないが、黒土が単独で存在することではなく、砂利に黒土が混じるといった状態である。元の地主の70歳くらいのおばあさんが嫁入りの時にあったそうである。北端中央付近にある井戸跡も、垂直に近く掘られ覆土も似るが、締まりが悪い。東端にある井戸跡は、レンガ状に調整された角礫で組まれ、おそらく重機によって破壊され埋められていた。

その他。西側の肥溜(第7図)は、コンクリートが貼られていた。鉢?の西側で溝が四角い痕跡を切っているように見えるが(第7図)、実際には四角い方が新しい。その南東側の小さな四角い痕跡は、コンクリートで埋まっているが、リン分が多いのかすぐ草が生え、おそらくトイレだったのではないかと思う。鉢?南側の大きな四角は、豎穴状に掘りくぼめられ、中から大きな徳利などが見つかった。

#### (b) 中央三角区(第8図、写真図版3)

第18次(盛岡市)調査区のみである(752m<sup>2</sup>)。調査区が三角形状なので、このように仮称した。水田跡である。基本的には後背湿地(低地)であり、IV層面の標高は、沖積段丘上の中央四角区、s工区より1m低い122.8m以下である。南端は、東西に延びる旧河道の一部であるが、全体的にII層(クロボク土)の発達は弱い。調査区(第8図)の北東~南西辺に沿って現道があるが、調査区より1mほど高く、交通量も多い。北側は民家があり、西側は宅地工事中であった。そのため、耕土が難しく、人力で半分ずつ調査するということになり、西側半分に土山を築いたのだが、遺構が検出されず、立地から西半分もその可能性が低いということで、s民家区、s拡張区、s公民館区の終了確認時(6月9日(月))に、残り半分は、盛岡市教育委員会による工事前の立会調査となった。

堆積土は、北端がI層30~50cm、II~III層30cm、IV層、中央付近がI層40cm、II~III層20~30cm、IV層、南端がI層40cm、II層30cm、黄褐色再堆積層10~30cm、黒褐色土10cm、IV層である。I層は水田上で、底に酸化鉄が広がる。IV層の多くは砂質だが(V層?)、旧河道部分は粘土質である。

旧河道は、南にいくほど顯著に深くなるわけではなく、基本的に底は平らで、酸化鉄が所々見える。東西に延びるこの旧河道は、中央四角区に統くもので、前年度の調査区でも検出されており(報告書:岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集)、東の方では深く谷を刻む地点がある。

水田跡ということもあって、確認されたのは植物等の自然現象による痕跡(シミ)ばかりであった。第8図には、風倒木痕は、2箇所しか記されていないが、実際には基準杭A辺りにもあり、その北側

にも比較的大きなシミが認められた。遺物は、遺構が検出されなかった割には多く、土師器も 22 g で、s 公民館区より多い。ただし、主体は近代以降の陶磁器片などで(ビー玉多数)、いずれも北側の沖積段丘上に広がる集落跡からの流れ込みであろう。

#### (c) 中央四角区(第8図、写真図版4)

西端は、s 民家区から続く宅地間を結ぶ道路予定地(幅 6 m)で第19次(都市再生機構)(約 125 m<sup>2</sup>)、他は第18次(盛岡市)調査区である(約 720 m<sup>2</sup>)。調査区が方形なので、このように仮称した。烟跡である。大部分は、沖積段丘上だが、北端は旧河道である。ただし、その主体は北側の前年度調査区にある(報告書: 岩手県文化振興事業团埋蔵文化財調査報告書第534集)。IV層面の標高は、段丘上 123.9 m、旧河道 122.6 m。地形は、いずれも東西方向に広がるもので、西側は、旧河道は中央三角区、沖積段丘は、s 公民館区、s 烟区、s 工区に続き、東側の続きは、前年度調査区にある(上述)。

地形の変化は著しく、段丘上はIV層面までほぼ平らに削られていた(写真図版4)。旧河道は、II層以下は残っていた。元は水田として利用され、それに対し段丘上は旭だったようだが、その境をなぜか地形にそのまま合わせず、段丘を少し削て南側に水田面を広げていたようで、砂利が露出していた。削られた段丘崖には、木を植えていたようで、その痕跡が認められた。調査区内段丘東端は、大きなゴミ穴等の変化が顕著で、深く削られ砂が露出していた。写真図版4上段では、段丘が途切れているように見えるが、人工的な変化によるものである。段丘上は、溝状の山芋の栽培痕跡が顕著で、北端は遺構(溝跡)のようにも見えるが(写真図版4上段)、数か所トレンチを入れた結果、これも同じものとわかった。旧河道の黒土(厚さ 20~40 cm 程度)も全部剥がしたが、遺構はなかった。

出土遺物もほとんどなく、土師器も 8 g のみで、北区に次いで少なかった。

#### (d) s 工区(第9図、写真図版5・6)

北東隅 90 m<sup>2</sup>(調査区北辺約 8.5 m、東辺約 20 m)は、第19次(都市再生機構)調査区だが、現地で正確な境界が不明だったので、図面には記さなかった。その他は第18次(盛岡市)調査区である(355 m<sup>2</sup>)。宅地跡。工業技術センターに隣接するので、“s 工区”とした(“s”は上述)。s 烟区、中央四角区に続く沖積段丘上にあるが、おそらく宅地時に、東側を除いてIV層まで削平された。井戸跡、電柱より東側は、III層(II層に近い土)が北側では 20~30 cm、南側では 10 cm ほど残っていた。表土は、北側が整地砂利層で 50~70 cm、南側は耕作土で 20~40 cm ほどである。IV層面の標高は、123.8 m 前後。

宅地時のカクラン(基礎やゴミ穴、ゴミ穴からは動物骨が出土)は多く、縮尺 1/100 の図に記録してきたが、報告書掲載は見合せた。ほとんどが溝状や土坑状のもので、R D 159~161 土坑などの遺構を根絶やしにするほど大きなものは少なかったが、土坑の南側に、調査範囲に沿って東西に広がる池跡があり、長さ 8 m、幅 2~3 m ほどの規模があった。また、その南西側に、直径 2 m ほどの倒木痕?、調査区北西端に 4×2 m ほどの住宅基礎? があった。写真図版5の下段に見える(半裁中)。

R I 063 井戸跡、R D 159~161 土坑、R G 061 溝跡が検出された。土坑は平安時代、井戸跡は中~近世、溝跡はそれ以前と思われるが、人工的なものかどうか定かでない。平安時代の堅穴住居跡 3 棟が検出された第1次調査区は、北西に 50 m も離れていない。

削平のため、遺物の出土は僅かであったが、遺構外から 129 g の土師器片などが出土している。

#### (e) s 烟区(第10図、写真図版5・6)

第18次(盛岡市)調査区のみである(約 1,161 m<sup>2</sup>)。宅地跡で、「中島モータース」というオートバイ、自転車店があったところもあり、その一字を探って “s 烟区” と仮称した(“s”は上述)。s 工区、中央四角区に続く沖積段丘上にあるが、ほぼ全面削平を受けており、一部 III 層が残存していただけで(北東端など)、ほとんどが IV 層面まで削られている。宅地時のカクラン(基礎や穴)も多かったが、時

間的余裕がなく画面に記録することはしなかった。写真図版5～6で雰囲気を感じ取っていただければ幸いである。IV層面の標高は、123.9m前後。

R A 004・005住居跡、R D 154～157土坑、R G 059・060溝跡が残存していた。縄文時代の遺構（R D 154・155）は、掘りこみ面が低いため残りがよかったのか、比較的深かったが、古代の遺構（住居跡、R D 156・157）は、掘り方や底しか残っていないかった。溝跡は、古代以降としか特定できない。

削平されているため、遺物の出土は僅かであったが、遺構外から163gの土師器片などが出土しており、土師器の出土は、全調査区の中で最も多い。

#### (f) s 公民館区(第9図、写真図版7・8)

第18次(盛岡市)調査区のみ(約461m<sup>2</sup>)。北側は宅地、南側は公民館跡地で、上記のように仮称した。南端は定かでないが、基本的には、中央四角区、s鳥区も載る沖積段丘上に立地する。IV層面の標高は、123.6m以下。本調査区の東側に民家があり、その進入路によって、調査区が南北に分断されている(第9図、写真図版7)。この道路部分は、以下のように、本調査区では埋蔵文化財がほとんど認められなかったので、終了確認時に調査を割愛することに決まった。北側は、現状は庭だが、以前に鍛冶屋？があったらしく、深い豊穴が掘られ、馬のてい鉄などが出土した。南側も、公民館建築で大きな地形の変更が行われ(排水土管、水道管理設備)、大部分は表土直下IV層という状態であったが、西側の道路際と、南側の調査区の北東隅は、改変を免れII層(クロボク土)あるいはIII層が残っていた(第9図、写真図版7の最下段～8の最上段左)。なお、公民館の基礎等の大きな穴は、縮尺1/100画面に位置を記録してきたが、s公民館区の大部分はそれ以前に全体が大きく削平されていて、穴のない部分でも大きな変更が行われているので、誤解を招かないよう報告書掲載は見合せた。

遺構は、平安時代のR D 158土坑が、II層残存部の近くで確認されただけである。なお、現道に沿って、南北方向に延びる溝跡のようものが、西端に認められた(写真図版8)。IV～V層(緻密砂)面にはんやりした輪郭で、遺構かどうか疑問に思ったが、北端では鍛冶屋？の豊穴に切られ、また出土遺物もないため、新しいとする根拠もなく精査を進めた。覆土は、上部はんやりした褐色土、下部は汚れたIV層再堆積(IV層そのもの?)で、断面記録時に境界線を引こうとしたが(写真図版8の中段)、非常に不明瞭で、本当に遺構なのかさらに疑問に思った。完掘時、南端土管の近くで、近現代の陶磁器片やプラスチックのゴミが多量に出土した。覆土がより灰色がかり酸化鉄も多かったため(水田の土に近い)、溝跡がカクランされているのかと思よく見たが、確認できなかった。そして、溝跡全体をよく見ると、北側では東側に曲がり、完全に現道に沿っていることがわかった。ここに至り、この溝は、現道が舗装される前の側溝で、南端では、水がよどんでいたため、ゴミが残っているのだとわかった。壁は、緻密な砂層、底は、所々粗砂で砂利が露出しているところもあった。

出土遺物は、非常に少なく、遺構外では、土師器も21gしか出土していない。

#### (g) s 拡張区(第11図、写真図版8)

第18次(盛岡市)調査区のみ(116m<sup>2</sup>)。宅地内道路予定地で、基本的には前年度に調査が済んでいたのだが(報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集)、実際に工事する段になって幅が足りないということで急きょ調査が行われたため、“拡張区”と呼んだ。基本は畑地だが、西端は公民館跡地、東端は、荒地であった。中央四角区、s公民館区などが載る沖積段丘上にあるが、調査区東端は、南北に延びる谷の西端に相当するようである。IV層面の標高は、123.2m前後である。

畑地も含めて、IV層(V層緻密砂層?)まで削平されており、西端は土管埋設により大きくなされ、中央付近にも深いカクランが認められた。1m以上下がったが完全に底を出すことはできず、中から丸太などが出土したが、正体は不明である(写真図版8下段のロープを張ってある範囲)。

## 1 概要

西端に、中近世のR I 064井戸跡、東端に中世末以降のR B 047掘立柱建物跡、柱穴群が認められた。さらにその西に中世のR F 008～011カマド状遺構、R D 165土坑がかかるが、s民家区に含めた。R I 064は、前年度(前述)に南側で井戸跡が多く検出されたことと、覆土、断面形から、井戸跡としたものだが、立地的にはやや疑問である。

出土遺物は、非常に少なく、遺構外では、土師器30g、須恵器壺胴部片125g程度である。

### (h) s民家区(第11図、写真図版9・10)

東端幅6mが宅地間道路予定地で、中央四角区に続く第19次(都市再生機構)調査区であり(279m<sup>2</sup>)、その他は、第18次(盛岡市)調査区である(170m<sup>2</sup>)(第11図)。第Ⅲ章に記したように、別班が調査した。樹齢100年前後の大木がそびえたつ屋敷林で、中央四角区などと同じ沖積段丘上に立地する。IV層面の標高は、123.5m前後である。全体的にIV層まで削平され、特に南端～南東隅は深く削平され、砂(V層)が露出していた。調査区を南北に貫く溝の西側ではIV層上に黒褐色土が20cmほど堆積している。この部分から検出された土坑、溝跡はこの黒褐色土層を掘り込んでいることが確認されたものが多い。調査範囲が狭く、西側は畑で、東側は民家があり、調査区中央付近には電柱が残っていたため、重機が入りづらく、表土剥ぎから人力で行わざるを得なかった。排土は、調査区南側に出した。木根も、人力で処理せざるを得なかった(伐採は済んでいた)。

中世のカマド状遺構4基(R F 008～011)、土坑1基(R D 165)が南端で検出されたのは、中世末～近世の居館、集落跡が南側に隣接するからであろう(報告書:岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集)。その北側では、古代以降としか特定できない溝跡が1条(R G 063)、近世以降の比較的新しい時期かと推定される溝跡が3条(R G 062・064・065)、近世末以降の土坑が19基検出された(R D 162～164・166～181)。土坑の多くは、墓壙と思われ、R D 168土坑からは鉄鍋とキセル、R D 172土坑からは錢貨(寛永通宝)、R D 171土坑からは鉄製品(刀子?)が出上した。

調査前から、土壘状の盛土とそれに平行する溝が注意された(写真図版9)。土壘状の盛り土は写真と図面の記録を探り、精査を進めた結果(写真図版10上段)、近世末以降の墓壙と思われる土坑と重複しており、それより新しいこと、出土遺物(第28図)は、5・6の陶器片、2・3の磁器片などで、19世紀以降のものも含んでいることから、近世末より新しく、さらに、地境にあるという位置から、おそらく東側の宅地を整地した際に盛り上げたものではないかと推測されたので、記載を割愛した。

溝跡は調査区中央を南北に土壘状の盛土と平行して継続しており(現地呼称、1号溝)(写真図版9・10下段)、住民から「最近まで苗床に水を引くために使っていた」という証言があり、同じく記載を割愛した。この他、調査後に遺構ではないと気付いて、記載を見合わせた土坑が4基ある(現地呼称、7・8・14・24号土坑)。以上は、いずれも、基本的に写真、図面等の記録は残っている。

## 2 竪穴住居跡(第12図、写真図版11～13)

s島区で重複する2棟を検出し、片方は前年度盛岡市教育委員会の調査区に続く。大きく削平されていたため、基本的に掘り方のみだが、RA 004はカマド焚口焼土も検出した。出土遺物はないが、古代であることは間違いない。矢盛遺跡の調査面積は、これまでに5万m<sup>2</sup>を超え、遺跡推定範囲の約半分を調査しているにもかかわらず、竪穴住居跡の検出数は非常に少なく、s島区から100mも離れていない第1次調査区で検出された3棟のみで(第4図)、平安時代のものである。

### RA 004住居跡(第12図、写真図版11～13)

＜位置・検出状況＞ s島区中央西端、7-B 10t～12v グリッド。IV層(V層?)面ジョレンによる検出作業中、焼土(焚口)を確認。周囲にカクランが多く、一目瞭然というほどではなかったが、黒土で埋まる四角い溝が焼土を取り囲んでいることに気づき、竪穴住居跡のカマド焚口と掘り方などわかった。ただし、この時点では住居は1棟のみで、北西側にもう1棟あるとわかったのは、全体をクリーニングし、残存状況を実測するときになってからである。＜重複関係＞北西側、RA 005住居跡が重複。掘り方しか残っていないので、はっきりしないが、C-C'断面から判断すると(RA 004が10層、005が5層に帰属すると仮定して)、RA 005の方が新しい可能性があるが、そうした場合、焚口焼土の存在がやや不都合であるが(床下にあったとしても良いのだが)、カマド煙道が確認できなかったのは、RA 005に壊されたためとすることもできる。＜図・精査状況＞完掘時掘りすぎて、A'側の上場、B'側の上場、B'近くの柱穴のB側の上場が、平面図と断面図で合わない。＜平面形・規模＞掘り方から判断すると、約5.1×4.8m程度の隅丸方形か。軸方向はN=20°～W。＜覆土＞残っていないと思う。＜床面・掘り方・貼床＞削平のため、床は確認できなかった。掘り方。壁際に顯著なのは、壁溝があつたためかもしれない。その他も、柱穴が途切れる北西付近を除いて、ほぼ全体に広がり、門凸が顯著な一般的な掘り方である。砂質V層だが、柱穴、溝底などの深い部分は、砂利層である。＜壁・壁溝＞壁は、残っていない。壁溝らしきものは認められるが、掘り方と区別できない。＜柱穴＞検出面では確認できず、大部分は掘り方完掘中に掘られてしまったので、覆土も十分に観察できなかった。そのため柱穴かどうか明確ではなく、並んでいるように見えない。＜カマド＞焚口焼土を確認しただけである。北壁中央より東寄りにあったようだ。焼土の残存状態から判断する限り、あまりしっかり焼けていない。＜その他の付属施設＞検出されなかった。＜遺物＞なし。＜時期・所見＞掘り方から、古代と思われる。

#### RA 005住居跡 (第12図、写真図版11～13)

＜位置・検出状況＞ s島区中央西端、7-B 9t～10u グリッド。西側調査範囲外(前年度盛岡市教育委員会調査区)に統く。RA 004住居跡で述べたように、IV層(V層?)面で、RA 004全体をクリーニングし、残存状況を実測するときになって、もう1棟北西側に竪穴住居跡があることに気づいた。ただし、RA 004と異なって、黒土が明瞭に四角くなることはなく、北西側は明らかに途切れていて、住居らしくはなかった。＜重複関係＞南東側、RA 004住居跡が重複。掘り方しか残っていないので、はっきりしないが、C-C'断面から判断すると(RA 004が10層、005が5層に帰属すると仮定して)、RA 005の方が新しい可能性があるが、そうした場合、焚口焼土の存在がやや不都合であるが(床下にあったとしても良いのだが)、RA 004のカマド煙道が確認できなかったのは、RA 005に壊されたためとすることもできる。＜図・精査状況＞完掘時掘りすぎて、A'側の上場が、平面図と断面図で合わない。＜平面形・規模＞掘り方から推測すると、一辺約5m程度の隅丸方形か。＜覆土＞残っていないと思う。＜床面・掘り方・貼床＞削平のため、床は確認できなかった。掘り方。RA 004住居跡と異なり、検出された範囲の北西側はほとんど認められなかった。砂質V層だが、柱穴、溝底などの深い部分は、砂利層である。＜壁・壁溝＞壁は、残っていない。壁溝らしきものは認められるが、掘り方と区別できない。＜柱穴＞検出面では確認できず、大部分は掘り方完掘中に掘られてしまったので、覆土も十分に観察できなかった。確認されたものは、形や配置からも、柱穴でない可能性が高い(カクランか掘り方の一部)。＜カマド＞検出されなかった。＜その他の付属施設＞検出されなかった。＜遺物＞なし。＜時期・所見＞掘り方から、古代と思われる。

### 3 挖立柱建物跡・柱穴群（第13・14図、写真図版13・14）

s拡張区の東半～s民家区南端にかけて34個の柱穴を検出、そのうち西側の24個を使い1棟の挖立柱建物跡を想定した。柱間は4間×3間の構成で、軸方向は南側に隣接する中世末の居館、集落跡に一致するなど、それらしいが、柱間寸法が2mである。出土遺物もなく時期は特定できない。北区では、掘立柱建物跡に似た近世末以降の植栽痕が認められている（本章冒頭の概要参照）。

#### R E 047 挖立柱建物跡（第13・14図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞ s拡張区東端～s民家区南端、8A7n～11pグリッド付近に位置する。IV層面黒土で明瞭に検出。中央に調査範囲外を含むものもあって、調査時には、北と南で二つの異なる軸方向があるように見え、2棟と考えていたが、全体図を作成した結果、軸方向はほぼ一つで、1棟と考える方が自然と思うようになった。建て替えもあるのだろうが、関係のない柱穴もあるようで、特に南端にはそうした柱穴が並ぶが、南側に隣接する前年度調査区（報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集）には、本遺構に連続するような柱穴は認められていないので、一緒に報告する。＜重複＞南東端に、R D 165土坑、R F 008～011カマド状遺構が認められるが、重複しているかどうか未定かでない（これより東側にも柱穴は認められるが）。中央部分等にカクランがある。＜図・精査状況＞現地で平面図と断面図の照合を行えなかったため、A-A'断面は、ほとんど合わない。B-B'断面は、セクション・ポイントB'の位置が合わず、B'側から2番目の柱穴のB側の上場と石の位置が合わない。＜平面形・規模＞中央に調査範囲外があり、推測だが、桁行4間約8m、梁行3間？約6mの長方形で、南側に庇が付く可能性もある。＜方位＞軸方向はN-68°-W。南側に続く前年度調査区（前述）の中世末の堀、建物跡の基本となる軸方向に一致する。＜柱間寸法＞建て替えがあるようで、さらに対応する柱穴が明確ではなく、正確ではないが、ほぼ2mのようである。

＜柱穴＞本建物跡に直接関係しそうなのは24個で、その他、南側に列状に6個、中央に2個検出した。図に示したように、上面に礫が検出されたり、上面や断面に柱痕跡（黒く塗りつぶしたものや文字で記したもの）が認められたりしたものがある。柱穴覆土は、10YR2/1黒色～10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック混じるシルト～砂質の土で、混入物の割合は柱穴によって異なる。柱穴No 7は、覆土はそれらしいが、浅く断面形も柱穴らしくない。No 15・16は、カクランの底から検出された。No. 19は、中からも礫が多く出土し、黄褐色土が多いせいか他と違って見える。No 25は、2個の柱穴の重複だったようで、西側の方が新しいように思われた。No 32は、底に礫が検出された。検出面はIV層面然としているが、その下は砂質で、特に検出面から20～30cm下がるとかなり砂っぽくなる。柱穴の壁～底は、基本的に緻密な砂だが、No 19・25は深いため底は砂利である。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞軸方向が前年の中世末（16世紀）を主体とする居館、集落跡に一致し、周囲にこの時期と推測される遺構（カマド状遺構）も存在するので、この時期の可能性もあるが、柱間寸法は、あまりそれらしくない。柱穴の検出状況から、最低1回の建て替えがあるようである。

#### 柱穴群（第14図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞ s拡張区中央東寄り、8A9g～iグリッド付近に位置する。IV層面黒土で明瞭に検出。5個検出したが、半裁した結果、底が狭く覆土もそれらしくないものは擬似現象として省いたが、念のため位置だけ記しておいた。柱穴と認定した2個も、あまりそれらしくなく確認はない。

南側に隣接する前年度調査区（報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集）では、周間に柱穴は一切認められていないので、本造構も擬似現象の可能性がある。＜重複＞特にないと思う。＜図・精査状況＞断面図は記録していない。＜平面形・規模・方位＞北側に調査範囲外があることもあり、不明。＜柱穴＞2個の柱穴覆土上は、10YR3/1黒褐色シルト、IV層ブロック、粒子含む。周囲の擬似現象とそれほど大きく変わらない。検出面はIV層然としているが、その下は砂質で、特に検出面から20～30cm下がるとかなり砂っぽくなる。柱穴の壁～底は、緻密な砂。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土は、中世末（16世紀）の可能性もあるとは思うが、他に時期推定の材料がなく、不明。近現代の可能性もなくはない。

#### 4 井戸跡（第15・16・28図、写真図版14）

s工区に1基、s拡張区西端に1基検出した。s拡張区南側に隣接する調査区では、中世末～近世の居館跡、集落跡が確認され、多くの井戸跡が検出されている（報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集）、今回検出された井戸跡は遠く離れて点在する。時期を特定できる遺物は出土していないが、覆土等の特徴から、中世末～近世の可能性がある。

##### R I 063井戸跡（第15図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞s工区北側中央、6-B 18h～19jグリッド。砂質IV層面で検出。周囲は削平されて表土下IV層であった。RG 061溝跡の中央が潰れていたが、覆土が溝と基本的に同じで輪郭がはっきりしなかったので、遺構の重複ではなく、溝の一部か、カクランを受けているのだと思っていた。とりあえずトレーナーを入れたが、深いので半裁に切り替えた。底はすり鉢状に見えたが、そのうち底に砂利の再堆積があるのだとわかり、それを掘り上げたら明瞭な井戸跡になった。＜重複＞RG 061溝跡が中央付近を横断するが、断面に重複が認められないので、溝と同じか、より新しいものと思われる。北側に柱穴状のカクランあり。＜図・精査状況＞A、A'両側の上場、完掘時掘りすぎて、断面図と平面図合わない。＜覆土＞断面形は、崩れた箱築研状を呈するが、下部の「箱部分」（7層）は砂利汚れ再堆積、その上2/3は基本的に黒褐色土だが、下に行くほど黄褐色砂利の混じりが多くなり、その境に位置する6層はIV層汚れ再堆積土。なお、上の黒褐色は、II層（クロボク土）より明るく、一様で、中近世の覆土に似る。＜平面形・規模＞上面は崩れている。3.8×2.8m程度の不整円。＜断面形・深さ＞崩れた箱築研形。約1.4m。＜壁・底＞壁～底は、大部分が砂礫層だが、壁の一部、テラス状になっている箇所は一部砂（V層）。6月後半の調査時には湧水なし。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞上半層の性質から、II層残存時に埋まつたものと思われ、前年度当センターが調査した矢盛遺跡第12・13次調査（報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集）の井戸跡と似ることから、中～近世と思われる。

##### R I 064井戸跡（第16・28図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞s拡張区西端、8-A 6s～7tグリッド。緻密砂質IV～V層面、黒土で明瞭に検出。北側の調査範囲外に続く。周囲は、厚さ55cmの表土（畠土）の下IV層という状態で、削平されている。規模が小さく、最初は土坑に登録した。前年度井戸跡が多数検出された、当センター調査の第12・13次調査区（報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集）の北側に隣接するが、より標高の高い所に位置するに比較的浅く、果たして湧水が期待できるか疑問であったので、

しばらく土坑としていたが、前年度の井戸跡に断面形、覆土はよく似ており、最終的に井戸跡に変更した。<重複>なし。<図・精査状況>完掘時掘りすぎて、中間場など、断面図と平面図合わないところがある。<覆土>上半9層までは、Ⅱ層再堆積土と砂利の混土で、埋め戻したものか。中位10層は、細かい縞状のV層再堆積土で、水成自然堆積か。下部1/4の“箱”状の部分は、もろく崩れた土で、Ⅱ層再堆積土と砂利の混土。<平面形・規模>直径約1.2m程度の円形か。<断面形・深さ>くさび形の先端部に“箱”がついたような形。約1m。<壁・底>壁がほぼ垂直に落ちる部分(厚さ40~50cm)までは、緻密な砂質V層か。上部は砂質のIV層とも考えられるが、境は見えず、東側では途中に黒い緻密な砂層(厚さ10cm)が入るので、V層と考えておいた方が良いと思う。東側の基盤の上下、それぞれ15cmは通常の緻密砂層である。その下は、砂利層だが、底は特に小礫多く、大きな礫が露頭している。5月後半の調査時には湧水なし。<出土遺物>検出面の周囲から、須恵器破片が出土している(第28図1)。<時期・所見>上半層の性質から、Ⅱ層残存時に埋まったものと思われ、覆土と断面形が、前年度調査した矢張遺跡第12・13次調査(上述)の井戸跡と似ることから、中~近世と思われる。

## 5 土 坑(第17~24・28図、写真図版14~22)

井戸跡の可能性の高いものを除く28基検出された。縄文時代2基(R D 154・155)、平安時代6基(R D 156~161)、中世1基(R D 165)、近世末以降19基(R D 162~164・166~181)である。

縄文時代のものは、溝状の陥し穴(R D 154)と貯蔵穴(R D 155)様のものである。ともに、s島区から検出された。出土遺物はなく、時期は形と類例からの推測である。

平安時代のものは、s工区で3基(R D 159~161)、s島区で2基(R D 156・157)、s公民館区で1基(R D 158)検出された。R D 157~159には出土遺物があり(第28図)、土師器が主だが、R D 159には鉄鎌が出土している。R D 158は、底面中央に砥石らしきものの破片を据え、直上の土に炭化材が顯著に見られるなど、特徴的な土坑である。

中世のものは、s民家区で検出。カマド状造構と重複。南側の、中世末~近世の居館、集落跡が検出された前年度調査区(報告書:岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集)の続きか。

近世末以降の19基は、全てs民家区から検出されたものである。規模から土坑ではなく、柱穴状土坑とすべきか迷ったものも2基ある。当初、比較的規則的に並んでいるように思われ、規模の大きい掘立柱建物の一部かとも思われたが、柱穴寸法が合わず、屋敷境にあることから土坑として調査した。埋め戻している覆土の状況から墓壙か関連する施設の可能性が高いものが多い。

### R D 154土坑(第17図、写真図版14)

<位置・検出状況> s島区東のR G 059溝跡の西側(第10図)。7-A 5 f~6 eグリッド。IV層面黒土で明瞭に検出したが、根等によるカクランで汚れていた。半裁するまでは、立地とこれまでの調査結果から擬似現象の可能性も考えていました。<重複>北西の壁に根穴らしい柱穴状のカクランを受けている。<図・精査状況> A側の上、下場、A'側の下場、完掘時掘りすぎて、平面図と断面図合わない。通常より浅かったため、底付近は砂礫層の内堆積で埋まっているためわかりづらく底と勘違いしている恐れがあると思い、トレチ状に深掘りしてみたが、確かに底であった。<覆土>上位はクロボク土で細かく分かれる。中位はⅡ~V層再堆積、下位はⅣ~V層の汚れ再堆積。自然堆積と思う。底付近は細かく分かれるので、上位よりゆっくり堆積したか。<平面形・規模>溝状の長楕円形。約

$4.15 \times 0.6\text{ cm}$ 。<断面形・深さ>長軸方向は両側にオーバーハングするが、北壁のオーバーハングは実際にはこれほどではなかった可能性がある（掘り過ぎ）。短軸方向は不整V字形。約70cm。<壁・底>検出面から35cm（北端は40cm）IV層、その下はV層だが、上部15cmは砂、底は砂利層である。砂利層のため、底の状態は十分に観察できなかった。<出土遺物>なし。<時期・所見>形と類例から、縄文時代の陥し穴の可能性が高い。周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。

#### R D 155 土坑（第17図、写真図版15）

<位置・検出状況> s島区北西寄り（第10図）。7-B 2~3 x グリッド。IV層面で輪郭不明瞭な褐色土を検出した。植物関係のカクランと思ったが、周囲のものと同様に一応半裁してみたところ、カクランの下に深い土坑が存在することがわかった。<重複>上面および南半周囲にカクランを受けている。<覆土>比較的薄い黒褐色土と褐色土の互層を基本とし、縮まりが悪い層が多い。自然堆積か。上部はV層砂利層の再堆積で、中位上面8層は特徴的な土で、有機物が腐ったものか。<平面形・規模>約 $1.3 \times 1.3\text{ m}$ の隅丸方形か。<断面形・深さ>ピーカー形。約90cm。<壁・底>検出面から35cm（北端は40cm）IV層、その下はV（砂利）層であるが、南側はIV層との間に20cmの緻密な砂層を挟む。底は縮まりの悪い砂利層である。南西側の壁はオーバーハングしていたが、これは地山が縮まりの悪い砂利層であったことで、調査時に崩れたか、あるいは掘りすぎの可能性が高い。底は、北から南へ傾斜している。<出土遺物>なし。<時期・所見>形と類例から、縄文時代の貯蔵穴の可能性が高い。周辺の地形から、縄文時代後～晩期の可能性が高い。

#### R D 156 土坑（第18図、写真図版15）

<位置・検出状況> s島区中央南西寄り（第10図）。7-B 11~12 x グリッド。IV層面黒土で明瞭に検出した。<重複>なし。<図・精査状況>南北隅付近は掘りすぎ。<覆土>二層で、上層は黒土、下層はソフトローム状の汚れIV層再堆積。<平面形・規模>小判形あるいは隅九長方形。約 $1.9 \times 1.3\text{ m}$ 。<断面形・深さ>浅皿状。約12cm。<壁・底>壁～底は、軟らかなIV層で、底は平ら。底の南西隅に黒っぽい斑が見られ、掘り足らないのかと一部掘り下げてみたが、植物等の自然現象のようであった。<その他>検出面に焼土が見られたが、面として広がる箇所はなかった。<出土遺物>なし。<時期・所見>覆土から、平安時代の可能性が高い。

#### R D 157 土坑（第18・28図、写真図版15）

<位置・検出状況> s島区南西端（第10図）。7-B 14~15 u グリッド。IV層面黒土で検出。底近くまで削平されていたため、不整形で、土坑かどうかはっきりしなかったが、黒土に焼土粒と土器が見えたので、土坑だろうと考えて半裁した。<重複>なし。<図・精査状況>完掘時掘りすぎ、平面図と断面図はほとんど合わない。南北隅付近は掘りすぎ。<覆土> R D 156 土坑と同様、二層で、上層は焼土粒多い黒土、下層はソフトローム状の汚れIV層再堆積。その他の項目参照。<平面形・規模>ほとんど削平されてはっきりしないが、小判形か。約 $1.5 \times 1.1\text{ m}$ 。<断面形・深さ>浅皿状。約8cm。<壁・底>地点によって異なり、シルト化した砂層（IV層？）～礫層（V層）で、淀んでいる所は全て砂利層である。壁はほとんど残っていない。<その他>検出面に焼土が見られたが、それほど赤くなく、焼土粒の中にブロック状のものが混じり、さらに濃淡がモザイク状に入り組んでいて、現地性のものではないと判断した。また、No 2~4土器の下に柱穴状の落ち込みが認められたが、人工的なものかどうかははっきりしない。覆土は、上部2cmが、10YR2/1黒色、砂質シルト、焼土粒多い、

下部10cmが、10YR1.7/1黒色、砂質シルト、の細かい粒子状の炭化物、灰多く、焼土ブロック含む。

＜出土遺物＞(出土状況)西半部の2層下部を中心に土師器片が出土した(第18・28図、写真図版15)。まとまりからNo 1～4と番号を振った。前述のように、No 2～4の下部には柱穴状の落ち込みが認められた。No 1は、甕の胴部片(47 g)で、外面を上に向いているように見え、底から3～4cmで北から南に傾斜して出土。No. 2は、異形土器の破片(89 g)で内面を上に向いていたように見えた。No. 3は、比較的大きな甕の破片で(104 g)、外面を上に、ほぼ水平で口縁部を北に向けて出土した。No. 4は、甕の底部破片(48 g、6×4 cm、1/3周弱)で、外面を上に向けて出土した。4は、他より低い位置から発見され、2層より下から出土している可能性がある。(遺物)No 1～4以外に47 gの土師器小破片群(掲載品以外は、全て5×3 cm以下の甕の胴部片)が出土し、計335 gの土師器が出土した。No 1と4は、掲載基準を満たさなかった。明確に時期を特定できるものはないが、いずれも口縁部の作り出し(ヨコナデ)がはっきりせず、東北地方北部に多い形だとは言える。第28図1～3を掲載した。

＜時期・所見＞出土土器と覆土から、平安時代(9世紀後半～10世紀)の可能性が高い。

#### R D 158土坑 (第18・28図、写真図版16)

＜位置・検出状況＞s 公民館区南部中央(第9図)。7-A 25 o グリッド。II層が残っている地点から外れ(第9図)、IV層まで削平されている地点で、周囲には公民館時を中心にしたカクランが多く、また本土坑の上面もカクランを受け、遺構かどうか疑っていたが、半裁した結果、明瞭な黒土中に土器や炭化物が出土し、はっきりした。段丘上だと思う。II層残存部に近かったため、完全なる削平を免れたのであろう。＜重複＞なし。＜図・精査状況＞断面図作成時に測点を垂直に落とさなかつたらしく、セクション・ポイント(おそらくA')が平面図と合わない。＜覆土＞II層(黒土)再堆積土にIV～V層ブロックが混じったもので、最下層(7層)には炭化物が顕著に入る。完掘時、7層上面で止めたところ、上面は底と同様ほぼ一面平らであった。＜平面形・規模＞小判形か。約1.2×1.0 m。

＜断面形・深さ＞逆カマボコ形。約45cm。＜壁・底＞壁は垂直に近い。壁の上部はIV層と思うが砂質なところもあり、その下～底は緻密な砂質V層で、上部との境界ははっきりしない。北側は椭円形に窪む地点があり、覆土を残しながら掘り下げてみたが、平面自体が不整形であることもあり、意図的なものとは思われなかった。植物等によって黒土が落ち込んだものであろうか。なお、この穴は砂礫層である。＜その他＞覆土、底、出土状況の項目参照。

＜出土遺物＞(出土状況)底中央7層を中心とし、土師器、炭化材、礫などが出土した(第18・28図、写真図版16)。写真図版16最上段左には、7層を掘り残した三つの土山が見えるが、一番上(東)が土器(No. 1)とその左(北)側に小礫、中央が赤い表面ツルツルの礫(チャート?)片、一番下(西)が焼土ブロックの混じった炭化材の残骸である。中央の礫の下からは、さらに砥石?の破片が埋設されたような状態で出土した。No 1土器は、土師器胴部破片で、内面を上にして、底から4～10cmのほぼ水平の状態で(僅かに東から西に向かって傾斜)出土した。なお、精査時に動いてしまったので省略したが、南北壁近くからも土師器片が立ったような状態で出土した。写真図版16の上から二段目左側に僅かに窓がある。底中央から出土した砥石?片は、あたかも自然に埋まっているかのように動かず、断ち割ってみても、あまりそれらしくない土で、上面からも掘り方のプランを明確にすることはできなかった(薄く剥いでみたが)。ただし、明らかに人為による使用痕を有し、石の下にも黒土が薄く広がっていることから、埋設していたことは確実であろう。(遺物)掲載したNo. 1土器(第28図4)(41 g)、第28図5(86 g)の他に、いずれも4×3 cm以下の小片で、「4層下部～7層上面」で取り上げた甕胴部小片2(12 g)、「7層」で取り上げた甕口縁部、胴部片(計16 g)、計155 g分の土師器が出土した。底から砥石?破片が出土している(第28

図6)。炭化材としては、7層上面からクリ、7層からイタヤ(建築材にはならない雜木)、底からケヤキが出土している。いずれも、拳大にも満たない僅かな量である。<時期・所見>覆土から、平安時代(9世紀後半~10世紀?)の可能性が高い。

#### R D 159土坑(第19・28図、写真図版16)

<位置・検出状況> s工区中央西寄り(第9図)。6-B 21 e~22 fグリッド。R D 160・161土坑と隣接。砂質IV層面で検出。周囲は削平されて厚さ30cmの表土の下がIV層という状態で、宅地時のカクランも多かった。覆土が黒土でなく褐色土であったため、新しく、カクランの可能性も高いと考えたが、検出面の輪郭がシャープでなく、また覆土も縮まり、新しそうでもないので、土坑と認定した。<重複>なし。<図・精査状況> A'側の上場、先掘時掘り広がって、平面図と断面図合わない。<覆土>単層で、淡さが目立つ。III層(漸移層)起源土にIV粒子が混じったような土なので、II層(黒土)が周囲から削平された後に堆積した可能性があり、新しいかもしれない。<平面形・規模>方形基調で、台形に近い。R D 160土坑に似る。2.0×1.9m。<断面形・深さ>シャーレー形。約20cm。<壁・底>壁は垂直に近い。底はIV層だが、底は大部分が砂礫が露頭している(V層)。<その他>R D 160・161土坑との関係が気になる。<出土遺物>(出土状況)半裁時、小型の土師器が出土したが(第28図6)、取り上げてしまっていた。同様に、底付近から鉄錆(第28図1)が出土した。(遺物)上記の土師器(第28図6)(120g)、石器製作時の剥片第28図3(0.52g)、鉄錆(第28図1)が出土した。<時期・所見>覆土からは古く見えないが、出土遺物から、平安時代(9世紀後半~10世紀?)の可能性が高い。

#### R D 160土坑(第19図、写真図版17)

<位置・検出状況> s工区中央西寄り(第9図)。6-B 22 f~23 gグリッド。R D 159・161土坑と隣接。砂質IV層面で検出。周囲は削平されて厚さ30cmの表土の下がIV層という状態で、宅地時のカクランも多かった。覆土が黒土でなく褐色土であったため、新しく、カクランの可能性も高いと考えたが、検出面の輪郭がシャープでなく、また覆土も縮まり、新しそうでもないので、土坑と認定した。<重複>ないと思うが、上面中央に柱穴状の穴(植栽痕?)が認められ、上記のように周囲にカクランが多い。<覆土>単層で、淡さが目立つ。III層(漸移層)起源土にIV粒子が混じったような土なので、II層(黒土)が周囲から削平された後に堆積した可能性があり、新しいかもしれない。<平面形・規模>方形基調で、台形に近い。R D 159土坑に似る。2.0×1.7m。<断面形・深さ>シャーレー形に近い。約25cm。<壁・底>壁は垂直に近い。底はIV層、底も大部分がIV層で、砂礫露頭部分は僅かである。<その他>R D 159・161土坑との関係が気になる。<出土遺物>なし。<時期・所見>覆土からは古く見えないが、R D 159土坑との類似性から、平安時代の可能性がある。

#### R D 161土坑(第19図、写真図版17)

<位置・検出状況> s工区中央西寄り(第9図)。6-B 22 g~23 hグリッド。隣接するR D 159・160土坑と検出状況同じ。<重複>覆土・中央(礫集積)、両側両端にカクラン。<覆土>R D 159・160と同じ。<平面形・規模>2.3×1.3mの長方形。<断面形・深さ>浅皿形。約23cm。<壁・底>壁はやや傾斜。底の大部分はIV層だが、底の北東部は砂で一部露頭。<出土遺物>なし。<時期・所見>R D 159、161土坑と関係が窺われ、R D 159土坑との類似から、平安時代の可能性がある。

## R D 162土坑（第20・28図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ s 民家区中央（第11図）。8 A1qグリッド。R D 168が東側0.5mにある。砂質シルトIV層面で検出。周囲は削平されて表土の下がIV層である。北側がカクランによって切られている。周辺にはカクラン、木の根も多かったため、新しいカクランの可能性も高いと考えたが、壁がきちんと立ち上がり、覆土も綺麗であり、新しい遺物の出土もなかったので、土坑と認定した。＜重複＞ない。北壁にカクランを受けている。また、上記のように周囲にもカクラン多い。＜覆土＞単層で、硬くしまっているが、古代の覆土とは思われない。炭片を少量含む。＜平面形・規模＞楕円形と思われる。約 $0.95 \times 0.5$ m。＜断面形・深さ＞逆カマボコ形。約20cm。＜壁・底＞壁は、南壁がやや外反する。北壁はほとんどが垂直に近い。壁はIV層、底はV層である。＜出土遺物＞覆土中から大堀相馬産の陶器碗底部（第28図1）が出土した。＜時期・所見＞出土遺物から近世末～近代と考えられる。

## R D 163土坑（第20・28図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ s 民家区中央西寄り（第11図）の7A23qグリッドに位置する。RD164土坑が30cm北東に隣接。周辺はIV層まで削平された後、20cmほど黒褐色土が堆積しており、本土坑及びRD164土坑はその黒褐色土面で検出された。規模、形状など柱穴状土坑とすべきか迷ったが、周辺に対応するような柱穴状土坑がなかったため、土坑として報告する。＜重複＞精査を行ったIV層面ではRD164土坑と重複していないが、IV層上の黒褐色土面で重複している可能性があるが、確認できなかった。＜覆土＞黒褐色土で、IV層起源の褐色土粒の混入割合で2層に細分した。上層は褐色土粒が少ないと。＜平面形・規模＞楕円形で、 $0.49 \times 0.42$ m。＜断面形・深さ＞深い逆カマボコ形で、約24cm。＜壁・底＞壁は、開口部で外反する。壁、底はIV層である。＜その他＞R D 164土坑との関係が気になる。＜出土遺物＞覆土から大堀相馬産陶器の碗底部（第28図2）が出土している。＜時期・所見＞出土遺物から近世末～近代の土坑と思う。覆土はR D 164土坑と類似しており、同年代の土坑であろう。また、RD164土坑は墓壙の可能性があることから、関連する遺構かもしれない。

## R D 164土坑（第20図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ s 民家区中央西寄り（第11図）。7 A22～23qグリッド。R D 163土坑が30cm南西に隣接。周辺はIV層まで削平された後、20cmほど黒褐色土が堆積しており、本土坑及びRD163土坑はその黒褐色土面で検出された。＜重複＞精査を行ったIV層面では重複はない。IV層上の黒褐色土面でRD163土坑と重複している可能性はあるが、確認できなかった。＜覆土＞黒～黒褐色土の覆土である。最下層の黒色土層は自然堆積の可能性があるが、これはIV層起源の褐色土粒、ブロックを多く含むしまりのない層で、埋め戻しと思われる。＜平面形・規模＞ほぼ円形で、 $1.01 \times 0.99$ m。＜断面形・深さ＞逆台形で、約50cm。＜壁・底＞西壁は、やや傾斜するが、東壁は垂直に近い。壁はIV～V層、底もV層。＜その他＞R D 162土坑との関係が気になる。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土はR D 163土坑と類似しており、同年代の近世末から近代の土坑と思われる。埋め戻されていることや土坑の形状、規模から近世以降の墓壙の可能性がある。

## R D 165土坑（第21図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ s 民家区南端（第11図）。8 A12p～12qグリッド。RF009・010・011カマド状遺構と重複し、1m東にRF008カマド状遺構がある。IV層面で検出。周囲は削平されて表土の下がIV層という状態である。また、東側、南側を擾乱で切られており、全容は明らかでない。＜重複＞

RF010に切られ、RF009・RF011を切っている。〈覆土〉単層で、硬くしまった黒褐色土である。〈平面形・規模〉残存する北東隅から推測すると隅丸の方形を基調としている可能性があるが、明らかでない。残存する辺の長さは $1.1 \times 1.05\text{m}$ 。〈断面形・深さ〉浅皿形。約11cm。〈壁・底〉壁は、外傾する。壁、底ともにIV層である。〈その他〉RF009・010・011カマド状遺構との関係が気になる。〈出土遺物〉なし。〈時期・所見〉重複する焼土遺構は形状から中世～近世のものと推測されることから、本土坑も該期と考えられる。

#### R D 166土坑（第21図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉s 民家区中央東寄り（第11図）。8 A3rグリッド。約1.5m北東にR D 167土坑がある。IV層面で検出。本土坑はV層まで深く削平する二つのカクランの間から検出され、東半分はカクランの壁にかかっている。〈重複〉ない。カクランに削られている。〈覆土〉黒褐色シルトで、IV層起源の褐色土粒が混入する。混入の程度で2層に細分されるが、埋め戻しと思われる。比較的新しそうな色調である。〈平面形・規模〉梢円形基調で、 $0.56 \times 0.47\text{m}$ 。〈断面形・深さ〉フラスコ形で、約37cm。〈壁・底〉壁は底面に近いほど抉れる。おそらく、砂の層であるため、崩れ落ちたものであろう。IV層～V層で、底もV層である。〈その他〉R D 167土坑と類似する。〈出土遺物〉なし。〈時期・所見〉周辺の土坑との類似性から、近世～近代の墓壙の可能性もあるかもしれない。

#### R D 167土坑（第21図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉s 民家区中央東端（第11図）。8 A2sグリッド。南西にR D 166土坑がある。砂層V層面で検出。V層まで削平するカクランの底部～壁から検出された。〈重複〉現代のカクランに削平されている。〈覆土〉単層でしまりがなく、IV～V層起源の褐色土、褐色砂の粒を含む黒褐色土である。しまりがなく、比較的新しそうな土層である。〈平面形・規模〉梢円形基調で、 $0.76 \times 0.52\text{m}$ 。〈断面形・深さ〉長方形。約37cm。〈壁・底〉壁はほとんどが垂直に近いが、西壁はやや傾斜する。壁、底はV層。〈その他〉R D 166土坑と類似する。〈出土遺物〉なし。〈時期・所見〉周辺の土坑との類似性から、近世～近代の墓壙の可能性もあるかもしれない。

#### R D 168土坑（第21・28図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉s 民家区中央やや東寄り（第11図）。7 A25r～8 A1r～1sグリッド。南西約0.5mにRD162土坑がある。IV層面で検出。現代のカクランに上半分が削平されている。当初、攪乱を除去したのちに不整形に見えた1層相当部分のみ調査したが、周辺に一見するとV層の砂に見える褐色シルトの人が堆積層のあることがわかり、一体の土坑としてとらえることにした。〈重複〉上面はゴミ穴のカクランを受けており、ガラス、現代の陶磁器が出土する。周囲にもカクラン多い。〈覆土〉中央がIV層起源の褐色土と黒褐色シルトの混合した上層で、壁際には褐色土層が堆積する。いずれも人為的に埋め戻された可能性が高い。〈平面形・規模〉梢円形基調で、 $1.88 \times 1.28\text{m}$ 。〈断面形・深さ〉逆台形。約60cm。〈壁・底〉壁は傾斜する。壁はIV層～V層、底もV層である。〈出土遺物〉底面よりやや浮いた状態で鉄鍋（第28図4）と鉄鍋破片、底面上から近代の陶器壺破片（第28図3）、覆土からキセルの基部（第28図1）が出土した。〈時期・所見〉埋め戻したような状況と出土遺物から近代の墓壙と思われる。

#### R D 169土坑（第21図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞ s 民家区中央東端（第11図）の7 A24tグリッドに位置する。周囲はゴミ穴のカクランによりV層まで削平されており、本土坑もカクランの底と壁から検出された。＜重複＞上面をカクランにより削られている。特に東側が深い。＜覆土＞単層で、黒褐色土と砂のブロックを含む褐色の砂質シルトである。埋め戻しと考えられる。比較的新しそうな層相を示す。＜平面形・規模＞円形基調で、約 $0.8 \times 0.74$ m。＜断面形・深さ＞逆カマボコ形と思われ、深さは約50cmである。＜壁・底＞壁は、V層の砂が崩れ落ち凹凸がある。やや内湧気味である。壁はIV～V層、底はV層である。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞埋め戻したような状況から近世～近代の墓壙の可能性もある。

## R D 170 土坑（第20図、写真図版20）

＜位置・検出状況＞ s 民家区中央や北寄り（第11図）。7 A21q～22rグリッド。1.3m南にR D 164土坑。盛土を除去した後のIV層面で検出。周囲はIV層まで一度削平されているが、その後黒褐色土が20cm程度堆積し、その上に盛土されている。隣接するRD163・164はIV層上の黒褐色土上で検出され、本土坑もおそらく同様の状況と思われるが、調査時に確認できなかった。上面が木根のカクランを受け、壁の一部が破壊されている。＜重複＞なし。＜覆土＞黒褐色土層が主体で、5層に細分され、1～3層は褐色土粒、黒褐色土粒の混在の様子から埋め戻されているようである。4～5層は壁の崩壊土及び底面に堆積する混入物のない黒褐色土である。＜平面形・規模＞円形基調で、 $0.95 \times 0.93$ mである。＜断面形・深さ＞底が内湧し、開口部でやや外反する。深さは約52cm。＜壁・底＞壁は、砂層のV層部分が崩壊し、若干凹凸が認められる。壁はIV～V層、底はV層である。＜出土遺物＞覆土から産地不明のすり鉢、胴部破片が出土している。＜時期・所見＞覆土の様相と出土遺物から近世末～近代の墓壙と考えられる。

## R D 171 土坑（第22・23・28図、写真図版20）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北寄り（第11図）。7 A20r～21rグリッド。約1m南にR D 170土坑がある。周囲はIV層まで一度削平されているが、その後黒褐色土が20cm程度堆積し、その上に土星状の盛り土がされている。本土坑はこの再堆積の黒褐色土上から掘り込まれていることが、盛り土を除去する過程でわかったが、精査はIV層面から行った。20×25cmの板状の礫が埋土上面に据えられている。＜重複＞ない。＜覆土＞上層はIV～V層起源の褐色シルト、砂の粒を多く含む黒褐色土、下層は混入物の少ない黑色土である。上層は埋め戻しであることが明らかである。＜平面形・規模＞円形で、 $0.68 \times 0.68$ m。＜断面形・深さ＞底部が内湧する長方形。約85cm。＜壁・底＞壁は、ほとんどが垂直に近いが、砂層部分は崩落して凹凸がある。壁はIV～V層、底はV層である。＜その他＞周辺のRD172・173・170土坑と同種か。＜出土遺物＞3層下位及び副土最下位からそれぞれ刀子かと思われる刃物（第28図2・3）が出土している。＜時期・所見＞埋め戻している状況、形状から近世末～近代の墓壙の可能性がある。

## R D 172 土坑（第22・23・28図、写真図版20）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北寄り（第11図）。7 A18s～19sグリッド。1.5m北東にR D 173・174土坑がある。周囲はIV層面まで一度削平されており、そのうち黒褐色土が厚さ約20cmほど堆積している。本土坑はこの黒褐色土上から掘り込まれている。＜重複＞ない。＜覆土＞IV～V層起源のやや大きめの褐色土ブロックを含む黒褐色土層、あるいは黒褐色土ブロックを含む褐色砂で、ブロックの多寡で6層に細分される。埋め戻されていることが明らかである。＜平面形・規模＞円形基調で、約

$0.89 \times 0.85\text{m}$ 。<断面形・深さ>底面が内湾し、開口部で開く。約97cm。<壁・底>壁は、ほとんどが垂直に近いが、開口部はやや外反～外傾する。壁はIV～V層、底もV層である。<その他>周辺のRD171・173土坑と同種か。<出土遺物>覆土4層から寛永通宝(第28図1)が出土した。<時期・所見>埋め戻している状況、出土遺物から近世末～近代の墓壙の可能性がある。

#### RD173土坑(第22・23・28図、写真図版20・21)

<位置・検出状況> s民家区北寄り(第11図)。7A17s～18sグリッド。RD174土坑と重複。周囲はIV層まで一旦削平されており、そのうち黒褐色土が厚さ20cm堆積している。本土坑はこの黒褐色土上から掘り込まれていると思われるが、木根のため判然としなかったのでIV層面で検出した。埋土上面から $45 \times 40\text{cm}$ の礫が検出された。根の攪乱により壁が一部破壊されている。<重複>土坑東側でRD174土坑と重複し、本土坑が占い。<覆土>IV～V層起源の褐色土粒を含む黒褐色土及び黒褐色土ブロックを含む褐色土で、ブロックの多寡により6層に細分される。埋め戻されている。<平面形・規模>円形基調で、 $1.0 \times 0.85\text{m}$ 。<断面形・深さ>逆カマボコ形。約53cm。<壁・底>壁は、IV～V層で、内湾気味に立ち上がるが、砂(V)層に当たる部分はところどころ崩落し、凹凸がある。南壁は砂の崩落で壁が一部オーバーハングする。北側が、木根により破壊されている。底はV層である。<その他>RD171、172土坑と同種か。<出土遺物>覆土から土師器壊底部破片(第28図7)が出土している。<時期・所見>出土遺物は流れ込みの可能性が高く、埋め戻している状況や礫の出土から近世末～近代の墓壙の可能性がある。

#### RD174土坑(第22・23図、写真図版21)

<位置・検出状況> s民家区北寄り(第11図)。7A17s～18sグリッド。RD173土坑と重複。周囲はIV層まで一旦削平されており、そのうち黒褐色土が厚さ20cm堆積している。本土坑はこの黒褐色土上から掘り込まれていると思われるが、木根のため判然としなかったのでIV層面で検出した。また、規模により、本来は柱穴土坑とすべきとも思われるが、周囲に対応する同様の遺構がなかったので、今回は土坑として報告する。<重複>RD173土坑と重複し本土坑が新しい。<覆土>2層に細分される。2層はIV～V層起源の褐色土粒を多く含む黒褐色土で、埋め戻しと考えられる。1層は混入物が少なく、柱痕跡の可能性がある。<平面形・規模>梢円形で、南側にやや長い。 $0.5 \times 0.4\text{m}$ 。<断面形・深さ>ゆがんだ台形。約39cm。<壁・底>東壁、北壁はほとんどが垂直に近いが、西壁、南壁はやや傾斜する。壁はIV～V層、底はV層。<出土遺物>なし。<時期・所見>近世末～近代の周辺墓壙群に関連の柱穴土坑か。

#### RD175土坑(第22・23図、写真図版21)

<位置・検出状況> s民家区北寄りの東際(第11図)。7A18uグリッド。RD176土坑と隣接し、北西2.5mにRD173・174土坑がある。ほとんどを現代の溝によって削平されており、残存するのは東壁と北壁、南壁の一部である。東壁はIV層面で検出。他は現代の溝の覆土除去後、V層で検出した。周囲はIV層まで削平されて、表土の下がIV層という状態である。<重複>現代の溝に切られる。<覆土>IV～V層起源の褐色土粒を含む黒褐色土が主体であるが、底面に粘性の強い黒色土が堆積する。<平面形・規模>円形基調で、約 $0.85 \times 0.7\text{ m}$ ぐらい。<断面形・深さ>浅底部のやや内湾する隅丸長方形か。深さ約70cm。<壁・底>壁は、ほとんどが垂直に近いが、若干凹凸がある。壁はIV層、底はV層。<その他>周辺の土坑と同種か。<出土遺物>なし。<時期・所見>埋土の状況や形

状から近世末～近代の墓壙か。

#### R D 176 土坑（第22・23図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北寄り東際（第11図）。7 A18t、18u、19t、19u グリッド。R D 175・177 土坑と隣接。2.5m 北西に RD173・174 土坑がある。本土坑は現代の溝にはほとんど削平されており、東壁は残っているものの、他は立ち上がり部分のみ残存している。東壁はIV層面で、他は現代の溝の覆土を除去してV層で検出。周囲は削平されて表土の下がIV層という状態である。＜重複＞現代の溝に切られている。＜覆土＞底部近くしか残っていない。1層で、IV層起源の褐色土を多く含む黒褐色土である。層相から埋め戻しと思われる。＜平面形・規模＞円形基調で、約  $0.7 \times 0.65$ m。＜断面形・深さ＞逆カマボコ形。約 43cm。＜壁・底＞壁は、やや内湾気味で、IV～V層、底はV層である。＜その他＞周辺土坑と同種か。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞残存状況が悪いので不明であるが、周辺土坑と同種であるとすれば近世末～近代の墓壙の可能性がある。

#### R D 177 土坑（第22・24図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北寄り東際（第11図）。7 A19t グリッド。R D 176・181 土坑と隣接。IV 層面で検出。西壁を現代の溝によって削平されている。周囲はIV層まで削平されて、表土の下がIV層という状態である。＜重複＞現代の溝に切られている。＜覆土＞黒褐色土が主体で4層に細分される。堆積状況、IV層起源の褐色土粒の混入状況などから埋め戻しと思われるが、中位の3層に関しては混入物が少ないと自然堆積か。＜平面形・規模＞梢円形で、 $0.78 \times 0.66$ m。＜断面形・深さ＞浅逆カマボコ形。約 52cm。＜壁・底＞壁は、垂直に近いが、西壁はやや傾斜する。壁はIV～V層、底もV層。＜その他＞周辺土坑と同種か。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞覆土が埋め戻されていること、形状から近世末～近代の墓壙の可能性がある。

#### R D 178 土坑（第22・24図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北東寄り（第11図）。7 A20s～20t グリッド。R D 179 土坑と隣接。本土坑は現代の溝と RD181 に切られており、両者の覆土を除去したところ、砂V層面で検出。底部のみ残存している。そのため西側の壁の一部は立ち上がりが確認できない。＜重複＞RD181 によって切られ、ほとんどが削平されている。さらに現代の溝により西側の壁の一部が破壊されている。＜覆土＞底部の1層のみ検出された。IV層起源の褐色土粒を含む黒褐色の砂質シルトである。＜平面形・規模＞円形基調と思われる。残存している部分の径は 0.56m。＜断面形・深さ＞浅い半月形。約 1cm。＜壁・底＞壁は、ほとんど残っていない。底はV層で緩やかに内湾する。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞RD181より古いが、時期、性格ともに不明である。

#### R D 179 土坑（第22・24図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北東寄り（第11図）。7 A20t グリッド。R D 178 土坑と隣接、RD181 に切られており、約半分が残存している。当初、RD181 と一体と思われたが、精査の過程で、覆土の違いと形状から別の土坑であることが判断した。IV層面で検出。周囲は削平されて表土の下がIV層という状態である。＜重複＞RD181 と重複し、本土坑が古い。＜覆土＞IV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土が主体だが、上層は黒褐色土ブロックを含む褐色土でどちらも埋め戻されている。＜平面形・規模＞円形基調と思われ、残存部分の径は 0.58m。＜断面形・深さ＞底部の内湾する長方形か。約 51

cm。<壁・底>壁は、IV～V層で垂直に近いが、砂層が崩壊し若干オーバーハングする。底はV層。<その他>周辺土坑と同種か。<出土遺物>なし。<時期・所見>埋め戻されていることと形状から、近世末～近代の墓壙か、あるいは柱穴状土坑。

#### R D 180 土坑（第22・24図、写真図版22）

<位置・検出状況> s民家区北東寄り（第11図）。7A21s～21tグリッド。R D 179・181土坑と隣接。IV層面で検出。南壁をゴミを含むカクランで一部削平されている。周囲は表土の下がIV層という状態である。<重複>カクランに切られる。<覆土>黒褐色土で、3層に細分される。1・2層には混入物がほとんどない。3層はIV～V層起源の褐色土ブロックが含まれ、埋め戻しの可能性が高い。1・2層は柱穴だとすれば柱痕、墓壙だとすれば腐食土の可能性もあるか。<平面形・規模>円形基調で、 $0.65 \times 0.64$ m。<断面形・深さ>隅丸長方形。約60cm。<壁・底>東壁は、ほとんどが垂直に近いが、西壁は開口部でやや聞く。北東の壁の一部は砂（V）層部分が崩落し、オーバーハングする。壁はIV～V層、底もV層である。<出土遺物>なし。<時期・所見>覆土の層相から、近世末～近代の墓壙か柱穴状土坑の可能性があるが、どちらか判断できる材料はなかった。

#### R D 181 土坑（第22・24・28図、写真図版22）

<位置・検出状況> s民家区北東寄り（第11図）。7A20s～20tグリッド。R D 178・179土坑と重複。IV層面で検出。西側を現代の溝跡で切られている。周囲は表土の下がIV層という状態である。<重複>RD178と179と重複し、本土坑が新しい。<覆土>IV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土で、褐色土粒の多寡で3層に細分される。埋め戻しの可能性が高い。<平面形・規模>隅丸方形基調で、残存する東辺は約1.35m。<断面形・深さ>逆カマボコ形。約55cm。<壁・底>東壁は、内湾気味で開口部で外反する。西壁は外傾する。IV～V層である。底はV層で、凹凸がある。<出土遺物>覆土から肥前産磁器口縁部小片（第28図1）が出土している。<時期・所見>覆土が比較的新しそうなことと、出土遺物から、近世後半以降か。性格は不明である。

### 6 カマド状遺構（第25図、写真図版23・24）

4基検出。いずれもs民家区南端にあり、うち3基は重複する。南側の、中世末～近世の居館、集落跡が検出された前年度調査区（報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第534集）からの続きであろう。ただし、前年度調査区でカマド状遺構が検出された地点からは、約60m離れる。

#### R F 008 カマド状遺構（第25図、写真図版23）

<位置・検出状況> s民家区南端、8A12r～12sグリッド。IV層面で検出。周囲はIV層まで削平されており、表土の下がIV層という状態である。2m西にRF009～011がある。<重複>ない。<覆土>西側の燃焼部には底面直上に炭層が堆積する。上層は焼土や炭、灰を含む黒褐色土である。東側の焚口にはIV層起源の褐色土粒を含む黒褐色土が堆積する。<形・規模・深さ>東西に長軸方向を持つ8の字状で、 $1.92 \times 0.78$ mである。深さは西側の燃焼部が深く、25cmである。断面は長軸方向が緩やかに内湾し、短軸方向は半円状である。<焼土・構造>西側の燃焼部の壁に現地性の焼土が形成されている。厚さは最大で4cmである。なお、燃焼部底面の炭層の上に2cm程の間層を置いて移地性の焼土が堆積している。天井もしくは壁から崩落したものか。<壁・底>壁、底ともにIV層。<関連

**遺構** > 西側に同種のRF009・011カマド状遺構、形状は異なるがRF010カマド状遺構がある。<出土遺物>なし。<時期>類例とs民家区の南側に隣接する調査区の過去の調査結果全体から、中世後半以降の可能性がある。

#### R F 009 カマド状遺構（第25図、写真図版23）

<位置・検出状況> s民家区南端、8 A 11p・11q・12qグリッド。IV層面で検出。周辺はIV層面まで削平され、表土下がIV層である。西側を道路工事に伴う掘削で一部消失。<重複> RF011カマド状遺構を切り、RD165土坑に切られている。4基の遺構が重複し、新旧は古い順にRF011→RF009→RD165→RF010である。<覆土>燃焼部は底面直上に炭粉を多く含む黒褐色土層が堆積する。上層は焼土を含む黒褐色土である。焚口には焼土を含む黒褐色土が堆積する。燃焼部寄りには炭粉層の上に移地性の焼土が堆積している。<形・規模・深さ>燃焼部が若干膨張の隅丸長方形で東西に長軸を持つ。燃焼部は西側、焚口は東側である。長軸の残存部分2.13×短軸0.66 mである。深さは燃焼部が最も深く21 cm。断面形は長軸が浅い皿状、短軸が半円状。<焼土・構造>燃焼部壁に焼土が形成される。厚さは2 cm。燃焼部と焚口の間には上層に崩落したような焼土層が認められる。このような焼上があるので、検出時には焼土が円形になって見える。おそらく、この部分はトンネル状になっており、天井の焼土が崩落した可能性が高い。<壁・底>壁、底ともにV層。<関連遺構>重複するRF010・011カマド状遺構。東側に同種のRF008カマド状遺構。<出土遺物>なし。<時期>類例とs民家区の南に隣接する調査区の過去の調査結果全体から、中世後半以降の可能性がある。

#### R F 010 カマド状遺構（第25・28図、写真図版24）

<位置・検出状況> s民家区南端、8 A 12p～12qグリッド。IV層面で検出。周辺はIV層面まで削平され、表土下がIV層である。南壁、西壁を道路工事の際に削平されている。土坑状でカマドとは言いかぎれない構造であるが、燃焼を目的とする土坑であることからカマド状遺構として報告する。<重複> RD165土坑とRF011カマド状遺構と重複し、本遺構が新しい。多くの遺構が重複しており、新旧は古い順にRF011→RF009→RD165→RF010である。<覆土>灰を含む黒褐色土及び褐灰色の灰層である。<形・規模・深さ>残存状況から東西に長軸を持つ土坑とみられ、残存値は1.08×0.51 mである。形状は不明であるが、稍円形を基調としているか。<焼土・構造>焼土化していないが、底面は全体に焼けている。<壁・底>北壁は直立気味だが、他は緩やかに外傾し、RD165土坑の覆土である。底は平坦で、RD165土坑の覆土とIV層である。<関連遺構>重複するRD165土坑、RF009・011カマド状遺構、東に隣接するRF008カマド状遺構がある。<出土遺物>覆土から木質部に鉄の錆が付いたようなもの（第28図）が出土した。<時期>重複するRF009・011カマド状遺構が中世後半以降の可能性があるが、それと同時期の可能性があり、中では最も新しい。

#### R F 011 カマド状遺構（第25図、写真図版24）

<位置・検出状況> s民家区南端、8 A 12qグリッド。IV層面及び重複するRD165の埋土除去後、底面で検出。RF009カマド状遺構によって北半は破壊されており、燃焼部のみ残存している。<重複> RF009カマド状遺構、RD165土坑、RF011カマド状遺構と重複し、本遺構が最も古い。新旧はRF011→RF009→RD165→RF010である。<覆土>底直上に炭片、炭粉を多く含む層が堆積し、その上に崩落した焼土、上層に炭、灰、焼土粒を含む黒色土がある。<形・規模・深さ>南北に長軸を持つとみられ、0.82(残存値)×0.55 mの長楕円形。深さ16 cmで、断面は内湾している。<焼土・構造>瞭

に厚さ4cm程度の焼土が形成されている。<壁・底>壁、底はⅣ層。<関連遺構>重複するRF009カマド状遺構、RD165土坑、RF011カマド状遺構と東に隣接するRF008カマド状遺構がある。<出土遺物>なし。<時期>類例と今回調査区の南側の調査結果から、中世後半以降の可能性がある。

### 7 溝 跡 (第26・27図、写真図版25~28)

7条検出したが、時期はいずれも古代以降(特に中世末以降の可能性が高い)とされ、特定できていない。s工区で1条、s島区で2条、s民家区で4条検出され、s民家区以外の3条は、前年度盛岡市教育委員会調査区からの継続である。S民家区検出の4条のうち3条は現代の土地境や現代の溝と並行あるいはそれに直交する方向軸であり、近世以降比較的新しいものの可能性が高いが、証拠がない。この3条は底面に工具痕がみられないという点も共通である。残る1条は方向軸、底面に工具痕が認められる点が他と異なり、他より古い可能性があるが、古代以降としか言及できない。

その他に、北区で1条(写真図版3の上段)、s公民館区で1条(写真図版8の上段)、s民家区で1条(写真図版9の上段)検出したが、いずれも新しいものとして割愛した(本章冒頭参照)。

#### R G 059溝跡 (第26図、写真図版25)

<位置・検出状況> s島区東寄りを南北に縦断(第10図)。7-A 2 g~19 c グリッド。R G 060溝跡の西側を同方向に延び、北側、南側とも、調査範囲外に続く(南側は前年度盛岡市教育委員会調査区)。重機による粗掘りの最中、Ⅳ層面で明瞭に検出。北側は電柱の下に延び、基本土層との関係は掴むことができなかった。南端は、前年度の調査区との境がはっきりせず、そこまで含めて調査してしまった。<重複>遺構同士の重複はないと思うが、宅地跡のため、中央付近の深いカクランなどを受ける。<図・精査状況>平面図は、光波測距を基に小縮尺(1/200)で作成したため、断面図(1/20作成)と照合していない。<覆土>ほぼ単層で、基本的にⅡ層再堆積土だが、Ⅳ層粒子多い。<走向・規模>北北東~南南西。規模は不明。<壁・底>中央のカクランより北側は、壁~底Ⅳ層で、南側は、壁はⅣ層、底はシルト化した?砂(V層)で、南端(16グリッド列より南)は、壁はほぼシルト化した?砂(V層)、底は砂礫層である。底は浅く凹凸が著しく、不整形である。カクランと一緒に掘ってしまったので、掘り過ぎの部分も多い。<その他>R G 060溝跡とともに道路の側溝なのではないかとの指摘を受けたが、両者の間が特に硬く締まるということもなく、溝自体も、平行ではなく、南端では近づいて間が非常に狭く(2m)なっている。<出土遺物>なし。<時期・所見>時期を特定する材料がないが、覆土等の類似性から、R G 060溝跡と何らかの関係は持つものと思われる。覆土からは、古代以降の可能性がある。

#### R G 060溝跡 (第26図、写真図版25)

<位置・検出状況> s島区東寄りを南北に縦断(第10図)。7-A 2 j~20 d グリッド。R G 059溝跡の東側を同方向に延び、北側、南側とも、調査範囲外に続く(南側は前年度盛岡市教育委員会調査区)。重機による粗掘りの最中、Ⅳ層面で明瞭に検出。南端は、前年度の調査区との境がはっきりせず、そこまで含めて調査してしまった。<重複>遺構同士の重複はないと思うが、宅地跡のため、中央付近の深いカクランなどを受ける。<図・精査状況>平面図は、光波測距を基に小縮尺(1/200)で作成したため、断面図(1/20作成)と照合していない。<覆土>上部はⅡ層再堆積土だが、R G 059溝跡と比べて深いせいか、より黒い。下部は、Ⅳ~V層汚れ再堆積土多く含む。北端で、基本土層との

関係を見ることができたが、IV層より上がカクランを受けていたため、参考にはならなかった。<走向・規模>北北東ー南南西。規模は不明。<壁・底>中央のカクランより北側は、壁～底IV層あるいはシルト化したV(砂)層で、南側は、底はずっと砂利層だが、壁は、16グリッド列より北は、IV層あるいはシルト化したV(砂)層で、下部20cmは砂質、南は、上部20cmは砂、その下8cmは砂利層である。中央のカクラン部分も、底まで埋されている箇所は僅かである。<その他>RG 059溝跡とともに道路の側溝なのではないかとの指摘を受けたが、両者の間が特に硬く縮まるということもなく、溝自体も、平行ではなく、南端では近づいて間が非常に狭く(2m)なっている。<出土遺物>なし。<時期・所見>時期を特定する材料がないが、覆土等の類似性から、RG 059溝跡と何らかの関係は持つものと思われる。覆土からは、古代以降の可能性がある。

#### RG 061溝跡 (第26図、写真図版26)

<位置・検出状況>s工区北寄りを横断(第9図)。6-B 19d～18nグリッド。砂質IV層面黒土で検出。東西、調査範囲外に続く(東側は、前年度堺岡市教育委員会調査区)。検出面の輪郭はダラダラ続き、明瞭ではなかった。<重複>中央付近、R I 063井戸跡と重複。断面形に見えなかったことから、非戸跡と同時か、より古い。そのすぐ東側、宅地時のカクラン、東端、柱穴状のカクラン、西端近くも宅地時のカクラン(基礎)を受けている。<図・精査状況>平面図は、光波測距を基に小縮尺(1/100)で作成したため、断面図(1/20作成)と照合していなかったこともあります、合わない。<覆土>R I 063井戸跡の1層とはほとんど同じだが、IV層ブロック、酸化鉄目立つ。<走向・規模>東北東ー西南西。規模は不明。<壁・底>壁～底は、砂質IV層だが、底は凹凸が著しく、硬く縮まっているように思えた。井戸跡の西側半分付近～井戸跡にかけては、底が白色粘土化し、一部酸化鉄が見られ、井戸跡の東側は、底に酸化鉄目立つ。<出土遺物>なし。<時期・所見>検出状況と、削平されているとはいえ非常に浅いことから、人工的に掘り込んだものではない可能性があり、R I 063井戸跡と同時期の可能性もあることから、R I 063井戸跡からあふれ出た水の流れ道なのかもしれない。ただし、同様に水の流れ道と判断した、s公民館区を南北に縱断する溝跡の場合と異なり、覆土と壁～底との違いは明瞭であり、違うかもしれない。

#### RG 062溝跡 (第27図、写真図版26・27)

<位置・検出状況>s民家区北半西端を縦断(第11図)。7A 17r～22qグリッド。付近はIV層まで一旦削平されており、その後黒褐色土が堆積し、その上に土壌層に盛り土されている。本造構は盛土よりも下でそれより古いことは確実だが、IV層上の黒褐色土層の上から掘り込まれているのか、下からなのか、木根がはびこっていてよく確認できなかった(図面では下からとして実測した)。調査区境の崩壊防止と巨大な木根のため、断続的にしか検出できなかった。南側は調査区外に延びており、北端は7A 17rグリッドの木根の付近のようである。<重複>ない。<覆土>しまりのある黒褐色シルトで、IV層起源の褐色土粒を含む。整際に崩壊土が堆積する部分もある。<走向・規模>北東北ー西南南。規模は不明だが、検出部分では長さ10.0m、幅0.67mである。<壁・底>壁、底ともにIV層で、断面形は逆台形。底面は木根の搅乱があり凹凸があるが、工具痕と認識されるものはなかった。<その他>調査区中央を縦断する現代の溝とは平行し、直接切りあっていないが、RG 064・RG 065溝跡と直交方向である。<出土遺物>なし。<時期・所見>黒褐色土層の上から掘り込まれているとすれば、溝の位置が現在の屋敷境と重なることから、近世末以降の可能性があるが、詳しくは不明。

## R G 063溝跡（第27図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞ s 民家区南端（第11図）。8 A10t～11rグリッド。IV層で検出。東は調査区外へ延び、西は徐々に浅くなって消える。付近はIV層まで削平されており、表土をはぐとすぐIV層である。＜重複＞中西側に延びるとすればRF009・010カマド状遺構などと重複する可能性があるが、確認できなかった。＜覆土＞IV層起源の褐色土粒を含む硬くしまった黒褐色土である。最下層には部分的に褐鉄がみられる。＜走向・規模＞東北東～西南。規模は不明だが、検出部分は約4.5m、幅0.62mである。＜壁・底＞壁、底ともにIV層である。底は工具痕と思われる凹凸が著しい。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞工具痕があることと、走向がs 民家区の他の溝と異なることから、時期が異なる可能性がある。しかし、特定できる証拠がなく、古代以降としか言及できない。

## R G 064溝跡（第27図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北端を横断（第11図）。7 A14r～14uグリッド。東西両側が調査区外に延びるが、東側はカクランでほとんど破壊されている。木根で一部破壊されている。周囲はIV層まで一旦削平され、その後黒褐色土が5～15cm程堆積しており、その上に土壘状の盛り土が行われている。本遺構はIV層上で検出、精査を行ったが、調査区際の断面を観察すると、IV層上に堆積する黒褐色土層を掘り込んでいることがわかった。＜重複＞カクランに切られる。＜覆土＞V層起源の砂を全体に含む黒褐色土で、2層に細分される。中央やや西寄りの木根付近の埋土中、壁際に焼土が含まれるが、現地性ではなく、投げ込まれたもの可能性が高い。＜走向・規模＞西北西～東南東。規模は不明だが、検出部分の長さ5.8m、幅0.55m。＜壁・底＞壁はIV～V層、底はV層である。断面形は逆カマボコ形で、壁はやや内湾気味である。深さは西側でやや深く36cm、東側で21cmである。底面に工具痕は認められなかった。＜その他＞南側のRG065溝跡とほぼ平行し、RG062溝跡の方向延長、調査区中央を縱断する現代の溝の延長と直交する。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞IV層直上の黒褐色土層の上から掘り込んでいることがRD172等の土坑と共通していること、方向軸が現代の溝や屋敷境と直交することから、現代に近い屋敷剤に基づいて掘られている可能性があり、近世末～近代以降現代までの可能性があるが、具体的には不明である。

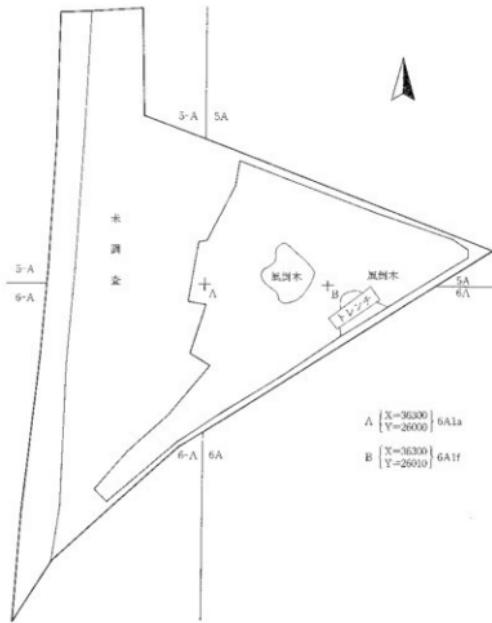
## R G 065溝跡（第27図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞ s 民家区北端を横断（第11図）。7 A15r～16uグリッド。西側が調査区外に延びるが、東側は現代の溝とカクランでほとんど破壊されている。木根で一部破壊されている。周囲はIV層まで一旦削平されており、その後黒褐色土が5～15cm程堆積しており、その上に土壘状の盛り土が行われている。本遺構に関してはIV層上で検出、精査を行ったが、IV層上に堆積する黒褐色土層を掘り込んでいるかどうかは、調査区際周辺に木根がはびこっているため確認できなかった。＜重複＞カクランに切られる。＜覆土＞V層の砂を含むしまりのある黒褐色土で、壁際には壁の崩壊土が堆積する。＜走向・規模＞西北西～東南東。規模は不明だが、検出部分の長さ5.2m、幅0.76m。＜壁・底＞壁はIV～V層、底はV層である。断面形は逆カマボコ形～逆台形で、壁はやや内湾気味であるが、東側は開口部でやや開く。深さは西側で27cm、東側が深く40cmである。底面に工具痕は認められなかった。＜その他＞北側のRG064とほぼ平行し、RG062の方向延長、調査区中央を縱断する現代の溝の延長と直交する。＜出土遺物＞なし。＜時期・所見＞方向がRG064と似ており、あまり時期差がないかもしれない。また、現代の溝とは直交することから、現代に近い土地の区割りに基づいて掘られている可能性もあり、あまり古くならないかもしれないが、具体的には不明である。

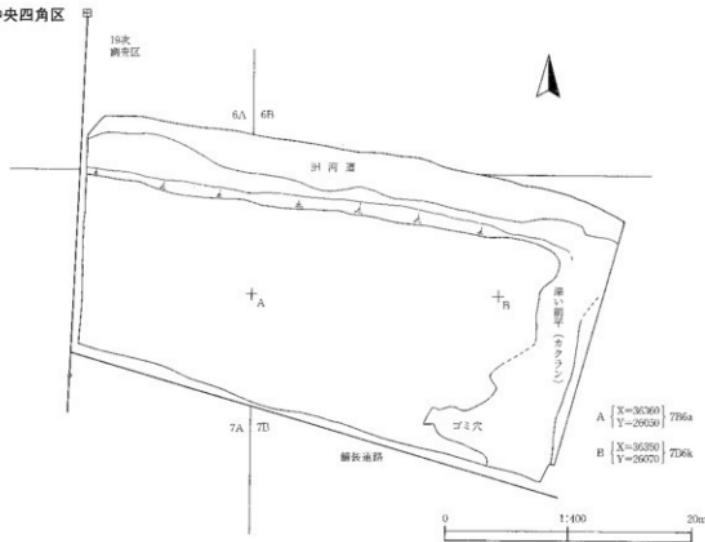


第7図 北区全体図

## ・中央三角区

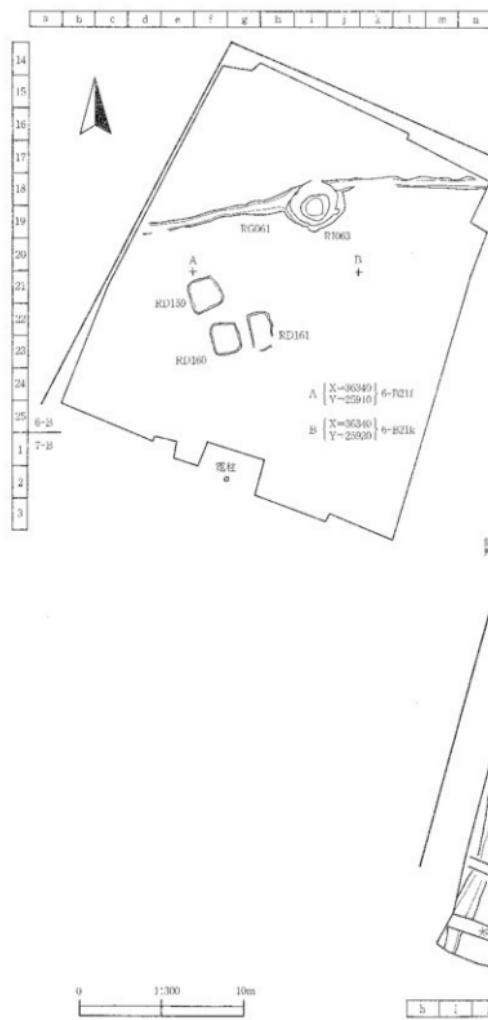


## ・中央四角区



第8図 中央区全体図

• s 工区

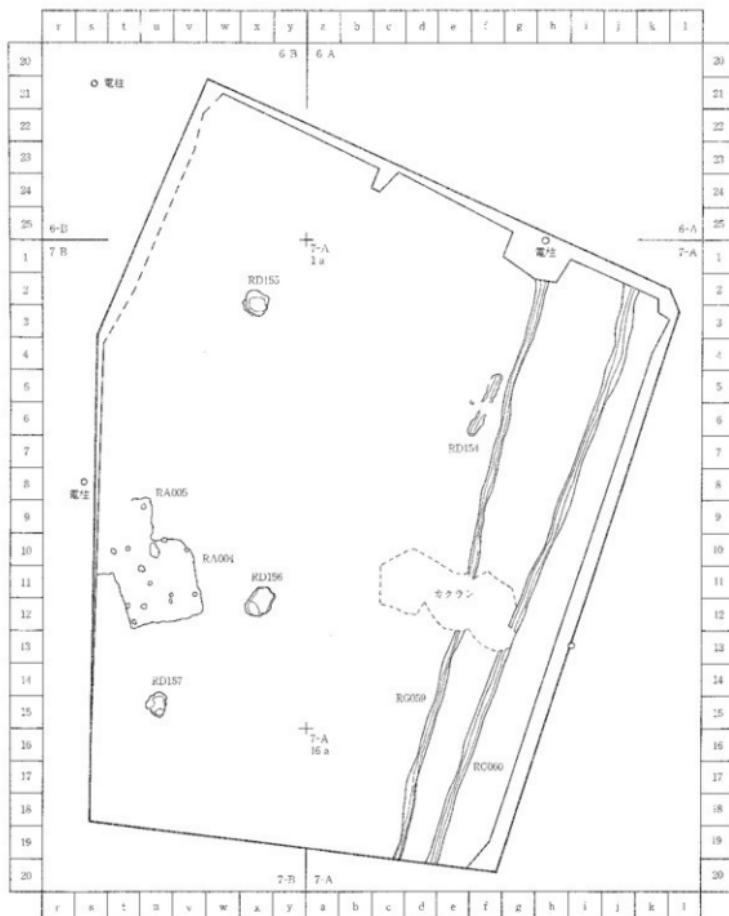


• s 公民館区

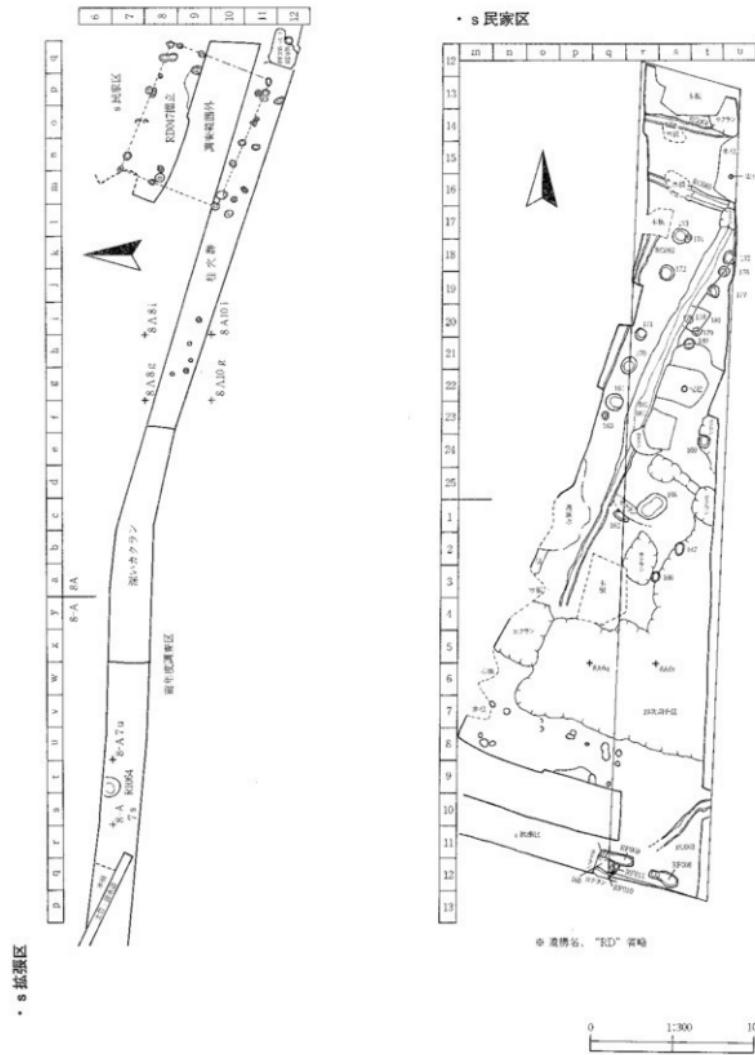


第9図 s工区、s公民館区全体図

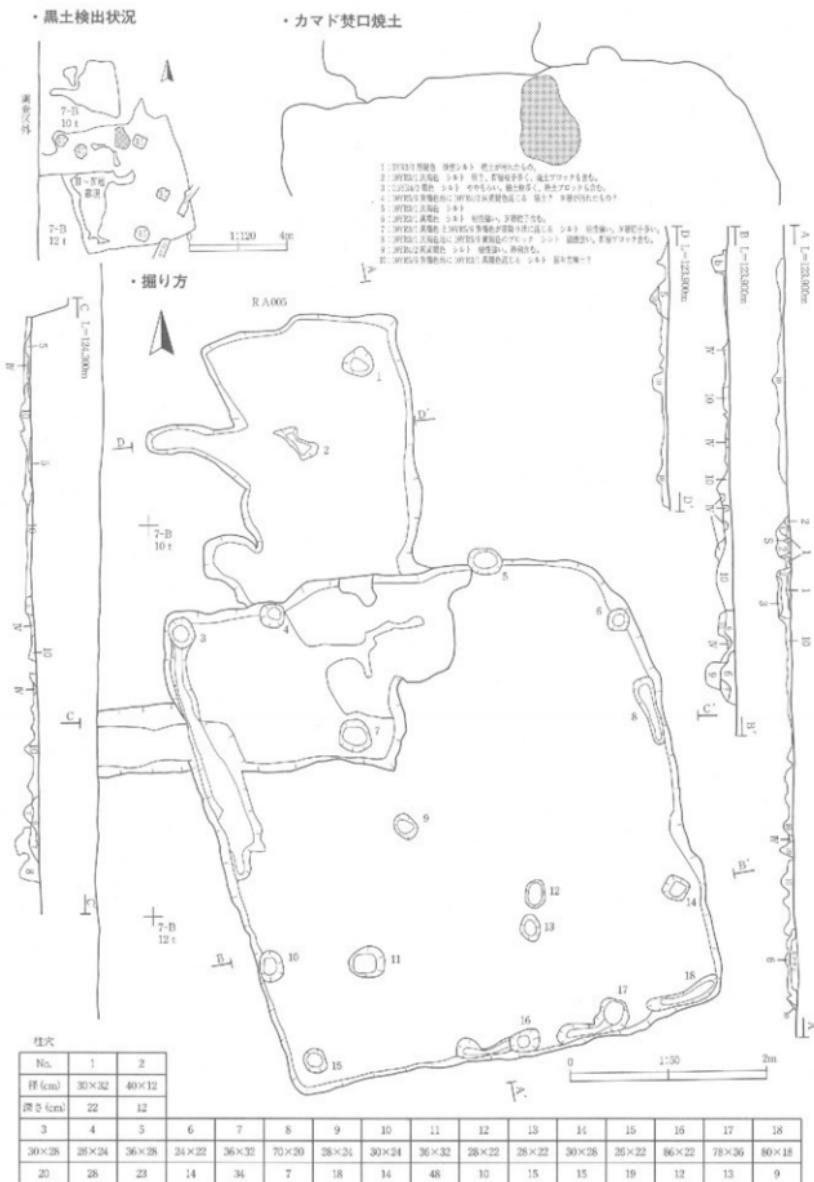
・s島区



第10図 s島区全体図

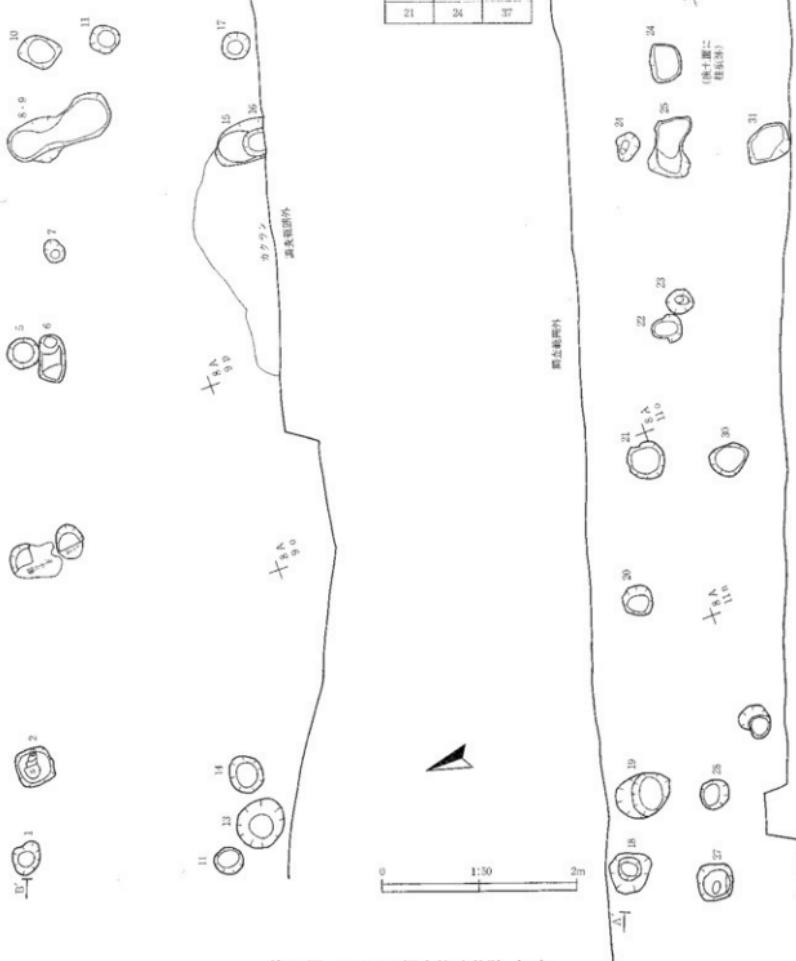


第11図 s 拡張区、s 民家区全体図



第12図 RA004・005住居跡

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
縦(cm)	38×30	38×38	30×25	30×25	34×31	32×28	24×22	112×45	60×48
横(cm)	22	40	15	11	20	20	16	39	17
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
46×36	33×32	31×30	32×50	40×35	50×44	30×24	30×28	45×44	60×46
21	38	24	16	23	28	44	18	40	45
20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
34×30	40×38	30×30	28×26	30×24	62×28	43×32	44×41	32×30	35×25
12	20	14	17	22	47	33	31	25	22
						30	31	32	
						40×35	52×44	38×34	
						21	24	37	



第13図 RB047 捜立柱建物跡（1）

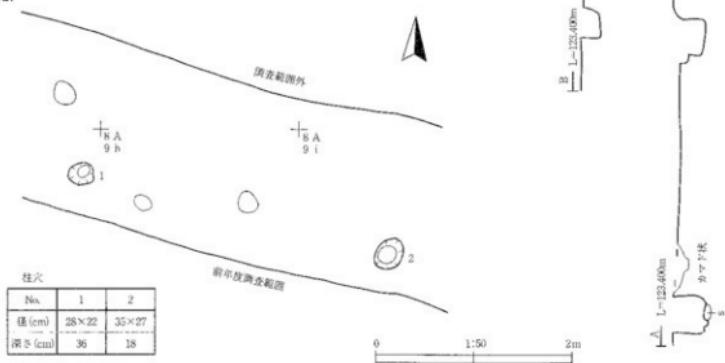
## ・RB047 掘出状況



## ・同 柱穴微細図

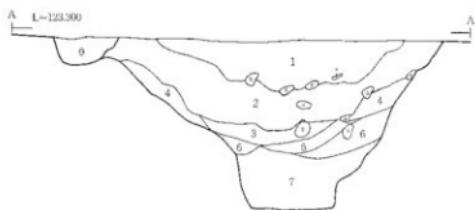
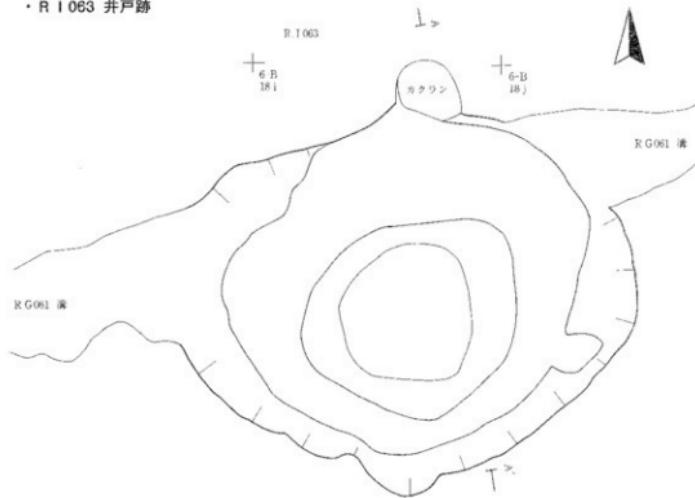


## ・柱穴群



第14図 RB047 掘立柱建物跡（2）・柱穴群

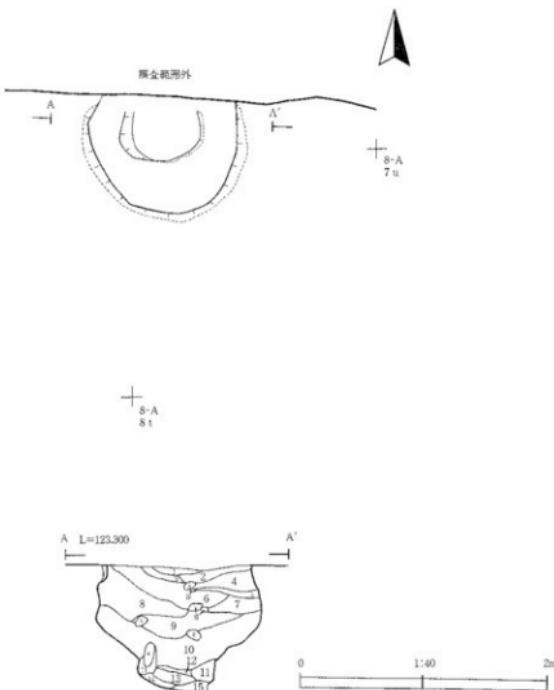
・ R I 063 井戸跡



0 1:40 2m

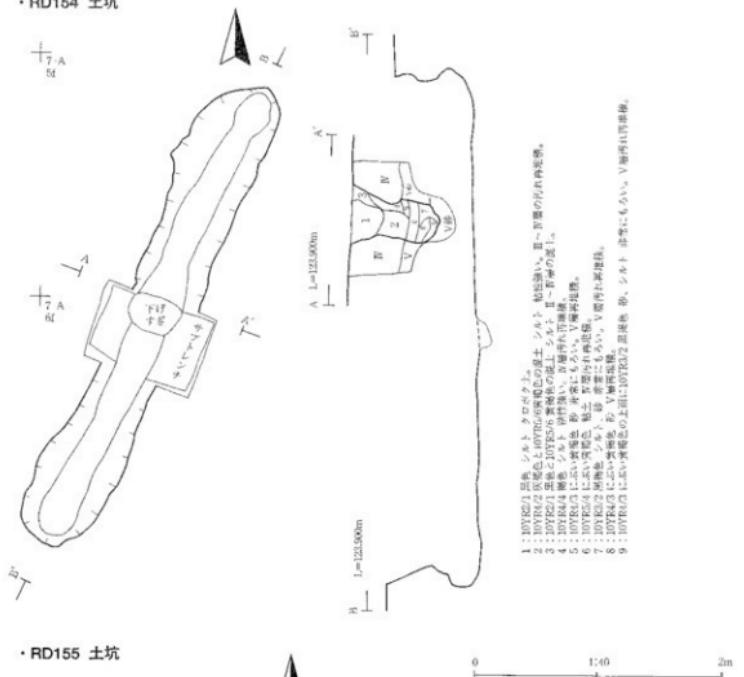
第15図 R I 063井戸跡

## • R I 064 井戸跡

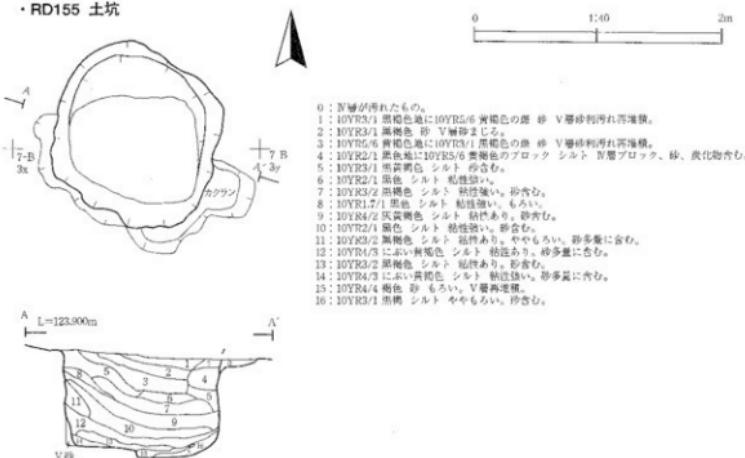


第16図 R I 064 井戸跡

・RD154 土坑

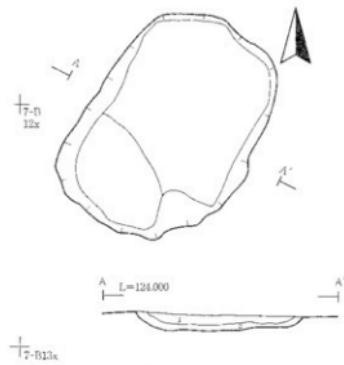


・RD155 土坑

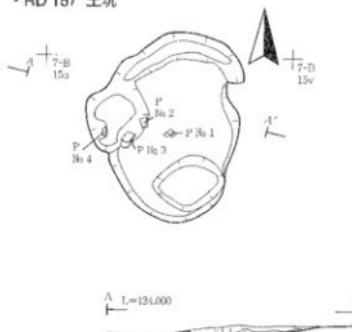


第17図 RD154・155土坑

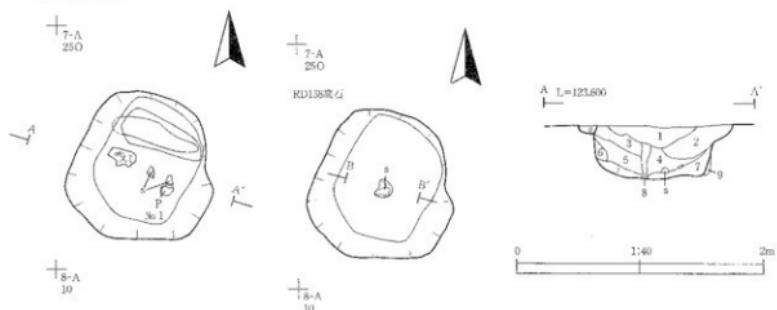
• RD 156 土坑



• RD 157 土坑



• RD 158 土坑



- 1 10YR2/1 黒褐色後に10YR5/6 黄褐色地のブロック シルト カクラン。
- 2 10YR3/1 黄褐色地に10YR5/6 黄褐色、75YR3/6 明褐色のブロック シルト 岩層ブロック、粘土質。炭化物含む。
- 3 10YR4/2 黄褐色地に10YR5/6 黄褐色の細かい粒子混じる シルト 岩層粒子含む。黒いが、3層と同じかもしない。
- 4 10YR2/1 黑褐色地に10YR5/6 黄褐色の粒子、ブロック含む シルト 粘性あり。下層粒子、ブロック含む 2層と 3層、5層の中間的。
- 5 10YR4/2 黄褐色地と10YR5/6 黄褐色の混土 シルト 岩層汚れ再堆積。3層の一部から。
- 6 10YR5/6 黄褐色 納土 N層汚れ再堆積。
- 7 20YR1.7 黑褐色 シルト 粘性にもろい。炭化物多く含み、岩層粒子、ブロック含む。
- 8 10YR2/1 黑褐色 シルト 岩層粒子含む。一部もろい。4層より黒いが、4層の一部かも。
- 9 岩層が既にによって汚れたもの。

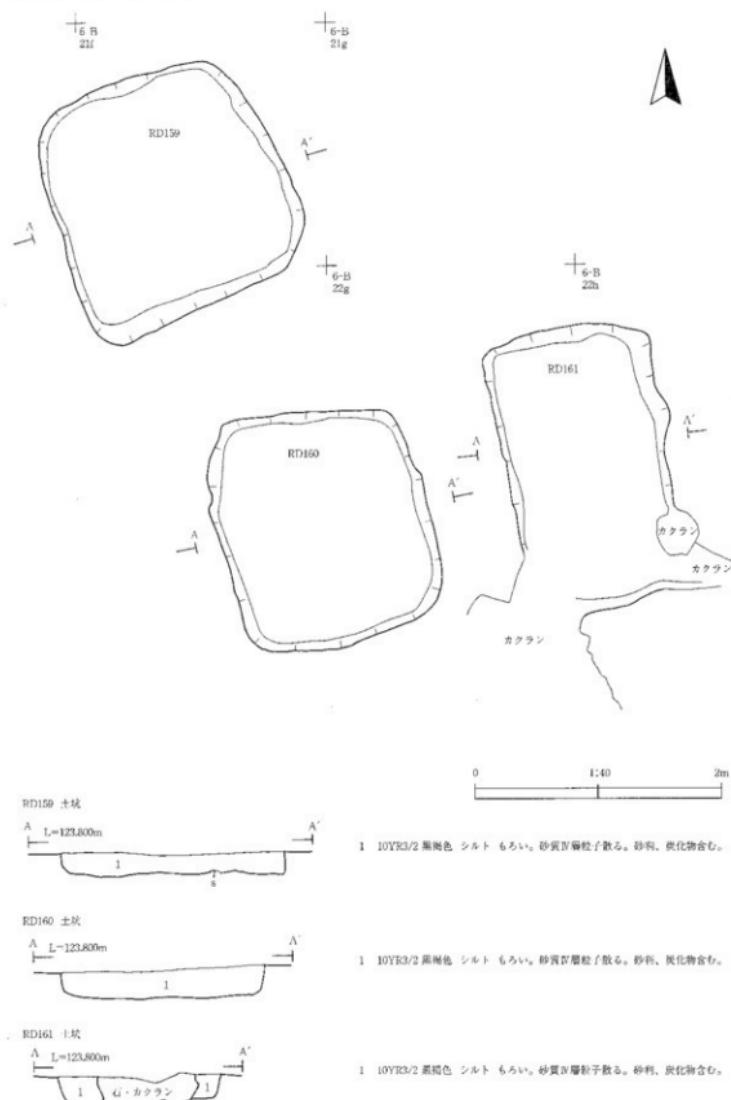
RD158底石面



- 1 10YR2/2 黒褐色と10YR4/3 にぶつかる黄褐色の混土 シルト もろい。根によるカクランのようにも見える。
- 2 10YR2/1 黑褐色 シルト もろい。根によるカクランのようにも見える。
- 3 岩層をV型。

第18図 RD156～158土坑

・ RD159・160・161 土坑



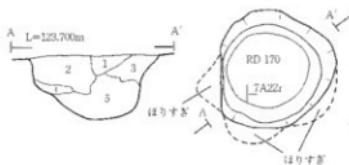
第19図 RD159～161土坑

## ・RD162 土坑

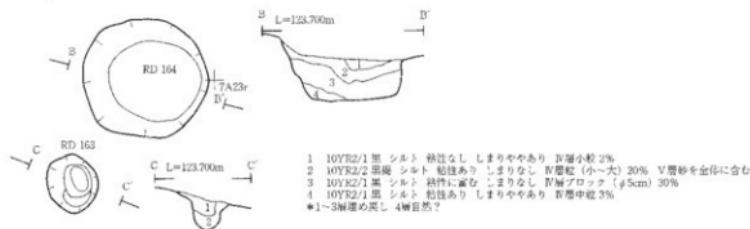


1 10YR2/2 黒褐色 粘性なし かたくしまる IV層砂（細小～細大）10% 砂片少量含む

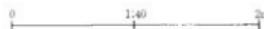
## ・RD163・164・170 土坑



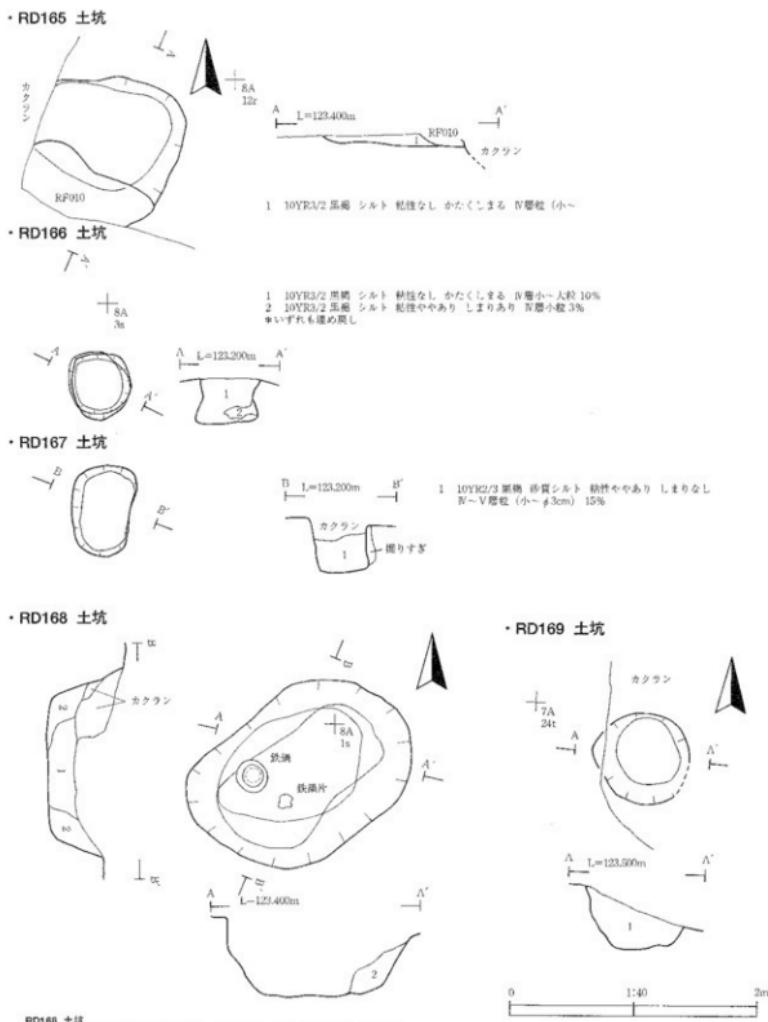
- 1 10YR2/2 黒褐色 粘質シルト 粘性なし しまりあり IV-V層砂（小～細大）40%
  - 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし しまりあり IV-V層砂（小～大）20%
  - 3 10YR4/4 棕褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし IV層砂層の上 黒褐色ブロック  
(#10cm) 20%
  - 4 10YR2/3 黑褐色 砂 粘性、しづりなし V層砂礫土
  - 5 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり しまりややあり IV-V層砂（小～中）5%
- \* 1～3まで地盤が反応し、4層は盤見壁土



- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし IV層小粒 3%  
2 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし IV層砂（小～大）20%



第20図 RD162～164・170土坑

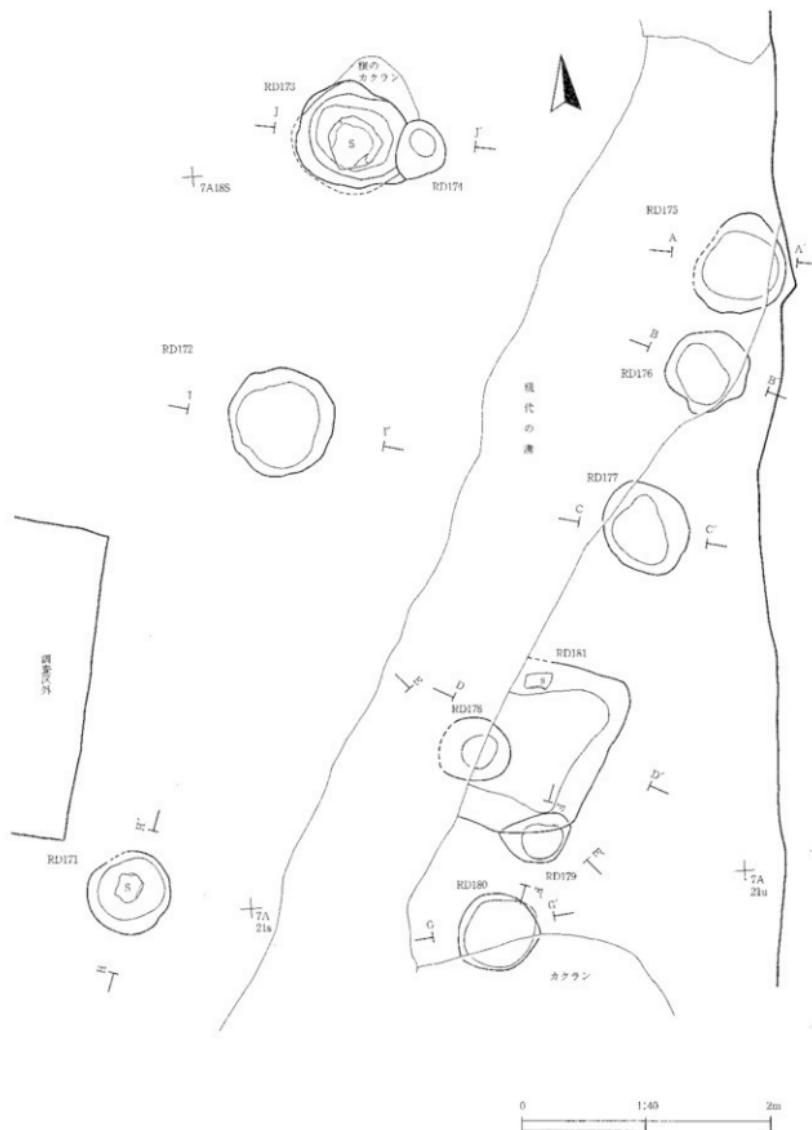


RD168 土坑  
1 10YR3/3 塩化物 砂質シルト 粘性、しまりなし V型小~大粒10%埋め戻し  
2 10YR4/4 塩化物 シルト (普通粘土) ブロック (φ5cm) と 10YR2/2 黑褐色 シルト (φ3cm)  
が塊に混和した土 全体にV層剥離の跡を含む 埋め戻し

RD169 土坑  
1 10YR2/2 黑褐色 シルト 10YR4/6 砂質シルト 10YR2/3 砂 のブロック  
(φ15cm) の混合土 埋め戻し

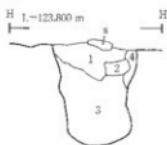
第21図 RD165~169土坑

## ・ R D171～181 土坑



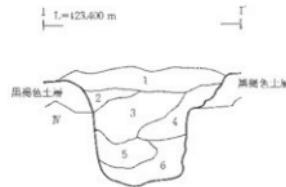
第22図 RD171～181土坑（平面）

• RD171 土坑



- 1 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性、しまりややあり V層ブロック (中～ $\phi$ 3cm) 30%  
V層砂合体に含む  
2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり しまりややあり

• RD172 土坑



- 1 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性あり しまりややあり V層砂 (小～大) 15%含む  
2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし  
3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性、しまりややあり が豐松 (小～大) 3%含む  
4 10YR4/4 黑褐色 粘性、しまりなし 黒褐色上層ブロック ( $\phi$ 3cm～ $\phi$ 10cm) 15%含む  
5 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし しまりややあり V～V層ブロック ( $\phi$ 3cm) 15%  
塊含む  
6 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性、しまりややあり が豐松ブロック (大) 7%含む

• RD173・174 土坑



- 1 10YR4/4 黑褐色 シルト 粘性あり しまりなし V層飽和 黑褐色土層ブロック ( $\phi$ 3cm)  
2 10YR2/3 黑褐色 シルト 粘性、しまりなし V層砂 (強～強大) 15%  
3 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性、しまりなし V層砂ブロック ( $\phi$ 5cm) 50%  
4 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性、しまりややあり V～V層強大 7%  
5 10YR2/2 黑褐色 砂質シルト 粘性、しまりなし V層砂 (小～大) 15%  
6 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性あり しまりややあり V層小 2%  
7 10YR4/3 に近い 黑褐色 砂 粘性、しまりなし 黑褐色土層ブロック強度に 20%  
\*すべて砂の廻し

• RD175 土坑



- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性、しまりなし V層砂 (小～中) 7% 粘度？  
2 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性なし しまりあり N～V層砂 (小～強大) 40%  
砂め廻し

- 1 10YR2/2 黑褐色 砂質シルト 粘性、しまりなし V層砂 (小～大) 15%  
2 10YR2/2 黑褐色 砂 粘性、しまりなし V層砂 (小～大) 20%  
3 10YR2/1 黑褐色 シルト 粘性に富む しまりややあり N～V層砂 (小～ $\phi$ 3cm) 10%

• RD176 土坑

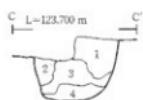


- 1 10YR1.7/1 黑褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし 塵のV層の砂、V層のブロック (中～ $\phi$ 3cm) 20% 砂め廻し

0 1:40 2m

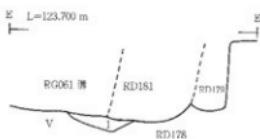
第23図 RD171～176土坑（断面）

## • RD177 土坑



- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性、しまりあり N層粒 (小～ $\phi$ 5cm) 7%  
 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性、しまりあり N層粒 (小～極大) 15%  
 3 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり しまりなし N層粒 (小～中) 5%  
 4 10YR3/3 鮎褐色 砂 粘性、しまりなし 黒褐色上ブロック ( $\phi$ 10cm) 30%  
 \*すべて堆め出し

## • RD178 土坑



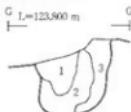
- 1 10YR2/2 黒褐 砂質シルト N層粒 (小～極大) 7%

## • RD179 土坑



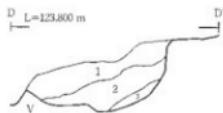
- 1 10YR4/6 黒褐 シルト 粘性、しまりあり 黑褐色土ブロック ( $\phi$ 7cm) 20%含む  
 N層粒  
 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性、しまりなくざらざら N層粒 (小～極大) 20%  
 3 10YR2/4 黒褐 砂 粘性、しまりなし 黑褐色土ブロック ( $\phi$ 3 cm) 20%  
 \* 1,2層は堆め出し 3層は標地盤上

## • RD180 土坑



- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性なし しまりあり  
 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性ややあり しまりなし  
 3 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性ややあり しまりなし N～V層ブロック ( $\phi$ 2～5cm)  
 15～20%含む

## • RD181 土坑

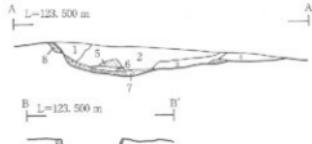
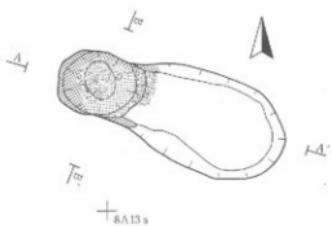


- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし しまりなし N～V層ブロック ( $\phi$ ～ $\phi$ 5cm) 10%  
 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし しまりなし N～V層ブロック ( $\phi$ 7cm) 5%  
 3 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性なし しまりなし N～V層ブロック (小～極大) 10%  
 \*すべて堆め出し

0 1:40 2 m

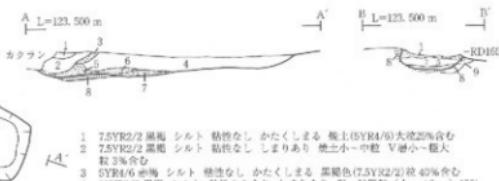
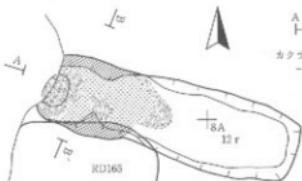
第24図 RD177～181土坑（断面）

・ R F 008 カマド状遺構



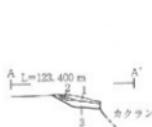
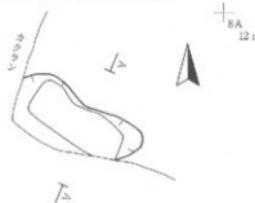
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし かたくしまる 全体に灰褐色の褐色土含む 焼土 小粒 7% 焼土小粒 2%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり かたくしまる 焼土粒 (小～中) 5%～7% 焼土粒 1% N-V層 ブロック (4cm) 2%含む
- 3 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性あり 密度 かたくしまる 全体に灰褐色の褐色度を含む
- 4 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性あり かたくしまる N-V層 小～大粒 20%
- 5 10YR1.7/1 黒 色 粘性 しまりなし 灰褐色を全体に含む 灰褐色大粒 20%含む

・ R F 009 カマド状遺構



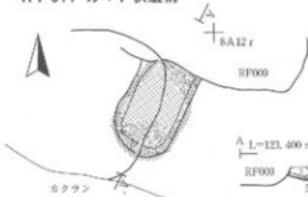
- 1 7.5YR2/2 黑褐色 シルト 粘性なし かたくしまる 烧土(SYR4/6)大粒20%含む
- 2 7.5YR2/2 黑褐色 シルト 粘性なし しまりあり 烧土小～中粒 V層小～粗大粒 3%含む
- 3 SYR4/6 黑褐色 シルト 粘性なし かたくしまる 灰褐色(7.5Y3/2)粒 40%含む
- 4 10YR2/3 黑褐色 シルト 粘性ややあり しまりあり N-V層粒 (小～4.5cm) 15%
- 5 小粒少含む
- 6 SYR4/6 黑褐色 シルト 粘性ややあり 洗土 (SYR4/6) 粒 (小～中) 15%
- 7 SYR4/6 黑褐色 シルト 粘性なし しまりなし 剥落した焼土
- 8 SYR4/3 にかい赤褐色 シルト 粘性あり しまりややあり 洗土

・ R F 010 カマド状遺構



- 1 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性なし しまりあり N-V層粒 (小～粗大) 10%、10YR6/1 粗粒灰土 (中～粗大) 5% 燃め灰
  - 2 10YR6/1 黑褐色 粘性 しまりなし 灰
  - 3 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性あり しまりややあり 断層中～大粒 2%
- 2層の灰を全体に含む

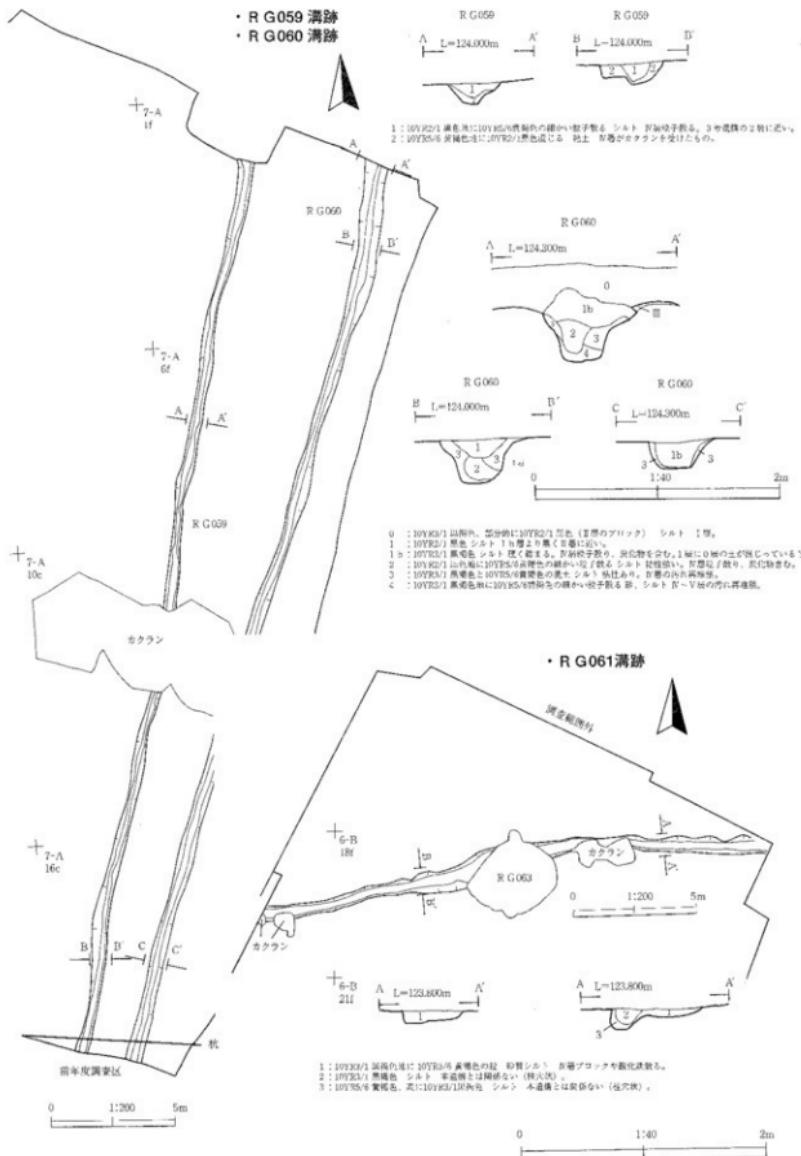
・ R F 011 カマド状遺構



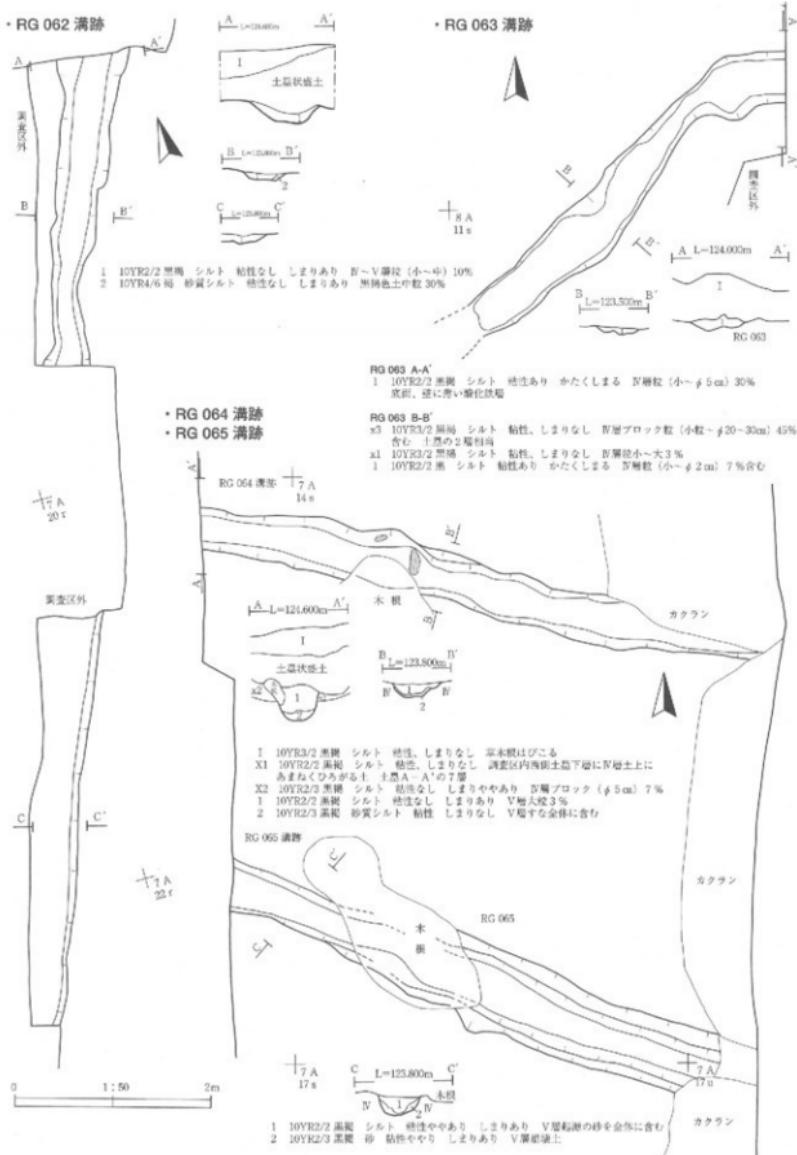
- 1 10YR1.7/1 黒 色 シルト 粘性ややあり かたくしまる
- 2 10YR2/2 黑褐色 シルト 粘性ややあり かたくしまる 灰中粒 2% 烧土小～中粒 2%
- 3 10YR6/1 黑褐色 シルト 粘性ややあり かたくしまる N-V層粒 (小～4.5cm) 10%
- 4 SYR4/4 にかい赤褐色 シルト 粘性ややあり しまりなし 剥落した焼土
- 5 10YR1.7/1 黒 色 シルト 粘性あり しまりなし 灰片、炭化物を多く含む
- 6 SYR4/4 にかい赤褐色 シルト 粘性ややあり しまりあり 洗土



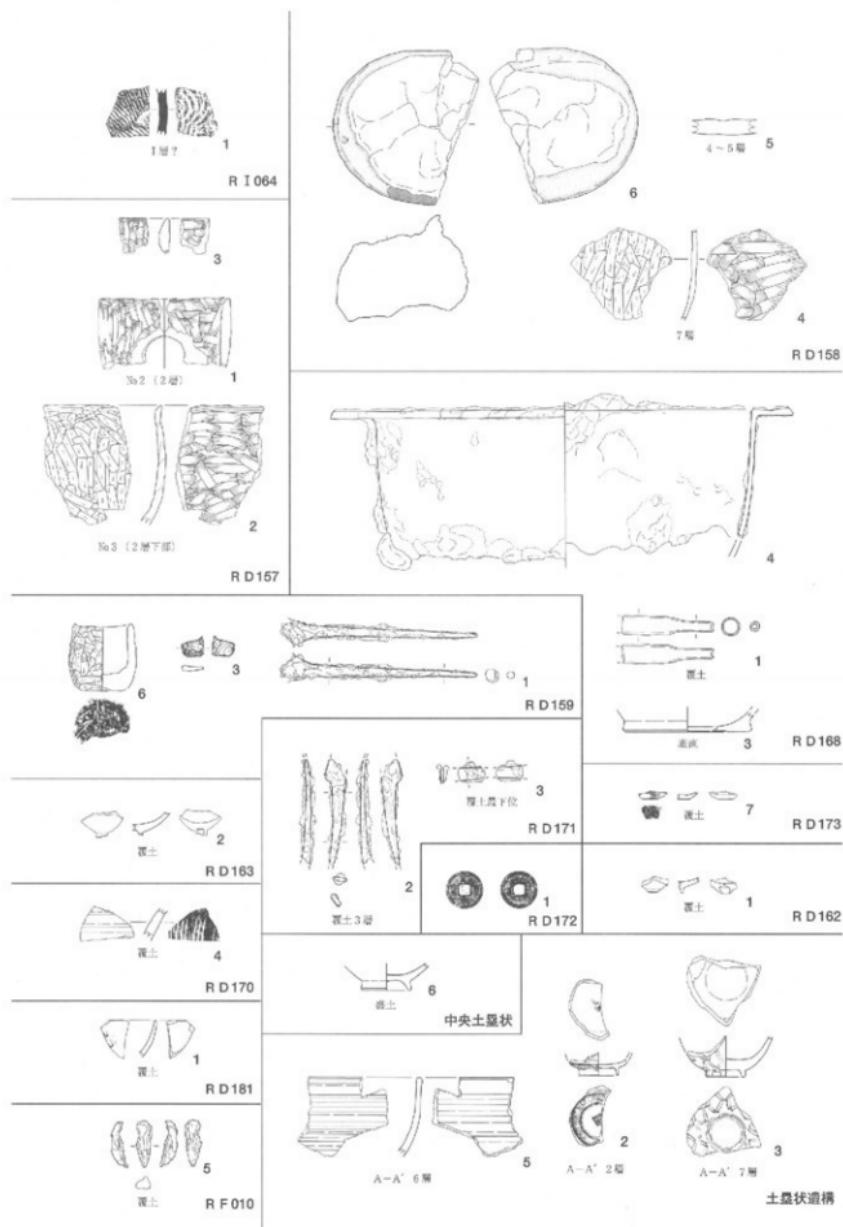
第25図 カマド状遺構



第26図 RG059～061溝跡



第27図 RG062～065溝跡



第28図 遺構内出土遺物（土器・陶磁器・石器1/5、鉄製品・銅製品・錢貨1/3）

## V 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、近現代の陶磁器を除けば非常に僅かである。出土遺物は、土師器・土師質土器1,073 g、須恵器166 g、陶磁器約4 kg、カマド羽口1点、石器類・石製品8点（石鐵2、石器製作時の剥片2、残核2、砥石？1、円盤状石製品？1）、鉄製品8点（鐵1、刀子？2、鍋？1、不明2、馬の蹄鉄2）、銅製品1点（キセル）、錢貨5点（寛永通宝）以上である。

本章では、遣構出土の遺物も含めているが、それぞれ、その種類の遺物の中で冒頭に掲げている。遣構出土品は、第IV章の中に遣構ごとの集成図を掲げているので参照していただきたい（第28図）。

個々の遺物の記載は、基本的に図と表で行ったので、ここでは概要と表の補足のみ記す。

### 1 土師器・土師質土器（第29図、写真図版29）

1,073 g出土した。小コンテナ（32×42×10cm）1/8にも満たない。R D 157～159、173土坑から半分以上の611 g出土し、遣構外462 gのうち、中央三角区で22 g、中央四角区で8 g、s工区で129 g、s島区で163 g、s公民館区で21 g、s拡張区で30 g、s民家区で91 g出土している。北区での出土はなかった。

個々の遺物の記載は図と表で行ったので、ここでは概要と表の補足のみ行う。なお、図表の器面調整は、工具よりも“効果”に重きを置いて表現していることをお断りしておく。

掲載基準。土師器は、器形を復元できるほど残っていないと意味がないので、ほとんど割愛することになった。不掲載品では、RD157土坑No 4（2層より下）で取り上げた破片が5×5 cm程度あった（壊底部1/3周、48 g）以外は、いずれもそれより小さい破片である。

時期。ほとんどが9世紀中～10世紀初頭前後に位置づけられ、明らかにこの時期を逸脱するものは認められないようである。

型式学的特徴。口縁部をはっきり作り出しているものが多く、また6の調整など、東北地方北部の特徴を示すものが多い。また、12は布且压痕が見られる変わった器形で、土製品に含めた方が良かったかもしれない。

#### 以下、表の補足。

1は、肩部に半円形の開口部が認められる。周囲は剥落しているが、表面観察から、ここの部分は本来円形？に開口していたと思われた。強い二次焼成を受けたようで赤く変色し、内面は剥落して、ただれている。外面に“コゲ”状付着物あり。

6は、壺にしては口縁部を作り出していない。外面調整は、東北北部の“ナタケズリ”に近い印象を与える。

8は、実測図では、見た目の印象から外面をヘラナデで表現しているが、工具からはヘラケズリとした方が良いであろう。同じ場所から出土したが接合しない同一個体片が、同じ位の面積ある。焼成の具合によるものか、粉々になってしまって、うまく接合することができない。

9は、粘土接合面で本体から剥落している。

12は、内面調整から判断すると、天地逆の方が良いが、“口”は波打ち、何かに接触していたようなされた後もなく、また、逆に、“底”は極めて平坦で、こちらを下にした方が自然に見える。外面は灰色がかったり。

## 参考文献

八木光則 1993 「古代斯波郡と獨創体の十器様相」『第18回古代城柵官衙検討会 計集シンポジウム北日本における律令期の十器様相』同青森人会事務局（青森県埋文センター）（1992年開催のシンポジウム結果をまとめたもの）

## 2 須 惠 器（第29図、写真図版29）

破片ばかり3点166g出土し、掲載品が26gで、他は、s拡張区出土の大壺胴部片1点125g（9×8cm、外面平行タタキ目、内面なめらかな当て具痕）、s民家区、南北星状造構の下から出土した壺肩部片1点（5.5×4cm、41g、外面自然釉、内面ロクロナデ）である。

## 3 陶 器・磁 器（第30図、写真図版29）

中世の遺構が検出されたs民家区では、出土した全ての陶磁器を回収してきたが（約2kg）、全て近世末以降のようで、それも近代以降が主体を占めた。その他の調査区は、近世末以前と思われるものしか回収しない方針であったが、回収してきた約2kgのほとんどは近現代のものであった。総量は、小コンテナ（32×42×10cm）1/2程度である。

掲載基準。近世末のものも、破片だと遺構内以外ほとんど意味をなさないようなので、遺構内出土品しか掲載しなかった。近現代の破片は掲載しないつもりだったが、遺構の時期を示す必要性から掲載したものがある。なお、観察表は、当センターの杉沢昭太郎氏に鑑定をお願いして、それを聞き書きした。したがって、写し間違いがあれば報告者の責任である。

以下、表の補足。5の同一個体片は、報告品の1/3程度の胴部片である。

## 4 土 製 品（第32図、写真図版30）

掲載したカマド羽口1点のみの出土だが、土師質土器に含めた第29図12は、布目压痕が見られる変わった器形で、土製品に含めた方が良かったかもしれない。

## 5 石 器・石 製 品（第31・32図、写真図版29・30）

掲載した石鎌2点、石器製作時の剥片1点、残核2点、砥石1点、円盤状石製品1点のほかに、s拡張区から剥片1点4g出土している。6以外は、縄文時代の可能性が高い。6は、出土位置から平安時代の可能性が高いが、欠損した砥石？を何のために土坑の底に埋設したのだろうか。この土坑は、炭化物の出土が顕著で、やや特異であった。

## 6 鉄 製 品（第32図、写真図版30・31）

8点出土した。内訳は、鉄鎌1点、刀子2点？、鍋1点？、不明2点、馬の蹄鉄2点で、蹄鉄は、s民家区から出土したものだが、近代以降のものと思われたので掲載しなかった。

以下、表の補足。4は、第32図1の銅製キセルとともに8号土坑から出土した。8号土坑は、遺構名変更表では「ボツ」となっているが、正確にはRD168土坑の一部と判明したため消去されたもの

のである。錫び彫れひどく、それに周囲の砂利が付着して、とれない。底は、自然に腐食したのか故意にかは不明だが、発見時既になかったことは確かである。

### 7 銅 製 品 (第32図、写真図版31)

掲載したキセル1点のみの出土である（銭貨を除く）。以下、表の補足。

1は、第32図4の鉄鍋とともに8号土坑から出土した。8号土坑は、遺構名変更表では“ボツ”となっているが、正確にはRD168土坑の一部と判明したため消去されたものである。

### 8 錢 貨 (第30図、写真図版30)

掲載した寛永通宝4点の他に、北区から、寛永通宝1点、一錢銅貨1点、いずれも遺構外から出土し、戦後のものも、北区から4点、s民家区から8点出土している。

以下、表の補足。

2の出土位置は、「7号土坑」で、後に遺構でない（木根によるカクラン）と判断されたものである。第11図のRD172土坑とRD173土坑の間にあった。

3・4の出土位置は、第7図に記している。柱穴と疑われた横栽痕から出土しているが、本来は北西側にある墓に伴ったものと推測される。

### 参考文献

永井久美男 1996 「日本出土銭総覧 1996年版」兵庫埋蔵銭調査会

### 9 その他、自然遺物

RD158土坑は炭化材が多く、底からケヤキ、7層からイタヤ（建築材には使わない雜木）、7層上面からクリが出土している。7層からは他にも出土しているが、樹種を特定することはできなかった。なお、親指以下の微小な炭化材については取り上げてきていらない。

## VI 総 括

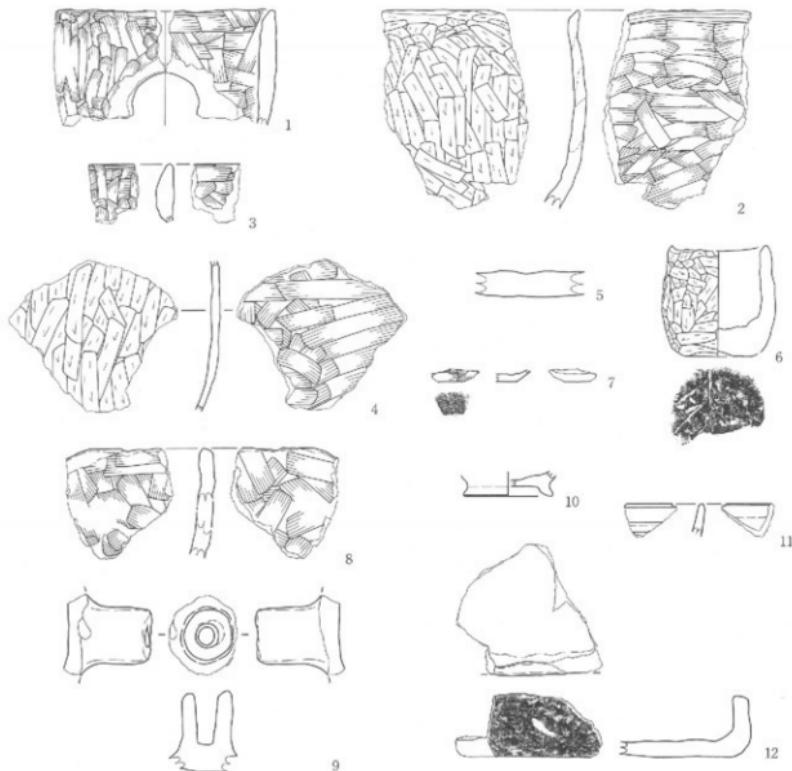
今回の調査区は、八箇所に分かれていた。調査結果の概要は、抄録に記したとおりだが、時代別に遺跡の特徴を簡単にまとめておく。

縄文時代（後～晩期）には、旧河道あるいは低地に面した沖積段丘上に、陥し穴や貯蔵穴が掘られた。石器や石器製作時の破片などが見られた。

平安時代には、段丘上に集落が営まれたようだが、周囲の遺跡に比べて居住痕跡は薄いようである。出土土器は、今回の調査区では、東北地方北部に近い特徴が顕著であった。

中世（末？）には、南端低地に居館、集落が作られ、現在の堰に沿って東西方向に延びる。

近世には、再び段丘上を中心に集落が営まれ、現在の集落に続く。

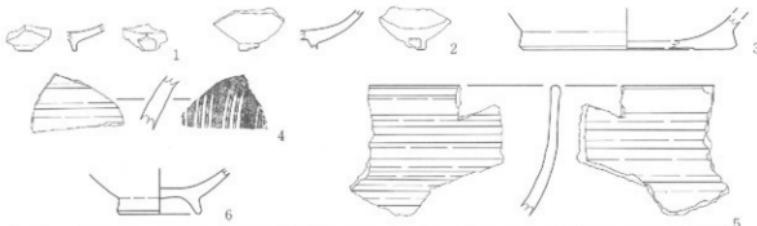


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面 (口縫部/肩部/底部)	内面 (口縫部/肩部/底部)	備考	本文記載
1	RD157 土坑 No.2 (2層)	不明	1/4周回 1/5周	口:ヨコナデ/肩:ヘラナデ?	口:ヨコナデ/肩:ヨコナデ 面:ハラケヌリ→口縫部ヨコナデヘラナデ→口縫部ヨコナデ	内面下部剥落 粘土全表面含む	p.60
2	RD157 土坑 No.3 (2層下部)	腰	口縫部 小片	口:ヨコナデ/肩:ヘラナデ	ヘラナデ/口縫部ヨコナデ	外面一部褐色	
3	RD157 土坑	腰	口縫部 小片	ヘラナデ?	ヘラナデ?	粘土砂多量に含む	
4	RD157 土坑 No.1 (7層)	腰	口縫部 小片	ヘラクズ?	ヘラクズ?	粘土砂多量に含む	
5	RD157 土坑・4~5層	腰	口縫部 小片	ヘラナデ?	ヘラナデ?	粘土砂混入・外面光沢あり	p.60
6	RD159 土坑	腰	ミニチュア? 瓦	ハラクズ?/口縫部ヨコナデ(底:米粒)	ハラクズ?/口縫部ヨコナデ	土砂混入	
7	RD173 土坑・覆土	外・直部	小片	ヘラナデ?/蓋:目印系切痕(底)	ヘラナデ?/口縫部ヨコナデ	底で:一口縫部ヨコナデ	
8	n.島田名前・検出品	腰・口縫部	小片	ハラクズリ→口縫部ヨコナデ	ハラナデ/口縫部ヨコナデ		p.60
9	n.島田名前・須恵器	把足	把手のみみナデ(魏晉南朝とんど見えない)	ケズリ	ハラナデ?	柄色に変色している部分あり	p.60
10	n.工区	高台付舟	1/3周回	ナデ	ハラナデ?	内面褐色処理	
11	n.工区	腰・口縫部	小片	ロクロナデ	ロクロナデ		
12	n.工区?	腰片	毫目庄底→口縫? 塗などで			塗などで	p.60

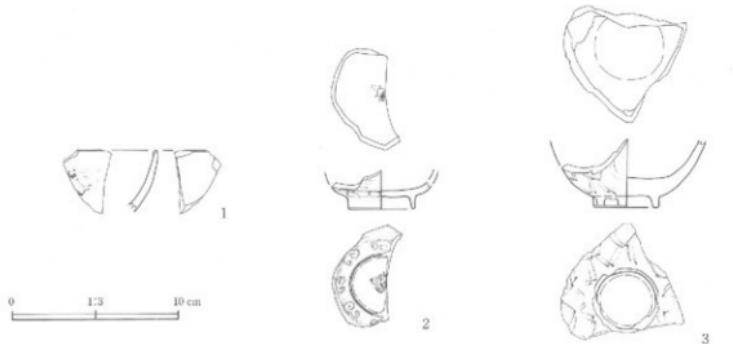


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面 (口縫部/肩部/底部)	内面 (口縫部/肩部/底部)	備考	本文記載
1	IR063 井戸跡・1層?	腰・肩部	小片	平行タタキ目	当て真底	粘土白砂多い	

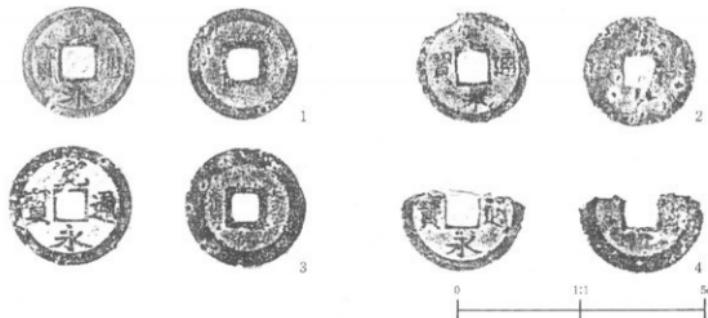
第29図 土師器、須恵器



No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	地土・胎土、給付など	製作地・年代	備考	本文記載
1	RD162 土坑・覆土	碗・底	小片		大根桙馬・19世紀		
2	RD163 土坑・覆土	碗・底	小片		大根桙馬・18世紀		
3	RD168 土坑・底面上	盤・底	1/4 周		古代		
4	RD170 土坑・櫻土	投付・底	小片		生地不明・19世紀以前		
5	土壌状遺構・A-A' 6層	盤・口縁	1/5 周		南北地方・19世紀以前	複合しない同一側片あり	p.81
6	中央土壌状遺土	盤・底	1/2 周			肥前・18世紀後半	

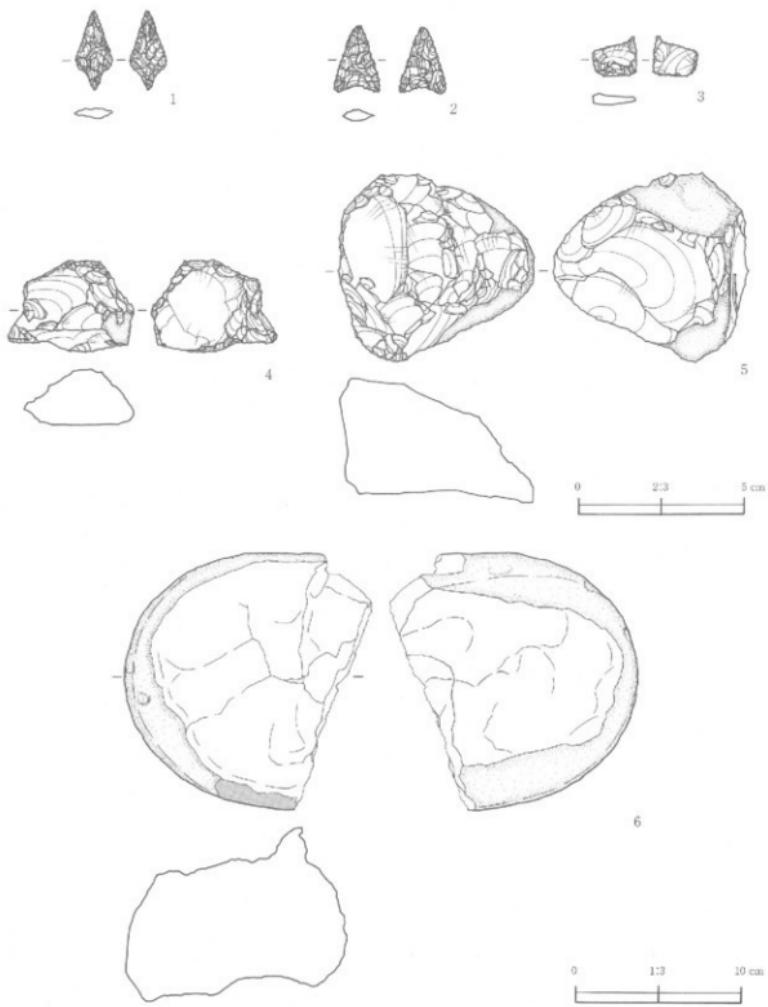


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	地土・胎土、給付など	製作地・年代	備考	本文記載
1	RD161 土坑・櫻土	碗・口縁	小片	染付(コンニャック印刷)	肥前・18世紀後半		
2	土壌状遺構・A-A' 2層	碗・底	2/3 周	染付	肥前・18世紀後半		
3	土壌状遺構・A-A' 7層	盤・底	第一周	染付	肥前・18世紀後半		



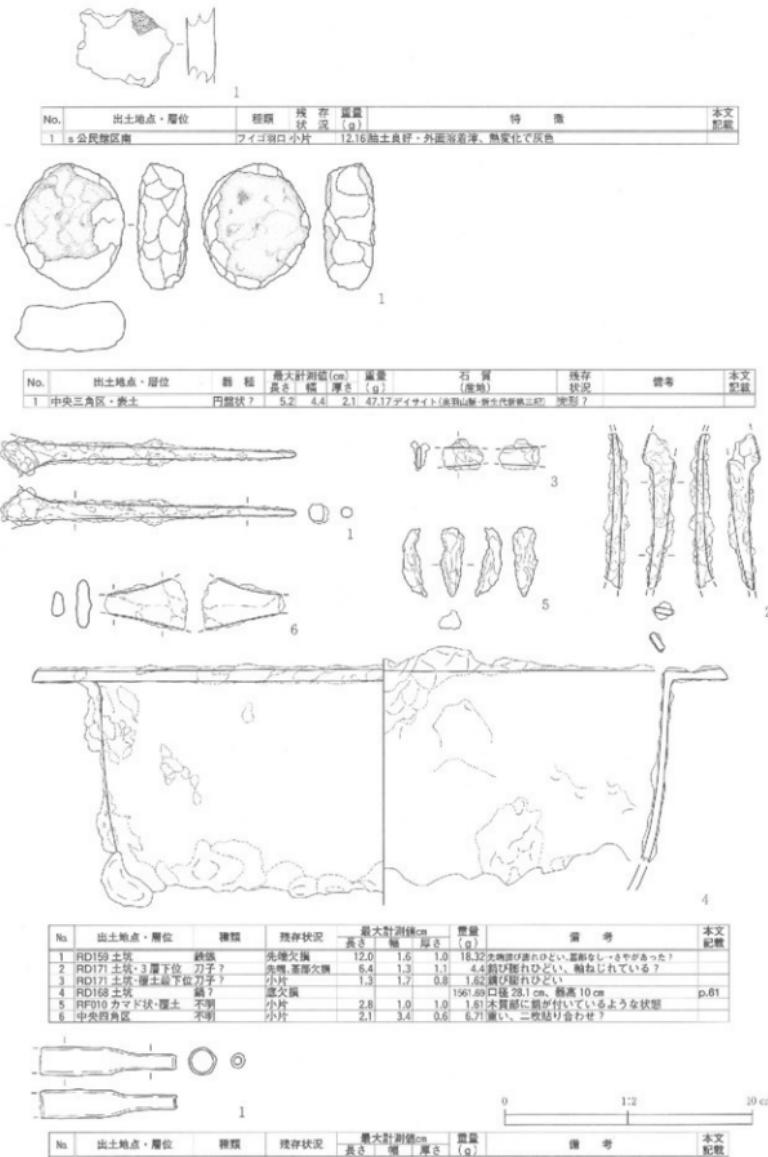
No.	出土地点・層位	器種	金属の種類	残存状態	直徑	重さ	鋳造年代	備考	本文記載
1	RD172 土坑・覆土	寛永通宝	銅	完全	2.25	2.24(1668年以前)	新開永・焼り比較的良いが平坦		
2	s 民家区 (7号土坑検出面)	寛永通宝	銅	表面欠損(調査時?)	2.2	1.52			p.62
3	北区林屋裏底 No.1 (第7回)	寛永通宝	銅	表面欠損(調査時?)	2.4	2.95(1636年以前)	古開永・焼り比較的よく浮凸的	p.62	
4	北区林屋裏 No.2 (第7回)	寛永通宝	銅	1/2程度	2.4	1.42	浮凸的だが無い		p.62

第30図 陶器、磁器、錢貨



No.	出土地点・層位	器種	最大計測値 (cm)	重量 厚さ (g)	石質	残存 状況	備考	本文 記載
1	北区近世～近代墓	石核	2.4	1.1 0.3	0.55黑曜石・産地不明	一部欠損凸面・左右突出面欠損	回基	
2	八幡東区北側・Ⅲ層中木板カクラン	石核	2.0	1.4 0.35	0.62球狀黑曜石(奥羽山系・新生代新第三紀)	完形?	回基	
3	RD159 土坑	剥片	1.2	1.3 0.35	0.52赤色角岩(奥羽山系・新生代新第三紀)	一		
4	中央三角区・土坑	残核	2.8	2.7 17.97	黄岩(奥羽山系・新生代新第三紀)	二		
5	中央三角区・土坑	残核	5.8	5.0 3.7	12.27 黑曜石(奥羽山系・新生代新第三紀)	一		
6	RD158 土坑 虐石	砾石?	15.8	14.9 11.5	36.27 安山岩(岩手山・新生代新第三紀)	欠損 平面わずか		

第31図 石器



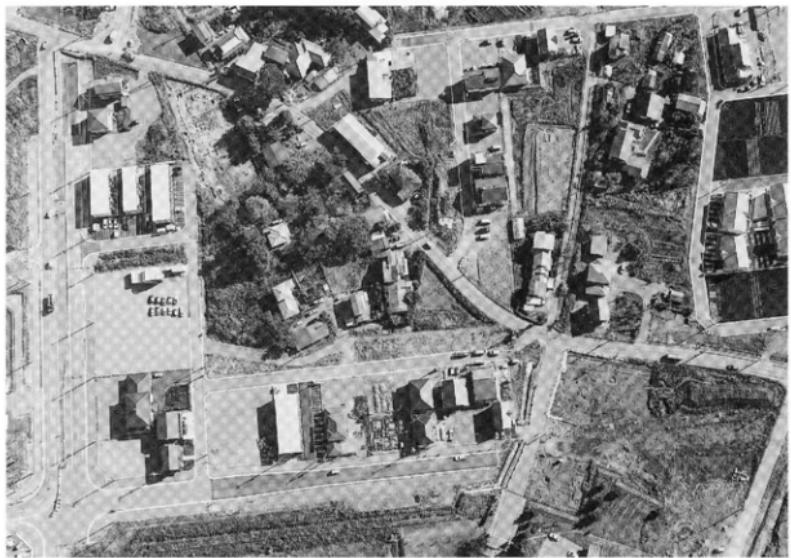
第32図 土製品、石製品、鐵製品、銅製品

写 真 図 版





遺跡遠景（南側上空から）



今回の調査区（西側上空から）

写真図版 1 遺跡遠景・今回の調査区



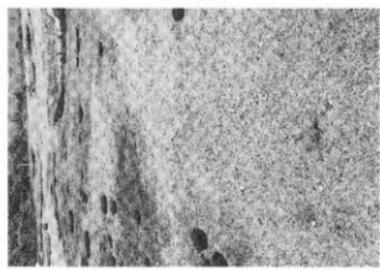
調査後全景（北西から）



調査前全景



西側の柱穴状土坑



同 並んでいるように見える部分



東側の植栽痕

写真図版2 北区（1）



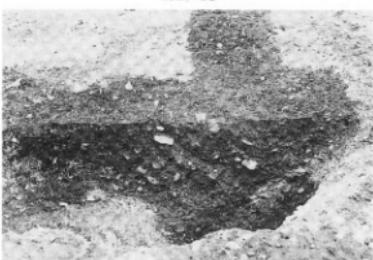
溝跡（東から）



溝底の甌



墓壙群



溝跡と墓壙の重複



井戸跡



中央三角区 全景



同 北端土層断面



同 東端土層断面（旧河道）

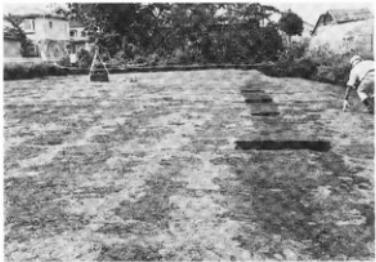
写真図版 3 北区（2）、中央三角区



調査後全景



調査前全景（南西から）



耕作痕



段丘上（北東から）

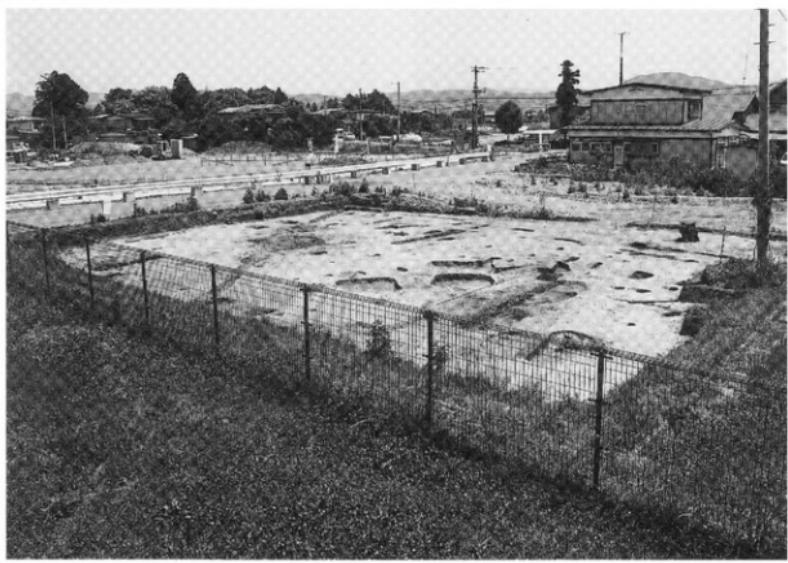


旧河道（東から）

写真図版 4 中央四角区



調査後全景（南上空から）



s工区調査後全景

写真図版5 s工区、s島区（1）



s島区調査後全景



s工区調査前全景（東から）



同（北から）



s島区調査前全景（北西から）



同（西南から）

写真図版 6 s工区、s島区（2）



調査後全景



調査前全景（北から）



同（南から）



南部北端の土層



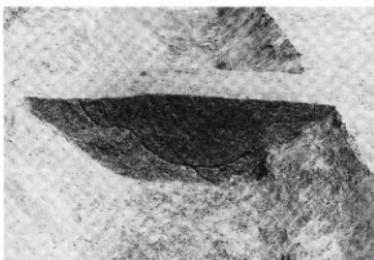
北端土層



道路側溝（北部）



同（南部）



同 覆土断面



s 拡張区（西から）



同（東から）

写真図版 8 s 公民館区（2）・s 拡張区



調査後全景



調査前全景



土壌状遺構断面



同



溝状遺構断面

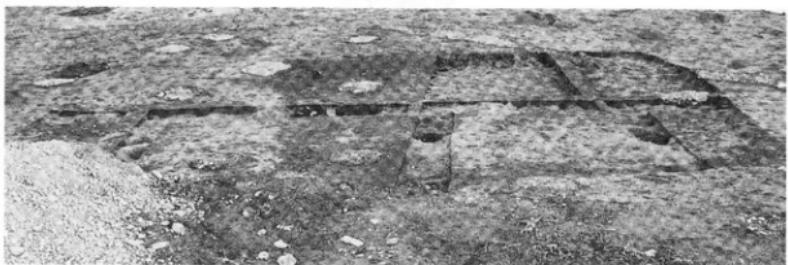


同

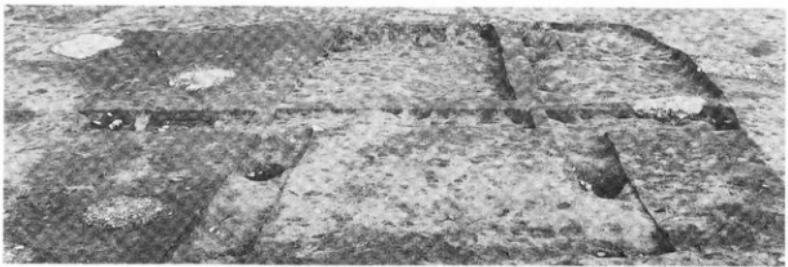




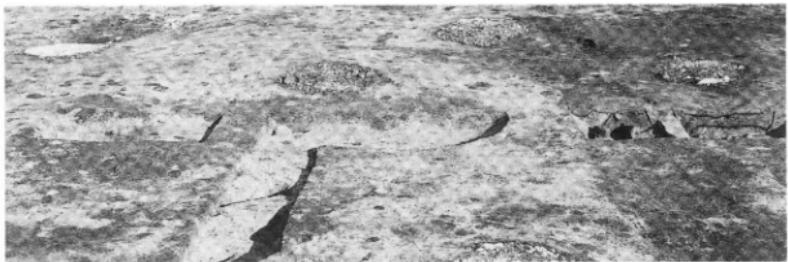
検出状況（南から）



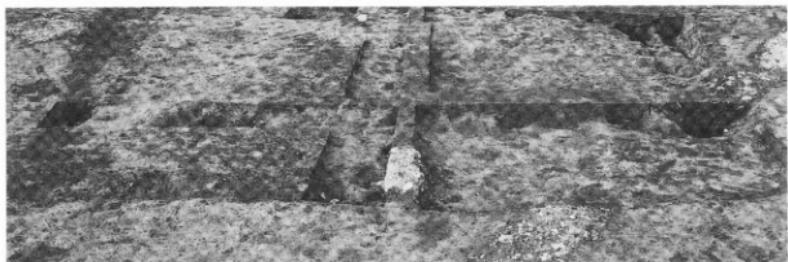
A-A' 断面



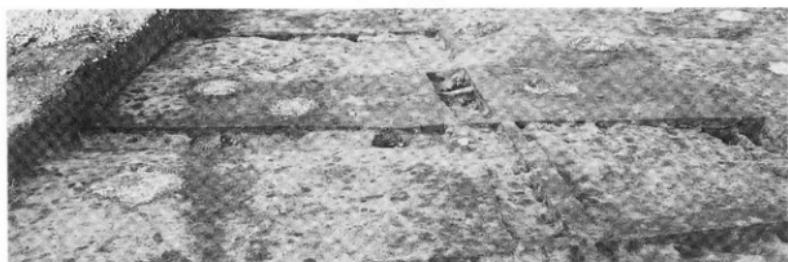
同 南半



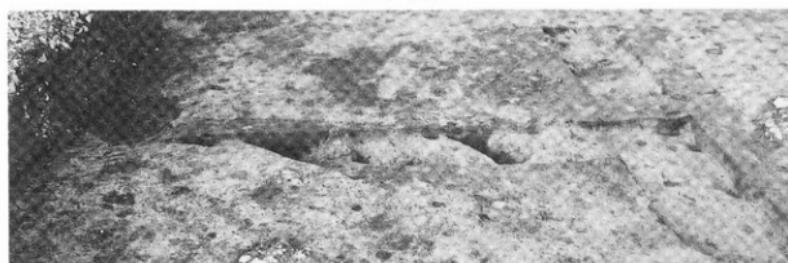
同 北半



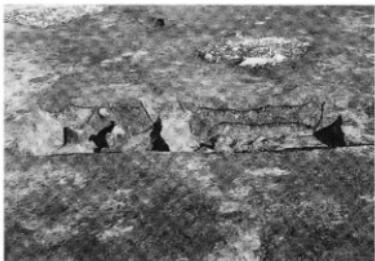
B—B' 断面



C—C' 断面



D—D' 断面



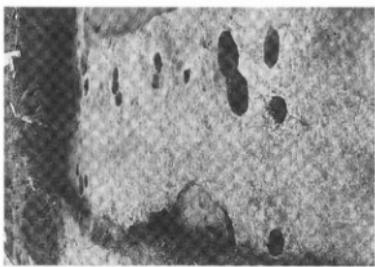
カマド焚口焼土断面



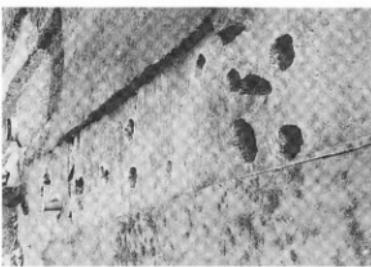
RA005検出状況

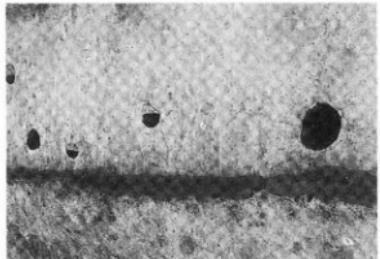


掘り方



RB047掘立柱建物跡

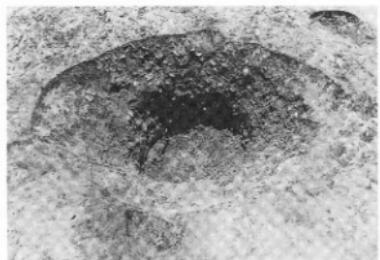




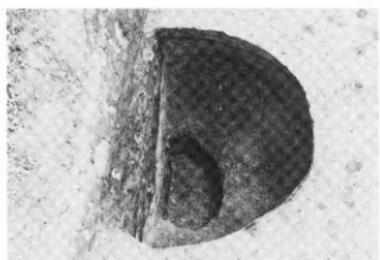
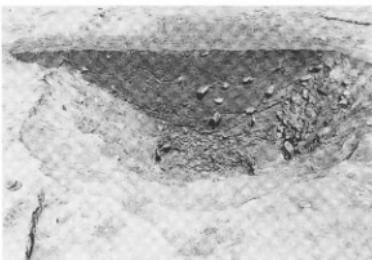
柱穴群



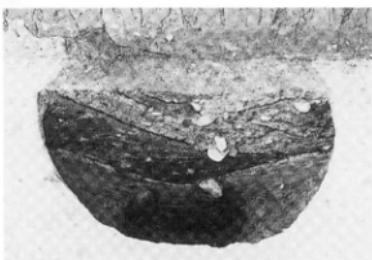
柱穴群周辺（調査前）



RI063 井戸跡



RI064 井戸跡



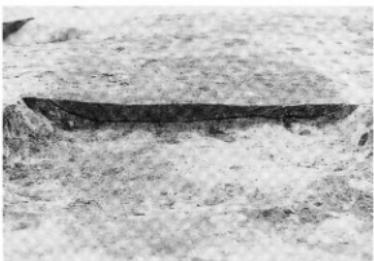
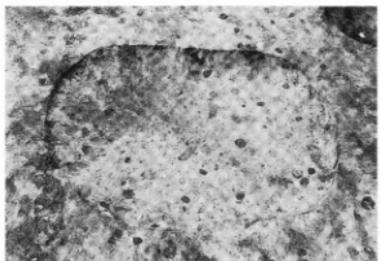
RD154 土坑



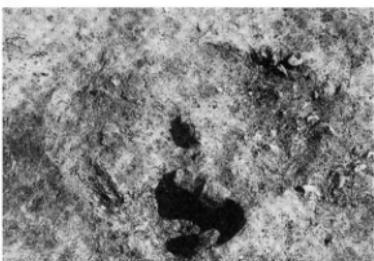
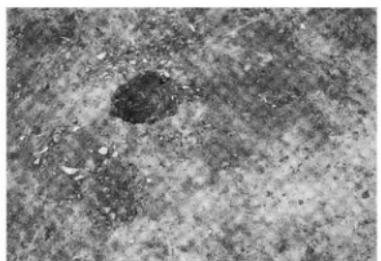
写真図版14 柱穴群、井戸跡、RD154土坑



RD155土坑



RD156土坑



RD157 土坑完掘

同 遗物出土状况

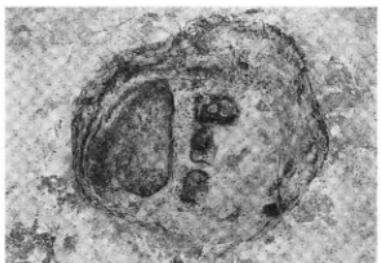


同 近景

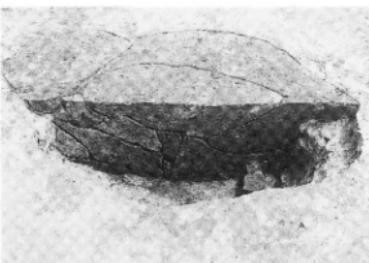


同 覆土断面

写真図版15 RD155～157土坑



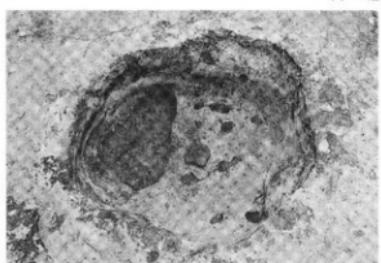
RD158 土坑 平面



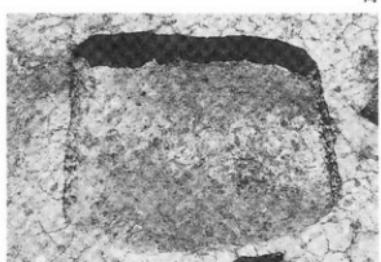
同 覆土断面



同 7层遗物出土状况



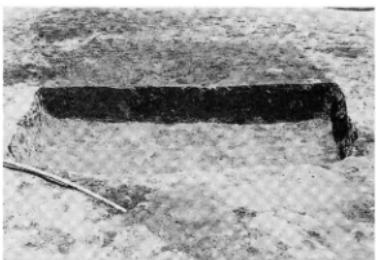
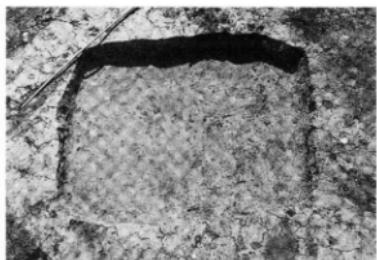
同 底面梗



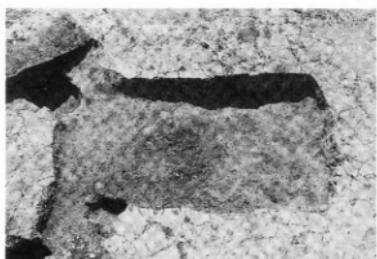
RD159 土坑



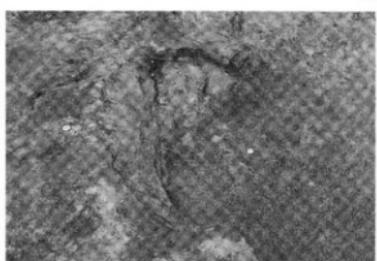
写真図版16 RD158・159土坑



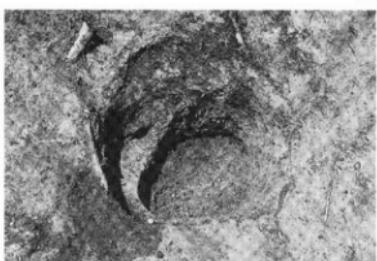
RD160 土坑



RD161 土坑



RD162 土坑

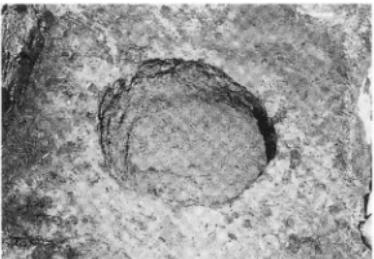


RD163 土坑

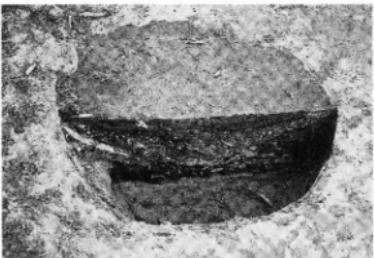
写真図版17 RD160～163土坑



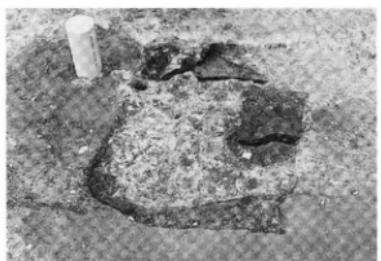
RD 163・164・170～174が並ぶ



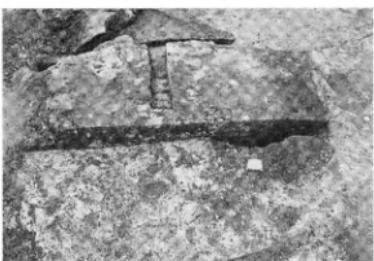
RD164 土坑平面



四 覆土断面

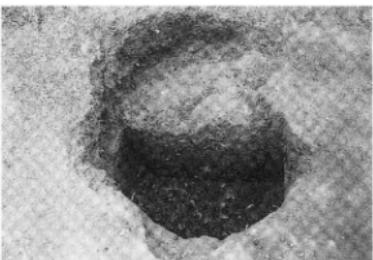


RD165 土坑

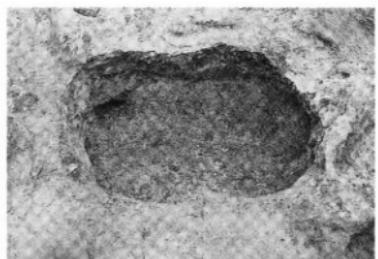


RD166 土坑

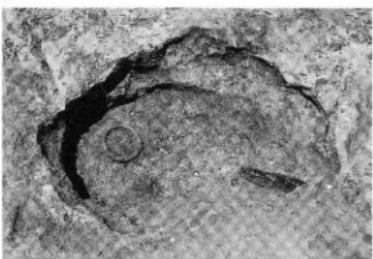
写真図版18 RD164～166 土坑



RD167土坑



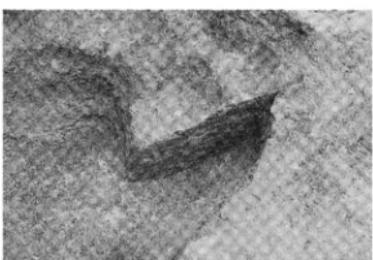
RD168土坑 平面



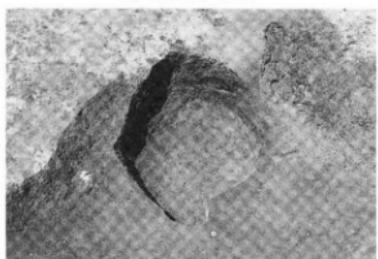
同 遺物出土状況



同 覆土断面（南北）



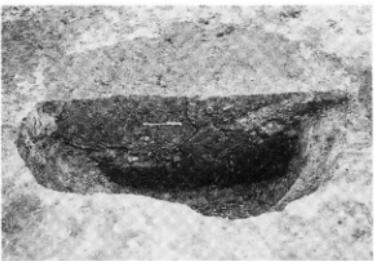
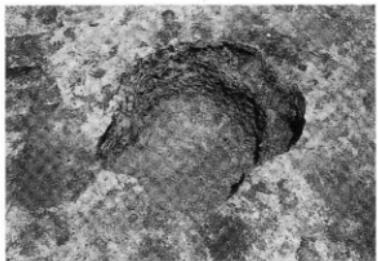
同（東西）



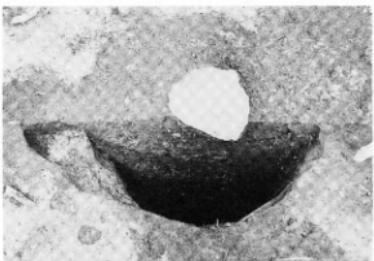
RD169土坑



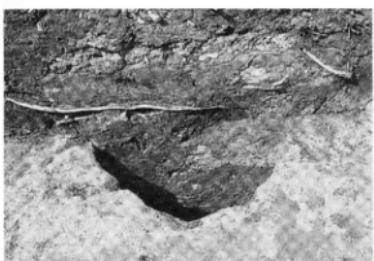
写真図版19 RD167～169土坑



RD170 土坑



RD171 土坑



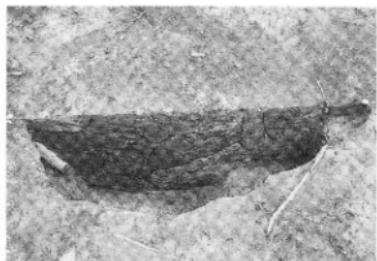
RD172 土坑



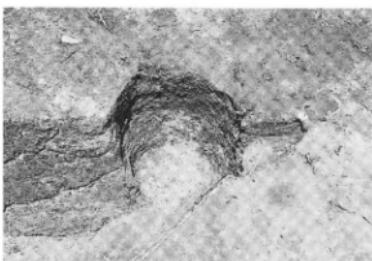
RD173 土坑平面

同 上面図

写真図版20 RD170～173（1）土坑



同 覆土断面



RD174 土坑



RD175 土坑

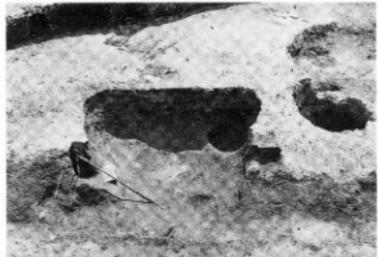


RD176 土坑



RD177 土坑

写真図版21 RD173 (2) ~ 177 土坑



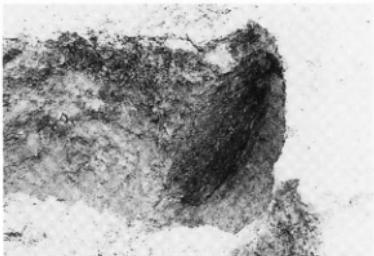
RD178・179・181土坑



RD179土坑



RD178土坑覆土断面



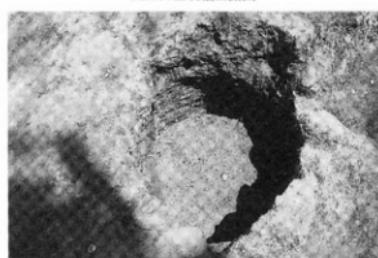
RD179土坑覆土断面



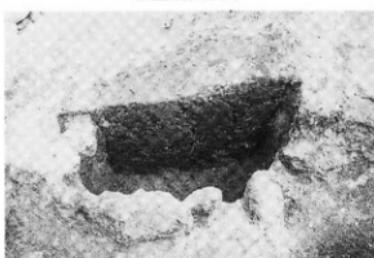
RD181土坑覆土断面



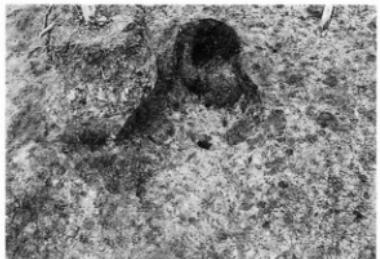
調査風景（北区）



RD180土坑



写真図版22 RD178～181土坑



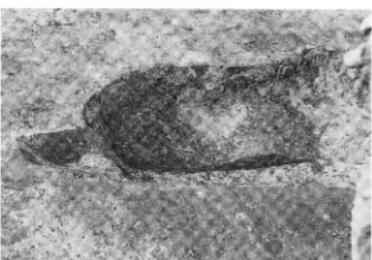
RF008 カマド状遺構



同 覆土断面



同 断ち割り



RF009 カマド状遺構



同 覆土断面



同 断ち割り

写真図版23 RF008・009 カマド状遺構



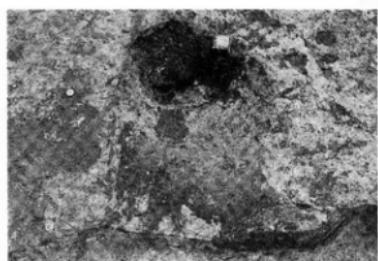
RF010 カマド状遺構



同 覆土断面



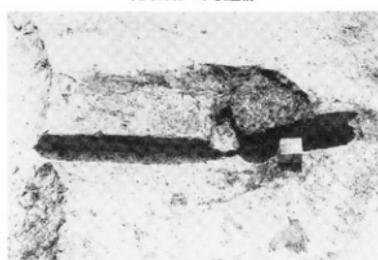
同 断ち割り



RF011 カマド状遺構



同 覆土断面



同 断ち割り



写真図版24 RF010・011 カマド状遺構



RG 059・060溝跡



RG 059 A-A'断面



同 B-B'断面



RG 060 A-A'断面



同 B-B'断面



同 C-C'断面

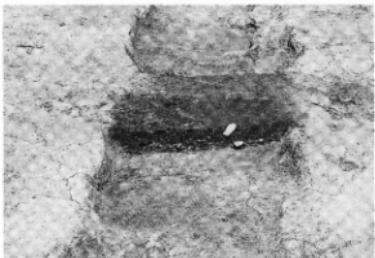


調査風景(中央四角区)

写真図版25 RG059・060溝跡



RG061溝跡



同 A-A' 断面



同 B-B' 断面



RG062溝跡



同 A-A' 断面



同 B-B' 断面

写真図版26 RG061・062(1)溝跡



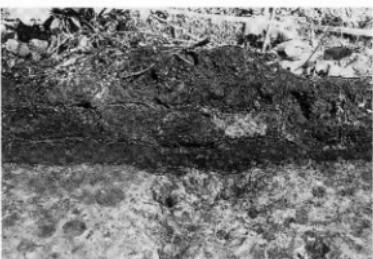
同 C-C' 断面



RG063 溝跡



同 A-A' 断面



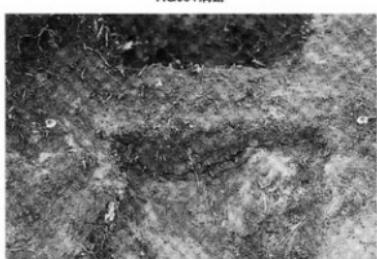
同 B-B' 断面



RG064 溝跡



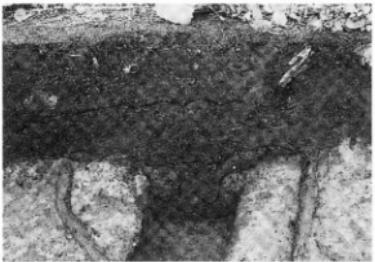
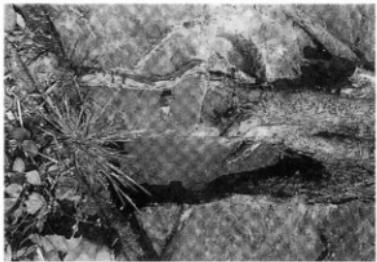
同 A-A' 断面



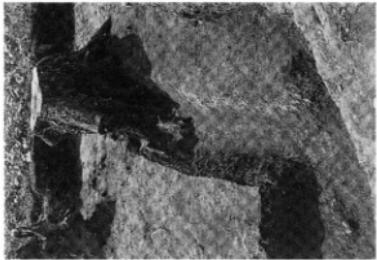
同 B-B' 断面



s 拡張区調査前風景



RG065造構 西半



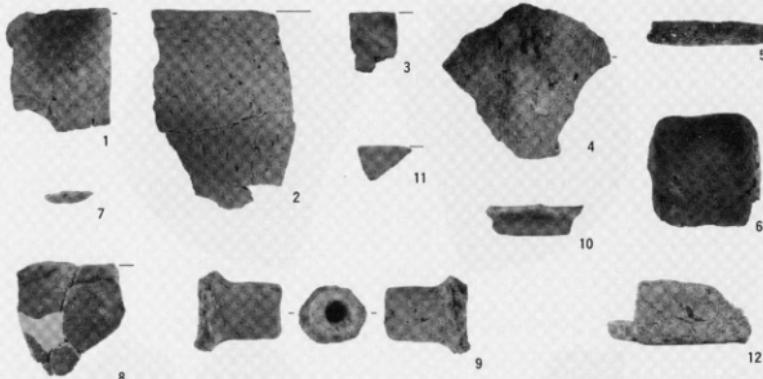
同 東半



s 民家区調査前風景

写真図版28 RG065溝跡

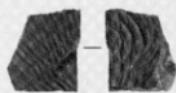
土師器



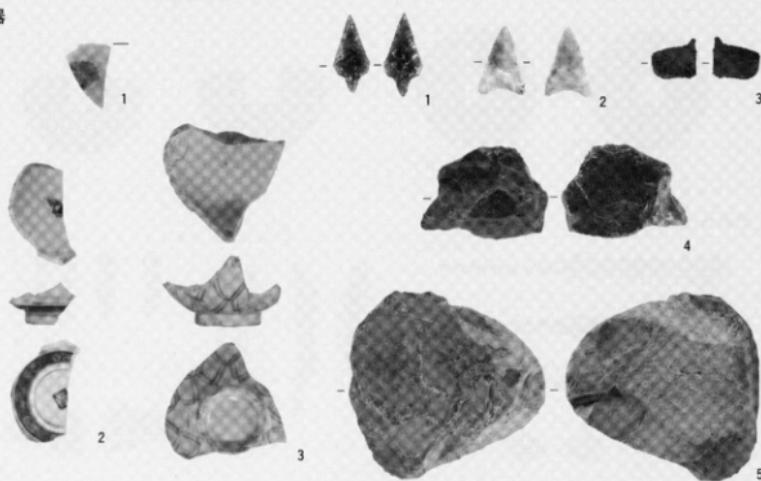
陶器



須恵器

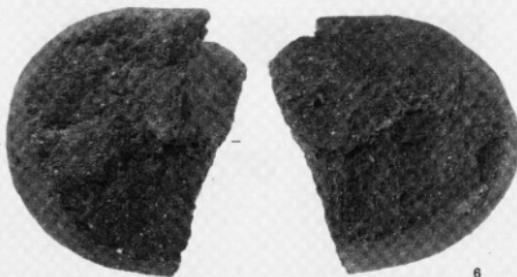


石器(1)

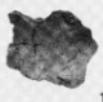


写真図版29 土師器、須恵器、陶器、磁器、石器（1）

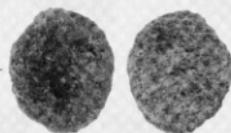
石器(2)



土製品



石製品



錢貨



鐵製品(1)



写真図版30 石器(2)、土製品、石製品、錢貨、鐵製品(1)

鉄製品(2)



4

銅製品



1

写真図版31 鉄製品(2)、銅製品

## 報告書抄録

ふりがな	やもりいせきだいじゅうはち・じゅうくじはつくちょうさほうこくしょ							
書名	矢盛遺跡第18・19次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第555集							
編著者名	金子昭彦・金子佑知子							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田四丁目地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2009年12月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
矢盛遺跡 (第18・19次)	岩手県盛岡市飯岡 新田4地割2ほか	市町村 03201	遺跡番号 LE26-0139	39度 40分 26秒	141度 08分 1秒	2008.05.16～ 2008.11.05 2008.04.16～ 2008.10.30	5,709m <sup>2</sup> (第18次) 476m <sup>2</sup> (第19次)	盛岡南新都市土地区画整理事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
矢盛遺跡	界隈 採集場	縄文時代	袋状土坑1基 縫し穴状遺構1基	石器3点 剪片2点 残核2点 円筒状石製品1点	沖積段丘上だが、当時の立地から通常の集落とは考えにくい。			
	集落跡	平安時代	堅穴住居跡2棟 土坑6基	土器1件 須恵器166g カマド胴口1点 砥石1点? 鉄器1点	沖積段丘上に集落が広がるが、削平で残りが悪い。 R D 158土坑は、底中央に砾石の破片を強め、その上を土器片、炭化材を含む土で覆っていた。			
	居館跡 集落跡	中古 (16世紀?) ~近世	カマド状造構4基 土坑1基 井戸跡2基?	不明鉄製品1点	南側低地(第12・13次調査区)に広がる集落跡の北端。			
		古代~近世	掘立柱建物跡1棟 柱穴2個 溝跡7条	不明鉄製品1点	遺構は、中古~近世に帰属する可能性が高い。			
	墓地	近世末	墓墳を中心にした土坑19基	近世末以降陶器約2kg 铁製刀子2点? 铁錠1点 キセル1点 寛永通宝5点				
要約	<p>矢盛遺跡は、北から南に、それぞれ東西方向に延びる、旧河道(低地)、沖積段丘、旧河道、沖積段丘、旧河道(低地)からなる。</p> <p>これまでの調査から、北端の旧河道～段丘間に縄文時代の落とし穴が列をなし、南端の低地には、中世末～近世の居館、集落跡が現在の縁に沿って東西方向に広がり、段丘上は、平安時代の集落跡が広がることがわかったが、段丘上は削平が著しく残りが悪い。また、南側の段丘上にも、落とし穴が疊らに広がり、この段丘の南端か、あるいは隣接する南側低地の北端かには、縄文時代の貯蔵穴が点在することがわかつた。</p> <p>今回の調査区は、南北段丘と間の低地の西側を中心八箇所に分かれていて(第3・4図)、概ね、これまでの調査結果を勘案しておらず、今回で5棟になる。周辺の遺跡(第6図)に比べ、著しく少ない。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第555集

## 矢盛遺跡第18・19次発掘調査報告書

盛岡新都市地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成21年12月21日

発 行 平成21年12月25日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019) 638-9001

発 行 盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
〒020-8531 岩手県盛岡市津志田14地割37番地2号  
電話 (019) 651-4111

(独)都市再生機構岩手都市開発事務所  
〒020-0864 岩手県盛岡市西仙北一丁目16番10号  
電話 (019) 636-1511

(財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番地1号  
電話 (019) 654-2235

印 刷 (株)橋本印刷  
〒020-0015 岩手県盛岡市本町通1丁目15番29号  
電話 (019) 652-1354

